
華の降る丘で

行見 八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華の降る丘で

【Nコード】

N8297S

【作者名】

行見 八雲

【あらすじ】

夏の暑い日。アスファルトの道を歩いていたはずなのに、気が付けば異世界にいた主人公（18歳・女）。知らないうちにチートな能力を手に入れていた主人公が、元の世界に戻る方法を探しながらも、色んな人々と関わり合っていくお話です。

登場人物紹介

お話に登場した順になっています。

また、ネタバレはありません。お話が進むにつれて、追加・変更されることがあります。

カーヤ・ナツキ（19歳・女）

主人公。地球から突然この異世界にやって来た。チートな能力の持ち主。

見た目は黒目黒髪で、実は表情を崩さないでいれば綺麗系の顔立ち。

本人は、クールぶっているつもりだが、考えていることが顔に出るためばれね。

2

タトリ・ティチエナー（年齢不詳・女）

主人公が異世界で初めて会った人物。

主人公を保護し、生活の基礎を教えてくれた。

ナディリア・ショファル・デイ・シューミナルケア（10代半ば・女）

シューミナルケア帝国の第一皇女。主人公による呼び名は、ナデ

イア様。

好奇心旺盛で、自由奔放な性格。

エリユレアル・インフェリオ・デュ・シューミナルケア（20代前半・男）

シューミナルケア帝国の第一皇子。光属性の持ち主。主人公による呼び名は、エル殿下。

容姿端麗、文武両道。まさに皇子様。基本落ち着いた穏やかな性格だが、時々遊び心を出す。

ハティッド・ベレアス（20代前半・男）

エル殿下の執務補佐。主人公による呼び名は、ハティさん、のち、ハティ様。

冷静沈着で時々鬼畜。そして、ごく稀にデレる。

カークラント・オシフ（20代前半・男）

エル殿下の護衛騎士。主人公による呼び名は、カクさん。

基本陽気で明るいが、幽霊などが大嫌いな、怖がりな性格。

スケイアス・レーサー（20代前半・男）

エル殿下の護衛騎士。主人公による呼び名は、スケさん。

基本無口無表情。実は、面白そうなのが好きな、謎多き人物。

バルール・アニン（15歳・男）

新米兵士。主人公による呼び名は、バルールくん。
ヒューゴの子孫で、長年とり憑かれていた。

ウエツテルテネス・ジンセラム・デユ・シューミナルケア（享年
34歳・男）

第29代シューミナルケア帝国皇帝。主人公による呼び名は、ウ
エ皇帝。

アイゼルリーテ・ジョレス・デエ・シューミナルケア（旧姓：ア
イゼ・モリーナ）（享年26歳・女）

城の武器庫のある建物をずっと彷徨っていた幽霊。ウエ皇帝の寵
妃。主人公による呼び名は、アイゼル妃。

ヒューゲンバーク・ハージェス（享年33歳・男）

ウエ皇帝の従兄で、護衛騎士。ウエ皇帝とアイゼル妃とは幼馴染。
主人公による呼び名は、ヒューゴさん。

イディシオム・シューミナル（男）

シュールミナルケア帝国第1代皇帝。光属性の持ち主。

1・異世界に來たみたい。(前書き)

拙い作者の、初投稿作品です。未熟な文章で、更新も不定期になると思いますが、温かく見守って頂けると助かります。

1・異世界に来たみたい。

気が付けば異世界だった。

いや、どこの小説の始まりの文句だって話だけど、私が実際にこの1年生活した結果、ここは異世界というやつだと思っ
た。世界に足を踏み入れたのは一瞬のことだった。

太陽が照りつける中、じりじりとした暑さにぐったりしながらア
スファルトの道を歩いていた。

そして、ふと顔を上げた瞬間、巨木生い茂る森の中に佇んでいた
のだ。

は？え？何？？

当然に状況が分からず、辺りをきよろきよろと見回してみた。

道を間違えて森林公園にでも迷い込んだのかも思ったが、うちの
近くにこんな、白い犬神の出る某ジリアニメかと思うような樹
の生い茂る公園はない。

地面には枯葉の混じる濡れた土。周囲には両手を広げて抱き付い
ても追いつかないほどの太い幹の木々。葉の擦れる音とともにちら
ちらと揺れる木漏れ日。

先ほどまで感じていた茹だるような暑さも、脳にまで響くような
蝉の声もどこにもない。

湿気を含まない穏やかな気温に、どこからともなく可愛らしい鳥の囀りが静かな空間に響く。

明らかに、先ほどまでとは違う状況に、私は小一時間ほど呆然と佇んでいたと思う。

この時、私が幸運だったのは、私のいた近くに人を襲うような動物や魔物がいなかったことと、とりあえず歩き出して3時間ほどで、森の中にぼつんと人の住む小屋を見つげられたことだろう。

恐る恐る、その小屋の扉をノックすれば、キィと高い音を伴って扉が開き、そこから顔を覗かせたのは、これまたお城の動く某ジブアニメの主人公が魔法で変えられていたときのような姿の老婆だった。

私はこの時、誰でもいいからこの状況を説明してほしいかった。

だから、不審そうな顔をしながらも家の中に入れてくれ、食事をさせてくれたこの老婆　　名を、タトリ・ティチエナーという　　にありのままを全て話した。

タトリさんは、最初は不可解そうな顔をしていたけど、私の必死な様子が伝わったのだらう、話を聞き終わった頃には私の置かれた状況を理解しようとしてくれていた。

そして、タトリさんと色々話した結果、私はこことは別の世界から迷い込んできたのだらうということ。

別世界の人間が迷い込んできたことは、タトリさんの知る限りは無いということ。

だからタトリさんも帰り方は分からないということだった。

悲嘆に暮れる私に、タトリさんはこの家に居ればいいと言ってくれた。

右も左も分からない異世界で、このまま放り出されれば野垂れ死に確実な私にとって、タトリさんの申し出は雲間に差し込む光のようでありがたく、私は日本人特有の謙虚さも忘れて、「出来ることは何でもします！よろしくお願いします！！」と頭を下げていた。

その後分かったことだけど、タトリさんはこの小屋に一人暮らしをしていて、山で採った薬草なんかを調合して町に売りに行っている、いわゆる薬師というものらしい。

私も、タトリさんに付いて行つては薬草のことを学んだり、この世界では誰もが当然に 魔力の大小や使える魔術の多少はあるにしても 使える魔術についても教えてもらった。

そう言えば、今更ながらに言葉が通じたり、文字が読めたりすることが不思議になったけど、いくら考えても答えは見つかりそうになく、それも一つの幸運だったと、私は考えることをやめた。

そして、タトリさんと色々と試したり、タトリさんの持っていた本なんかを読んだりした結果、私には膨大な魔力があることが分かった。

とはいっても、はっきりどのくらいと分かるわけではない。ただ、日常的に色んな魔術を長時間使ってみたが、魔力切れでだるくなったりしたことがないから、とりあえずたくさんあるんだろうな、と分つたくらいだ。

それから、魔術は、呪文や魔方陣なんかもあるけど、一番大事な

のは確固としたイメージのようだ。

そして、その辺に関しては、私の元の世界での知識が非常に役に立った。

現実にあつたものに限らず、アニメや映画で見たものを思い浮かべたりすることでも、イメージが固まり色んな魔術が使えた。

他にも、地理や通貨、日常生活に関することもタトリさんから色々教えてもらった。

そして、私がこの世界に来てから、1年ほど経つたと思われるこの日、私は旅に出ることにした。

目的はもちろん、元の世界へ戻る方法を見つけることだ。

だって、あつちの世界には、家族も友達もいる。残念ながら彼氏はいなかったけど。でも、大切なものがたくさんあるのだ。

この世界では、私は独りで。タトリさんという繋がりはできたけど、それでも自分は何者で何処に居ればいいという確固たるものが何も無い。

それは、足元が不確かになるほどに不安で怖くて、何かをして気を紛らわせていなければ、崩れ落ちてしまいそうだった。

私という存在がすべて消えてしまうような、目の前が真っ暗になるほどの絶望的な気分。

私の居場所がどこかわからなくて、ふとした瞬間に内臓が締め付

けられるような恐怖に襲われた。

全てが夢ならいいのにと、何度も夜中に目が覚めては涙を流した。

だから、わたしを存在させるために、希望を見失わないでいられるように、私は足掻こうと決めた。

どれほどの時間がかかっても、どんな困難があっても、私は私の世界に帰ってみせる。

その決意が、私を生かしている原動力となった。

2・旅の始まりです。

タトリさんには、言葉では表せないほどの恩があったけれど、精いっぱい感謝を伝えて、私はタトリさんの家を後にした。

手にした荷物は、小さなリュックが一つに、護身用の武器を腰から掛けた。

路銀は、タトリさんに学んで採った薬草を売ったお金が少しと、自分で作った魔石が数個　　街でこれ売れば、けっこうなお金になる　　だ。

タトリさんの家の近くの町には何度か行ったけど、それよりも遠くへは行ったことがなかった。

とりあえずは、国中の物や知識、技術が集まっている、この国の首都　帝都レーンコートに向かうつもりだ。

目の前に広がる景色と、帝都へと繋がる道を前に、私は、僅かな期待と大きな不安と、そして少しのわくわくを抱きながら、大きく息を吸い込んだ。

タトリさんや近くの町の人に聞いた話だと、この世界には3つの国と、その他の地域には国ではなく、色んな種族や民族が集落を作って暮らしているらしい。

そして、世界の4分の1を占める大国が、私が現れたここ、シューミナルケア帝国だ。

その他に、シューミナルケア国よりも小さな国、ツアラトウス王

国とテミズ教国があるらしい。

シューミナルケア国内で、帰る方法が見つからなければ、これらの国にも行くことがあるかもしれない。

そんなことを考えながら、最初に立ち寄った大きな街でギルドに登録した。

この国で、特に身分や学歴、資格が無い者がお金を稼ぐには、ギルドに登録するのが一番手っ取り早いらしい。

それから、ギルドには色々決まり事があり、それを破った者には厳しい罰則があるから、ギルドに登録していると一種の身分証明にもなるようだ。

私は、名前　カーヤ・ナツキ、職業　魔術師で登録した。

ちなみに、格好は日本人の一般的装備の黒目黒髪。顔はまあ………普通だと思っ。

大学に入って直ぐの夏休みにこっちに来たから、まだ18歳ね。今の格好は、髪は後ろで一つにくくり、チュニックみたいなシャツに膝下丈のパンツ、それに編上げのブーツを履いている。

そして、上から薄い水色のポンチョみたいなのを被ってるの。

こちらの世界では、女性はスカートが一般的なんだけど、農作業する人や冒険者なんかはズボンを穿いている人も多い。動き易さや安全性重視ってことね。

ギルドに登録するにあたっては、一応、審査みたいなものはあつ

ただ、私の武器を使ってみせたら無事合格をもらえた。

ギルドには、登録者の実力によってランク分けがしてあって、それは上からS・A・B・C・D・E・Fとなっている。

そして、ランクによって受けられる依頼も異なってくるみたい。

さらに、依頼をこなしたり、魔物を討伐したりしながら、一定の条件を満たすと上のランクに上がれるとのこと。

私は登録したての時はFランクだったけど、こつこつと依頼をこなし、Eランクに上がった頃にはある程度のお金も貯まったので、街を出て再び帝都へと向かった。

この世界には、移動手段として馬もあるし馬車もあるけど、それには何かとお金がかかるから、私は歩きながら移動していた。

この世界に来てから、身体能力も上がったみたいで、丸一日歩いてもあまり疲れないし、魔法があるので野宿も平気だ。

だから、道沿いの村や畑、森や泉など様々な景色を見ながらマイペースに歩いていった。

3・よくある展開(?)に遭遇しました。(前書き)

残酷描写あり。でも、拙い戦闘シーンですみません。

3・よくある展開(?)に遭遇しました。

帝都まで徒歩で後8日ほどかかるかな、等と考えていたある日。

片側に森、そしてもう片側には雑草の生い茂った荒地が広がる、踏み固められただけの道を歩いていると、道の先の方から悲鳴や喧騒、金属のぶつかるような音が聞こえてきた。

何事かと小走りで近づくと、道の真ん中で3台の馬車が立ち止まっております、その周囲には兵士だと思われる人達が、大きな驚のような魔物数十匹を相手に剣で応戦していた。

しかし、相手は巨大な羽を広げ上空から鋭い鉤爪で襲ってくるため、剣での対応はかなり苦労しているようだ。

しかも、やつの爪や嘴には毒があるから、掠り傷でも付けられることは危険だ。あ、ちなみに、この知識はギルドの魔物図鑑によるものです。

いや、しかし、3台の馬車のうちの1台、真ん中のやつってなんか妙に豪華なんだけど。

前後の2台がシンプルで造りの頑丈さを重視したような茶色の馬車なのに、真ん中のは真っ白で、金色で細かい模様が施されているみたい。

しかも、あのドアのところの紋様って、もしかして皇家の……。

あれ？何だろう、このお決まりの展開。

これ、もし私が助けちゃったら、何か面倒臭いことに巻き込まれちゃったりしない??

助けて、

「ありがとうございます！」

「当然のことをしたまでサ！じゃあ、この先気を付けてね でわ！
！」

「あ！せめてお名前を！」

「名乗るほどの者じゃないさ〜」

とかつて、何事もなく立ち去れるだろうか。

まさか、「助けてくださったお礼に」とかつて、どっか連れて行かれちゃったりとかしないよね？

もしくは、「貴様のような庶民に」とか暴言吐かれちゃうと、心折れちゃうよ？

とつさに、私は辺りを見回した。

私以外に、この窮地を救える真のヒーローがいるんじゃないかと思っただからだ。

だが、残念なことに私以外には人っ子一人いなかった。通行人Aも村人Bもいなかった。

私がそんなことを考えているうちに、護衛と思われる兵士の人達も徐々に押され始めており、馬車を囲む輪が狭まってきている。兵士の一人が、魔物の爪にやられたらしく、腕を抑えて膝を付いた。

ふうと一つ溜息を吐いて、私は腰の武器

黒光りする15セ

ンチほどの銃を1丁構えた。

あ、ちなみにこの銃、弾は入ってませんよ。

これは、私の魔力を圧縮し弾丸にして、撃ち出す武器なのです。いや、臆病者の私には、剣のような、敵を倒した時にその感触を感じたり、返り血なんか飛び散るような武器は怖くて使えないので、苦肉の策で飛び道具にしたのですよ。

この世界に来て間がない時、タトリさんの家の近くで、食事のために兎のような動物を手にかけて。

じたじたと暴れる体を押さえつけ、手にしたナイフを突き立てるとき、恐怖に手が震えてどうしようもなかった。

兎もどきの命を奪った後、手に残った感触と、掌にこびりついた血に、気が狂いそうなほどの罪悪感を感じて、私はその場でへたり込み、何度も謝罪の言葉を繰り返しながら泣き叫んだ。その後、しばらくお肉が食べられなかった。

命を奪うことが怖くて怖くて怖くて。

何もしなくてもお肉が手に入る元の世界が、いかに平和で、いかに恵まれていたか、私は噛み締めるように思い知った。

けれど、自分が食べるために、生きるためには、他の命を奪わなければならなかった。

特に、凶暴な魔物がそこに出没するこの世界で、武器を持たずにいるのは殺してくださいと言っているようなものだから、武器を持たないという選択はなかった。

相手が魔物だからといって、生き物を殺す罪悪感には簡単に捨てるられない。

いや、殺すことへの罪悪感、震えるほどの恐怖感は決して忘れてはいけないのだと分かっている。

でも私は弱いから、自分が壊れないために手に感触の残らない武器を選んだのだ。

飛び道具を武器とすることに決めて、最初に試したのは、某漫画の霊界探偵の主人公が使うような指先に霊力　　私の場合は魔力だが　　を集めて発射するという方法だった。

いや、普通に魔術も使えたけど、どうしても規模や範囲が大きくなりすぎるので、ピンポイントで敵を狙える方法を考えていたのだ。

この方法は、確かに命中率も威力も良かったけど、何というか撃つた後の味気なさとか、武器を持った気がしないところから、私は銃を作ることにした。

何より、旅の途中に武器を見せてくれと言われて、親指と人差し指で銃の形を作ってみせるのは、何か白い眼で見られそうだという危惧もあったし。むしろこっちの心配の方が大きかったし。

というわけで、タトリさんの家の近くの山で採れた金属を魔術で加工して、二丁の銃を作ったのです。

いや、私のような素人にもそれなり物が作れるんだから、魔術って本当に便利よね。

でも、デザインとか装飾にはあまり詳しくないから、シンプルで真っ黒なのだけ。

さて、構えた銃に、火の弾丸をイメージして魔力を込めた。
驚のような魔物が毒を持っていることから、火で焼いた方が良さ
だろうと思ったからだ。

狙いを、兵士を襲っている魔物の一つに照準を合わせて引き金を
引く。

パシュツという、サイレンサー付の銃のような音がして、真っ赤
な弾丸が銃口から飛び出す、と紅蓮の軌跡を残しながら魔物の羽に
当たり、途端に魔物はゴウツという音と共に赤い炎に包まれた。

ぐぎややあああ!!!

甲高い声を上げた後、魔物は瞬時に焼き尽くされ、黒い灰となっ
て消えた。

間を置かず、私は次々と弾丸を発射しては、魔物達を打ち落とす
ていった。

どこからともなく飛んできた炎の弾丸に、それまで魔物と戦って
いた兵士達も混乱していたようだけど、誰かが私の存在に気付いた
後は、呆気にとられながら魔物達が倒される様を見ていた。

やがて、馬車の上空を覆っていた魔物達をすべて倒すと、私は銃
を腰のホルダーに戻し、馬車の方へ近づいた。

警戒心や不審を顕わにする兵士達に構わず、地面に座り込んだり、
倒れたりしている兵士に近寄った。

いや、まあ別にこんなことしてないで、さっさと立ち去ればいいと思うんだけどね。

でも、私が介入すべきか悩まずに、直ぐに魔物を倒していれば、彼らは傷を負わずに済んだかもしれないと思うと、小市民の罪悪感がちくちくと疼くのです。

だから、私は座り込む兵士の横に膝を付き、苦しそうに息を吐く兵士の、緑色に変色した傷口に手を翳した。

「解毒。治療。」

ぼつりと呟いて魔力を放出すれば、傷口はみるみる元の肌色を取り戻し、気づけば傷口も綺麗に消えていた。

黙っていても魔術は使えるんだけど、こうして言葉にした方がイメージを固めやすいのよね。

かと言って、RPGゲームみたいな回復呪文を唱えるっていうのも………何か精神的に激しい抵抗があったもので、大人しく漢字でイメージしているのです。

瞬時に治った傷に、また周囲からざわめき上がるけど、私は構わずに次々と負傷者を治療していった。

そして、すべての治療が終わった後、すつくと立ち上がり、事態に付いて行けていない周囲を放置して、颯爽と立ち去ろうとしたのよ。

したんだけど………！

「お待ちください！」

まさに鈴の転がるような凜とした声が、無傷の真っ白い馬車の中から聞こえてきた。

4・やっぱり二ついつ展開ですか。

え？これ、私にじゃないよね？？周囲の兵士さんに対してだよ
！??？

と、すつとぼけて足を進めようとしたんだけど、それよりも前に馬車の扉が開いて、一人の40代くらいの侍女っぽい格好の女性が下りてきた。

「どうぞお待ちください。姫様があなたにお礼を述べたいと仰っておられます。」

あー、うん、お礼か。お礼を聞くぐらいなら、まあ、大丈夫だよ
ね。

この申し出を無視して行く方が、何かまずい気がするしね。

私がそんなことを考えていると、馬車の扉から一人の少女が、執事っぽい男性の手を借りて地面へと足を下ろした。

うん。まさにお姫様って感じ。

お尻辺りまでの長さの金色のふわふわウェーブの髪に、ぱっちり
と大きなエメラルドグリーンの瞳。

服装は白いフリルがふんだんについた、淡いピンク色のドレス。
身長は、私の胸元ぐらいかな。

あー、でも私を見上げる目が、何だかきらきらしているように見える。う…嫌な予感……！

「あのっ！助けて頂いてありがとございましたー！」

元気いっぱい言い切ったお姫様。

うん、身分の高い者にありがちな、偉そうな態度じゃなくて良かった。

よし！ここは、さっきシュミレーションした言葉を言って、失礼の無いように速やかに立ち去ろう！

「いえ、当然のことをしたまです。それでは、私は先を急ぎますのでこれで。」

にこりと笑みを浮かべてそう言い、その場を離れようとしたが。

「あ…あの！お名前は！？」

さらに問いかけてくるお姫様。

「いや、名乗るほどの者では………」

あつ。お姫様の斜め後ろに立っている執事さん　あ、こちら
は、50代ぐらいの厳格な雰囲気、白髪のオジサマです。　に
睨まれました。

姫様に無礼は許さん！つて、目が語ってます。

侍女の方も、いつの間にか周囲に集まった兵士さん達も、じっ

とこちらを見てます。うづうづ……こづいづ状況苦手だあ…。

「……………カーヤ・ナツキと申します。」

「先ほど魔物を倒したのは、魔術ですか？」

「はい、火の魔術を使いました。私は、魔術師をしておりますので。」

はきはきと話すお姫様。好奇心いっぱいって感じだ。

えと、もういいかな。立ち去ってもいいかな??

どうすべきか悩む私の前で、お姫様は執事さんと侍女さんに目配せをして、うん、と一つ頷いた。

「カーヤさん!どうか、わたくし共と一緒に、帝都に行って頂けませんか?」

「はい?」

「助けて頂いたお礼もしたいですし。何より、また魔物に襲われたときにお力をお借りしたいのです!」

いやいや、前半はとにかくご遠慮したい。ついでに後半も断りたい。

帝都までの護衛って言ったって、10人ほどの屈強な兵士達がいるじゃないか。

そう思って、ちらりと兵士達に視線を投げると。

「この者達は、地上戦においては非常に頼りになる者達ですが、先ほどのような空からやってくる魔物に対しては、十分な戦力とは言えません。」

本来ならば、お抱えの魔術師も同行する予定でしたが、都合が悪く同行できなくなってしまうまして。

どうか、姫様の護衛を引き受けては下さいますか？」

私の疑問を感じとり、それに答えたのは執事さんだった。

問いかけの形をとってるけど、反論は許しません、って気迫がひしひし伝わってくる。

ああ〜！やっぱり、面倒なことになった！！

私は、がっくりと肩を落とした。

5. 前書き (前書き)

ストックがある場合は、さくさくと更新していけたらと思います。

(^ | ^ :) a

5. どうしてここにいるのでしょうか？

で、まあ、旅自体は非常に快適でした。

道中はお姫様の馬車に乗せてもらったけど、お姫様は、傲慢な態度なんて全くなくて、良く話し良く笑う。

ちなみに、お姫様の名前は、ナディリア・ショファル・デイ・シューミナルケア、というらしい。

「名乗るのが遅くなってしまい、申し訳ありません。」と照れたように謝られた。うん、可愛かった。

そして、やっぱり、シューミナルケア皇家の第一皇女様らしい。

名前を噛みそうになった私に、ありがたくも、「ナディア様」と呼ぶことを許してくださった。

本当は「ナディア」で良いと言われたけど、小心者の私に、皇女様の呼び捨ては心臓に悪い。断固として断った。

執事さんも侍女さんも、私の身の上　山奥の町から来たとかギルドに登録してあるとか　を話すうちに、私に対する警戒心を少しずつ解いてくれたみたいだし。

途中、立ち寄った町では、私の分の宿もとってもらえた。宿代もあちらが持ってくれるらしい。

馬車に揺られながら、護衛の報酬の話もした。

私は、ギルドでの護衛の報酬の相当分で良いと言っただけで、ナディア様は、助けてもらったお礼もあるのだからと、上乘せすると言って聞いてくれなかった。

こればかりは譲れないぞと、色々と話し合い、合間に侍女さんや執事さんの口添えもあって、報酬にはほんの少しの上乗せと、お礼としては、帝都にある帝国図書館の特別保管庫に収められている魔術書の閲覧許可をもらうということでもまった。

いや、やっぱり元の世界に帰る当てとしては、魔術が一番有力かなと思って、そこから探すことにしていたのです。

でも、さり気なく聞いてみたところによれば、この世界には、どこから何かを召喚したり送ったりという、空間を越える魔術は無いらしい。

それが、存在しないからなのか、知られてないからなのかは分からないけど、だからってそれで諦めるなんて選択肢は無いからね！

とりあえず、世界中の魔術の中で、特に危険だったり発動が困難だったりする魔術に関する本が、その特別保管庫には数多く収められているらしい。

ので、ちよつとその本を読ませて欲しいとお願いしたのです。

職員が同行するとか、いくつかの条件は付いたけど、何とか閲覧許可をもらえたので良かった良かった。

途中1回魔物の襲撃があったけど、今回は地上戦だったので、私は馬車の周囲に防御結界を張っただけで、後は兵士さん達にお任せしました。

今回は負傷者も出ず、ほっと一安心。

そうこうしながら、帝都へは2日ほどで着いた。

いや、歩いて行こうと思ってたから、随分と早く、そして快適に着いてしまって、何か得した気分だ。

そう考えると、あそこで誘ってくれたナディア様さまさまかも。

と、ふへ〜と息を吐いていたんだけど……………。

目の前、8メートルほど先の数段の階段の上には、堂々とした威厳に満ちたシューミナルケア帝国皇帝陛下。

その両隣に立っているのは、第一皇子と第二皇子だろう。ふふふ… ナディア様とよく似てらっしゃる……………。

あ、第二皇子の隣にナディア様発見

半分魂が抜けかけながら、私はどうしてここにいるのか、これまでを振り返っていた。

そう、確か、無事帝都について、これでお役御免、お世話になり

ましたと、降りてもらおうとしたんだけど、馬車は止まってくれず、そのままお城へ入って行ってしまった。

は？え？私はどうすれば？？と、きよろきよろしているうちに、体や服の汚れを落とされ、幸い服装はこのままでいいと言われた。気が付けば謁見の間に足を踏み入れていたのだ。

何故？？？？？

6・誰か王様との対面のしかた教えて！

「そなたが、ナディアを助けたという魔術師殿か。」

静まり返った空間に、皇帝陛下の厳かな声が響く。

皇帝陛下の前には私一人。え？これどうすればいいの！？生まれつき一般庶民の私には、正式な礼の取り方なんかまったく知らないんだけど！！

あわあわとパニックに陥りながらも、私は何とか皇帝陛下の問いかけに答えねばと、必死で言葉をひねり出していた。

「いえ、たまたまその場に居合わせましたので、少々お力添えをさせて頂いただけでございます。」

もおおおおおおお！！礼とか言葉使いとか全然できてねえ！！え、これ、不敬罪とかで捕まったりとかしない？処刑されたりとかしないよね！！？

「だが、そなたがいなければナディアの身も無事ではなかったと聞いた。ナディアの父として心から感謝する。何か礼がしたいのだが、希望はあるだろうか。」

おお！陛下は不敬罪をスルーして下さった！！
うわ〜いい！もう、お礼なんかいいから、今すぐこの場を立ち去りたい！！！！

「お礼でしたら、ナディア様から十分に頂いておりますので、お気持ちだけ賜りたいと存じます。」

だからもう帰して。

気を抜けばふうと意識が遠退きそうになりながら、私は何とか答えを返した。ああ、もう、一国の王に対する言葉使いなんか知るか――！！！！

「ふむ、確か、帝国図書館の特別閲覧許可だったか。だが、それだけでは我らの気が済まぬ。他に何か望むものはないか。」

「旅の資金や、女性なので宝石などがでしょうか？」

陛下の言葉の後に、別の声が問いかけてきた。

視線を移せば、階段の下に、文官のような恰好をした40代くらいの神経質っぽいオジサマがいた。

「宝石　は、荷物になるのでちょっと……。お金も、皇女様から十分な報酬を頂きましたので、それ以上は不要ですから……。」

とりあえず、神経質っぽいオジサマの方を見て答える。

いや、分かるのですよ！ここで借りを残しておきたくないってお気持ち持ちは！

しかしですね！宝石は、装飾品に興味の薄い私にとっては荷物にしかないし、皇帝陛下からもらった物となるとヘタに売れないし。

お金も、過剰にあると身を滅ぼすしね。それが、自分の状況に不相当な額ならなおさらね。

「いや、本当に、もう十分なんで……………」

と困り果てる私に、苦笑いを浮かべる姫様を除いて、周囲の皆様は一樣に驚いた顔をしてらっしゃる。

いやいや、そんなにがめつそうに見えますか私！

もしくは、お礼目当てに助けたと思われてんの！？それはかなり心外ですっ！！

と、ちよつと内心で腹を立てながらも、私は頭を悩ませていた。

うーん…物じゃなくて、後腐れなくて、あんまり費用もかからない……………」

頭をフルで動かしながら、ちらりと謁見の間を目線だけで見回す。

そういえば、この謁見の間って変わった造りなのよね。まるで

そんなことを考えていると、私の頭に、はっ！と一つの案が閃いた。

「あ、でしたら、一般市民が立ち入ることの出来る範囲で構いませんので、このお城の中を見学させて頂けませんか？」

ぱつと顔を上げて、皇帝陛下に向かって訪ねてみる。

いや、このお城を馬車から見た時も驚いたけど、本当にすっごく大きいのよ！しかも、真っ白な石造りで、前にテレビで見た外

国のお城みたいだった。

私は生まれてこの方海外に旅行なんて行ったことなかったから、外国のお城ってすごく興味がある。

私が見たことのあるお城っていえば、日本式のか、ディ ニーランドのシン レラ城くらいだし。

タトリさんの家にいた頃、近くの村で帝都に行ったことのある人の話を聞いたけど、このお城は、年に一回建国記念日の日に、一般市民に公開されるらしい。

今年の建国記念日はもう過ぎちゃってるけど、どうせなら観光してみたい！

そう思って口にしたんだけど、皇帝陛下やその周りの方達は、何やら考えている風だ。眉を顰めている人もいる。

あれ？これは、無茶なお願いだったっばい？？

「あ！無理なら良いです！」

私は、慌てて手を振った。

そうですね、やっぱり突然お宅を訪問させてくださいって言葉でも困りますよね。

掃除とか片付とかしなくちゃいけないし。隠さなきゃならないものもあるだろうし。

「城を見学して、どうするつもりだ。」

まずいことを言ったかと、私が体を硬くしていると、皇帝陛下の隣から、張りのある若々しい声が聞こえた。

視線を映せば、金髪で背の高い、おそらく第一皇子だと思われる人が、じつと私を見ていた。

威風堂々とした王者の貫録だ。見た感じ20代前半くらいかしら。

「いえ、私は村を出て国中を旅しているのですが、遺跡や建造物などに非常に興味があります。このような立派な城を見たのも初めてですから、できれば見学してみたいなあと……。」

最後の方は声が小さくなってしまった。

「いやいや、駄目なら駄目で良いですから！そんなに睨まないでください！」

モウ嫌ダ。才家力エリタイ……。な心境になっていると、様子を見ていた皇帝陛下が一つ頷いた。

「ふむ、よかるう。誰かに案内させるゆえ、ゆるりと見て回られるがよい。」

「あ……ありがとうございます！」

おお、これでもう、この話終わりだよね！退出していいよね！？

「今日はお疲れでしょうから、一晩ゆっくりと休まれて、明日見学なさると良いでしょう。」

最後に、階段下の神経質っぽいオジサマがそう締めくくり、私はよじやく謁見の間を退出することを許された。

その後、通された客室は広がった。

しかし、私はゆっくりと部屋を見学する余裕もなく、続きの間になっている寢室のベッドへ倒れ込んだ。おお、柔らかい！

ああ、もう精神的にすっごく疲れた！！

もう二度と、王様と謁見なんかしたくない！

あ、でも、一庶民が王様に会うことなんて、今回みたいなハプニングがない限り一生無いか。

だったら、今回のことはラッキーだったと思っておくべきなのかしら。

でもなあ、ただ疲れたただけだしなあ。ここの国民じゃないから、今一つありがたみが無いっつーかね……。

などとつらつらと考えているうちに、私はすっかり寝入ってしまったのでした。

体も洗ってないし、夕飯も食べ損なっただけ、……………まあ良いか。

7・異世界のお名前事情。

翌朝起きると、20代くらいの侍女さんが、部屋に入ってきて、身だしなみを整えるための支度をしてくれたり、朝食の用意をしてくれた。

昨夜のことに関しては、ナディア様が夕飯に誘ってくださったらしいが、私が寝ていると伝えると、ならばそのまま寝かしてあげておいてほしいと言われたらしい。

起こさなくて申し訳ありません、と謝られたけど、いや、もう昨日は色々と疲れてたから、寝させておいてくれて助かりました。

後で機会があれば、ナディア様にもお礼を言っておこう。

身支度を終え、朝食を食べ終わると、侍女さんがある部屋の前まで案内してくれた。

侍女さんが扉をノックして用件を伝えると、中から騎士らしい鎧を着た人が開けてくれて、私だけ中へ通された。

テニスコート1面が入りそうなほどの広い部屋には、壁に本がぎ

つしり詰まった本棚がいくつも備え付けられており、私が入ったドアの正面には大きな窓が一定間隔で3面ほど並んでいた。

その窓の前には、重厚な大きな机がどんと置かれていて、部屋の中央から少し横にずれた辺りには華美だが落ち着いた感じの応接セットが置いてある。

その一つの、椅子に腰かけていたのは。

「ナディア様。お早うございます。」

今日のお召し物は柔らかな萌木色なのです。良くお似合いです。

笑顔で挨拶をすれば、ナディア様も笑顔で返して下さいました。

おおお、朝から眩しい笑顔です！

その場で、昨夜のことも謝ると、ナディア様は「疲れておいでしたのね。」と、こちらを気遣って下さる。

いえ、旅の疲れではないんです！謁見の疲れだったんです！とは言えず、とりあえず曖昧に笑って感謝を述べた。

「良いか？」

そう呼びかけられて顔を上げると、窓の前の大きな机のところに背の高い男性が立っていた。

おお、窓から差し込む光で髪がきらきらしていますよ。見事な金

髪。群青色の上着が、すらりとした体躯に非常に似合ってます！

はい、第一皇子様がいらっしやいました！

……………え？何でいるの？？

てつきり、お城観光のために呼ばれたと思っていた私は、思わぬ人の存在に、妙な不安が沸きあがった。

「俺は、シューミナルケア帝国第一皇子、エリユレアル・インフエリオ・デュ・シューミナルケアだ。」

お……………憶えられない！というか、私だったら、絶対フルネーム名乗れない！噛みすぎで口の中血だらけになりそう。

しかし、エリユ……………エル殿下は、まさに王子様とした人だった。

美術館で見た彫刻のように精巧に整った容姿に、輝く金色の髪。

あ、殿下は、真夏の空のような真っ青な瞳だ。

贅肉などどこにもないすらっとした長身。佇まいも堂々としていて姿勢もよく、立っているだけで気品が漂ってくる。

おー！何か、小説とかに出てくる美形の王子様を具現したような人だ。かぼちゃパンツじゃないけど。

伝説上の生き物に会った気分。ありがたや〜（なむなむ）。

次に、殿下の隣にいた人が紹介された。

何でも、殿下の補佐をしている人らしく、殿下が皇帝になった暁には、宰相になる予定の人らしい。

この人もすごい！紫がかった白銀の背中までの長さの髪を紐で一つにくくった、冷たい感じの美人さんです。………男性ですけれども。

しかも、銀フレームの眼鏡装備！

背も、殿下と同じくらいの高さで、衣装は白い文官服。

名前は、ハティッド・ベレアス。

見た目クールビューティーなのに、何か可愛い名前だな。ハティさん。

それから、室内にいた二人の騎士さん。

一人は、背は高いんだけど、童顔っぽい顔立ちの、赤毛の青年。

気さくな感じで、にっこり笑顔で自己紹介してくれた。

名前は、カークラント・オシフ。

もう一人は、この室内にいる人の中で一番の長身。茶色の短髪で精悍な顔立ち。屈強な感じの細マッチョさん。

スケイアス・レーサーというお名前らしい。

この時点で、私は異世界のお名前事情にぶち当たった。

あれですよ！え、この人の名前って、日本的に言つと、あれじゃね？あの意味じゃね？みたいなの！

そう、お分かりだろうか！？この騎士お二人……………！！

「すつ…スケさんとカクさんって、呼んでいいですかっ！！？」

興奮気味で前のめりに問いかけた私に、二人は不思議そうな顔をしたが、カクさんは笑顔で「いいよ」と言い、スケさんは無表情のままこっくりと頷いてくれた。

おおおおー！異世界すげー！本当にすげー！！まさか、こんなところであの伝説の名前が呼べるとは！！

「そして、ハチベエさ……………」

くるつとハティさんの方を振り返りながらそう言えば。

「変な呼び方しないで下さい。」

……………本が飛んできました。痛い。

7・異世界のお名前事情。(後書き)

何か色々と空振りしてそうですが、生暖かく見てやってください。

m——(;) m

当小説を読んで下さっている方々、お気に入り登録して下さい
た方々、本当にありがとうございます！

8・お城観光ツアーに出発！

まあ、一通り挨拶が済んだところで、私のお城見学ツアーの話になった。

とりあえず、迷子防止と案内にカクさんとスケさんが付いて来てくれるらしいんだけど……。

「俺も行くぞ。」

と、何故かエル殿下まで同行すると言い出した。

仕事があるのに、とハティさんが顔を顰めています。

いや、私は「お二人が案内して下されば大丈夫です！」と、にっこり笑顔でお断りした。遠慮を装って。

うん。殿下いると何か色々と気を使って面倒臭そうだし。

それに、スケさんとカクさんと3人で歩くのって、何かわくわくする。ゴインキョ気分です。

二人とも、タイプが違うけど、どちらも美形で非常に眼福だし、たまには少しぐらい逆ハー気分味わってみたっていいじゃないか！

な〜んで、一人内心でうはしてたのに、やっぱりいるんですよ、殿下が。そして、何故かナディア様も。

というわけで、今、中庭に面した城の廊下を、先頭にエル殿下、その後ろを私とナディア様、そして、その後にスケさんとカクさんという並びで歩いてます。

主にナディア様が城のどこに何がある、みたいな話をしてくれて、それに纏わる話や成り立ちなんかをエル殿下が説明してくれた。

こうして聞いてみると、エル殿下は非常に博識で、しかも説明も丁寧で分かりやすかった。ついでに声もよかった。

いや、来なくていいとか考えてて本当にすみませんでした。とても優秀なイケメンガイドさんです。観光地にいたら、数百人の観光客に付きまとわれてそう。

綺麗に整えられた中庭を見ると、ふとあることに気が付いた。

あう、これって、教えた方が良いよねえ…。

でも、教えて信じてくれるかなあ。

かといって、教えずにいて後々何かあったとき、後悔でうじうじしそうだし。

「……………あの…、殿下……………」

私は思い切って、前に行く殿下に声をかけた。

殿下は足を止めて、私の方を振り返る。

「何だ？」

「あの、あそこに……………」

私はそう言っつて、中庭の上空の一点を指差した。

「えと、このお城って、全体に結界が張られてますよね？あそこに
綻びが来てます。」

できれば、宮廷魔術師の方に確認して頂いて、修復した方が……。

そんなに大きな綻びではないですけど、小さな魔物なら入って
くることができそうですし。」

おずおずと言った私に、殿下は驚いた顔をされ、

「お前、結界が視えるのか。」

と聞いてこられた。なんか、お顔が不審げになってます。

「…………ええ、何か、色々と視えるんです。」

だって、仕方ないじゃないですか！視えるんだから！

この世界に来てから、私は不思議なものが色々に見えるようになった。
った。

それは、今みたいな結界だったり、魔方陣だったり、魔術の構成

式だったり。

あとは、いわゆる精霊というものとか、ゆ……幽霊とか。

そりゃあ、最初はパニックになりましたよ。目がおかしくなったか、頭がおかしくなってるんじゃないかと、本気で不安になった。

でも、何かと試してみた結果、確かにそれらはそこにあるみたいだから、私はただ“見える”能力があるんだということが分かり、ほっと胸を撫で下ろした。

あ、でも、普段は感度を落として、あまり視ないようにしてます。だって、そこそこにあるから、いちいち気にしてたら道も歩けなくなるので。

じつと殿下を見上げれば、殿下は何やら思案顔になった後、近くを通りかかった侍女に何事かを言づけた。

「今、魔術師を呼びに行かせている。その者に確認させよう。」

そう殿下は頷いた。

おお良かった、一応信じてくれたみたいだ。

9・で、で、で、出たああああー！！

そうして、また歩き始める。

城の中はぐるぐると入り組んでいて、一人で歩いたらきつと迷子になるだろうなあと思った。

所々に魔術による仕掛けがあったり、隠し通路の入り口っぽいものがあつたけど、その辺は言わずにおいた。

いや、何かまずいモノ見つけちゃったら怖いし、口封じとか勘弁してほしいしね。

城の中だというのに、かなりの距離を歩き、そろそろ疲れてきたなと思いつながら、城の西側の通路の奥。

兵士の訓練場に面した石造りの建物に入ろうとしたとき、何だか嫌な気配がしてつい足を止めた。

急に立ち黙った私に、みんながどうかしたのかと声をかけてくるが、私の目は通路の奥に釘付けだった。

通路の奥は光が差さないのか薄暗く、妙な静けさがやけに不気味だった。そんな中。

ぺた　ぺた　ぺた　ぺた……………

ズル　ズル　ズル　ズル……

誰かが裸足で石畳の上を歩く音と、スカートの裾を引きずるような音が聞こえた。

背中にぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞくと寒気が走る。

慌てて皆の顔を見回すが、みんなは何事かと首を傾げている。

誰かが裸足で歩く音が聞こえないかと問いかけたが、みんな首を振るだけだ。

ど……どうしようとして私が混乱に固まっていると、通路の奥にぼんやりとした人影が現れた。

薄暗い廊下に、ぼさぼさになった金色の髪、所々破れた泥だらけのドレスに、俯いた生気の無い青白い顔。そして、その人の周りを取り巻くおどろおどろしい黒い瘴気。

「わ……わわわわわわわわ……！！」

おかしな悲鳴を上げながら、アホみたいに口を開けて廊下の向こうを凝視する私に、みんなはどうしたものかと困ったような顔つきになっている。

どこがおかしくなったんじゃないかと思っただけな！

くっそ〜！あれが見えて、怖い思いをしているのが私だけだというのが、すごく悔しい！

こつなつたら、みんな道連れじゃあ！！

「可視化！」

私が声を上げると、幽霊のいる場所と私達のいる場所を囲むように、足元に大きな魔方陣が現れる。

そして、その魔方陣に覆われた範囲が、夕暮れのようにぼんやりと暗くなった。

魔方陣の向こうの廊下は真昼だから、その明るさの違いがくつきりと可視化の結界の境を浮き立たせていた。

「きゃあああああああ！！」

いきなり暗くなった周囲に、みんなが辺りを見回していると、私が見たナディア様が、まさに絹を裂くような悲鳴を上げられた。

おお！あれが女性の正しい悲鳴か！勉強になります！

なんて考えているうちに、エル殿下もカクさんスケさんもその女性の幽霊に気付いたようだ。

そちらに視線を釘付けにしたまま、ぴりりと空気が凍る。

ぼんやりと暗い廊下の向こうでは、裾を引きずりながら女性が廊下の突き当たりを曲がるうとし、ゆづるりと顔を上げた。

真つ青な顔色に頬はこけ、唇は血色の悪い紫色。目元は落ち窪んで真つ黒な隈で覆われている。

泥だらけでぼろぼろなドレスに、所々に着いた黒いシミ。そして、胸元には刺されたような傷跡がいくつも見えた。

その傷の生々しさに、ひっと思わず息を飲む。

焦点が定まらず虚ろな目が、私達の方へと向けられ。

「うぎゃー……!!」

「きゃああああ……!!」

「ひiiiiiiii……!!」

同時に3つの悲鳴が上がった。

上から、私、ナディア様、そして……カクさん……。

「つちよ！カクさん、背中に引っ付かないで！背中で念仏みたいな唱えないで……!!」

ナディア様にも左手に抱き付かれ、身動きが取れないし！

私達の視線が、自分へと向けられていることに気付いたのか、幽霊の女性がくわっと目を？く。

そして、ゆらりと宙に浮いたかと思うと、そのままこちらに向かって飛び掛かってきた。

ぎゃあああああ！！なんか、アメリカ版のホラー映画みたい！

いや、日本版みたいに床を這って来られるのも怖いけど、生でやられるとこれも十分に怖い！！しかも何か速い！！！！

エル殿下とスケさんは、とつさに腰に下げてある剣に手をかけた。立派です！それでこそ騎士です！（あ、殿下は違うけど。）

……………おい、カクさん……………。

私は張り付くナディア様とカクさんを引きずりながら、エル殿下の背中に張り付いた。

思わぬ私の行動に、エル殿下が驚いたのが分かったけど、ぐいぐいとエル殿下を押し出す。

あ、今非道だと思ったでしょ！？違うのよ！これにはちゃんと訳が！！

エル殿下の１メートルほど近くまで襲いかかっていた幽霊が、途端に何かに気圧されたように宙で止まった。

そして、何度か挑むような仕草をしたが、結局それ以上近づくとが出来ず、諦めたように廊下の向こうの薄暗い空間へと戻って行った。

それと同時に結界も消え、辺りには昼間の暖かな日差しと、妙な静寂が残された。

私はエル殿下の背中に張り付いたままだし、その私の腕にはナデア様が、背中にはカクさんが未だしがみ付いたままだ。

エル殿下とスケさんは、幽霊の去った方を呆然と見つめていた。

10・衝撃の事実…なの？

その後、お城見学ツアーの中止を高らかに宣言した私に、カクさんとナディア様が頷き、慌てて元の部屋 エル殿下の執務室らしい に駆け戻ることになった。

血相を変えて戻った私達に、室内で仕事していたハティさんはものすごく不審そうな顔をしていたが。

ハティさんの指示で、侍女さんがお茶を用意してくれ、それを2・3杯飲み干したとき、漸く私達は落ち着いた。

そして、事の次第をハティさんに話した。

「で、あれは何だったんだ？」

優雅な応接セットの椅子に足を組んで座り、紅茶を飲んでいたエル殿下が私に問いかけてくる、が。

「いや、私も知りませんよ。もともとあそこにいたんですから。」

思い出して鳥肌の立った腕を私がさすっていると、私と少し離れた場所にある椅子に腰かけ、お茶のカップをテーブルに置いたスケさんが、顎に手をやりながら言葉を発した。

「そう言えば、あの建物の一階は訓練用の武器庫になっているのだが、夕暮れから夜にかけて、女性の亡霊が出ると噂になっていたな。」

「あ！俺もそれ聞いたことある！だから夜にはあそこには近づかないようにしてたのに！」

カクさんは未だに顔色を悪くしたままだ。彼が非常に怖がりなのはよく分かった。

あ、ちなみに、本来なら身分が違うスケさんやカクさんが、エル殿下やナディア様と同じテーブルに着くのは許されないんだけど、実はみんな旧知の仲らしく、公式の場でなければこうして一緒にお茶をしたりするのだそうだ。

どつりで、スケさんもカクさんも、エル殿下やナディア様に対してあまり恐縮してないと思った。

「なぜ、昼間なのにあんなにはつきりと見えたのでしょうか？」

お茶を飲み、ほうつと息を吐いたナディア様が首を傾げる。

そのナディア様の言葉を受けて、エル殿下がじろりと私に目をやった。

「あの時何かを叫んでいたな。何か魔術でも使ったのか？」

じつとり見てくるエル殿下に、私は首を竦めた。……あ、盾にしたの、怒ってます…???

「いや、……だって、私だけ見えてるっていうの何か不公平に思えて……。普段は見えないものが見えるようになる、“可視化”の魔術を使いました。」

えへへくと、誤魔化し笑いをしてみる。

みんなの目が何だか冷たい。特に、カクさんなんかは、見たくなかったのに…と恨みがましげだ。

「それに、エリユレアル殿下を盾にしたというのも、非常に問題です。」

眼鏡を押し上げて、ハティさんが冷静に言う。

エル殿下の目がいつそう眇められた。ひえええ〜！ごめんなさい！ごめんなさい！

「うう…、だって、殿下は光の素質が強いから、ああいった類のものには近づけないと思って……」

言い訳がましく、目を彷徨わせながら答えた。

いや、だからって人を盾にしたら駄目ですよ。うん、本当にごめんなさい！！

「は？」

「え？」

「え？」

「……？」

「へえ？」

え？？

あ、上から、エル殿下、ナディア様、ハティさん、スケさん、カクさんです。

いや、それはいいとして。ええ？私なんか変なこと言った？？

一様に驚いた様子で私を見るみんなを見回す。何か怖い。

「……………え？どうかしました……？？」

おずおずと問いかけてみる。誰かなんか言って！

「……………俺に、光属性が？」

ぼつりと問いかけたエル殿下に。

「あれ？殿下は、光属性と火属性でしょう？」

今度は私が首を傾げた。

今更だけどちよつと説明するわね。

この世界に存在する魔術には、光と闇という天の2属性に、土・

水・火・風・木という地の5属性、合計7属性がある。

それで、基本誰もが1属性は持っているけど、2属性以上を持っている人はかなり少ないらしい。

それから、人にはそれぞれ、魔力と素質があつて、魔力が多ければ魔術の規模が大きくなったり、持続時間が長くなったりする。

一方、素質が強い人は、使える魔術の数が多くなったり、自分でも自由に魔術をアレンジできるようになるそうだ。

今この室内にいる人でいうと、エル殿下が光と火属性。魔力も素質もかなり大きい。

ナディア様は水と木属性。どちらも癒し属性だから、ナディア様にはぴったりかも。

ハティさんは水と土属性。クールだから、水属性なんかはしっくりくるわ。

それで、スケさんは土属性。うん、落ち着いた雰囲気だし、合ってると思う。

カクさんは風属性ね。どこかひょうひょうとした人だし、うんうん、納得。

「俺の属性が分かるということは、お前も光属性を持っているのか

「？」

私がつらつらと頭で考えていると、エル殿下がそう聞いてきた。

属性に関しては、互いにその属性を持つてる同士にしか分からないらしい。

あ、でも、素質が弱い人には、素質がかなり強い人は分からないかったりするみたいだけど。

「はい。」

そう言っつて、私はそれを証明するために、指先に小さな光を灯してみせた。

みんながぎよっとして私の指先を凝視する。

「……………俺にも、できるのか？」

エル殿下がおずおずと聞いてきた。何か妙に自信無さ気なんだけど、使ったことないとか？

「あれ？使ったことないんですか？」

「……………ああ、今まで俺に光属性があるなんて知らなかったからな。」

指先の光を消して私が首を傾げれば、エル殿下は色々な感情を込

めたような苦笑いを浮かべた。

「ご存知かと思いますが、現在確認されている光属性を有する者は世界中で5人しかおりません。」

一瞬微妙な静けさが場を包んだが、ハティさんが声を発した。

へえ、光属性を持っている人が少ないのは知ってたけど、そんなに少ないんだ。

「そのうちの3人はテミズ教団に、残りの2人は国を形成していない国家外の地域の集落にいますので、我が国内には光属性を持った者はいないのです。」

ですから、属性を持った者による確認はできません。」

「それで、一応みんな光属性の魔術を使ってみるんだけど、本からだと使い方が良くわからなくてね。結局光属性が無いんだろってことで済ましちゃうんだよね。」

ハティさんの言葉を、カクさんが引き継いで説明してくれる。

あゝ、なるほどね。光属性の魔術って、イメージが付きにくいものが多いから、実際に実物を見てみないと、イメージしにくいのかも。

私の場合は、科学の灯りとか、ファンタジーの知識がだいぶ役に立ってくれたんだけど。

「じゃあ、殿下も試してみられたらどうですか？こうして、指先に

光を灯すイメージで。」

私はもう一度、指先に光を付けて見せた。

そんな私を見て、エル殿下も自分の指先をじっと見つめた。

火の魔術は使えるんだから、魔術自体の使い方は分かるのだろう。

途端、殿下の指先からカツと強く白い光が発せられた。

うお、眩しっ！やっぱり魔力が大きいから、光もかなり強い。

目の前に手をやって光を遮りながら、殿下を見てみると、何だか呆然としていた。

周囲のみんなも、じっと息を詰めて殿下の指先を見ている。

しばらくして、ゆっくりと殿下の指先の光が消える。

未だに呆然と自分の手を見ているエル殿下。

そして、何故か俯いているハティさんと、安心したように微笑んでエル殿下を見ているスケさん。

あ、ナディア様とカクさんは涙ぐんでる。てか、カクさん泣いてる。

ええ？何？何なのこの状況？

私だけ置いて行かれているみたい。

でも、そこは日本人ですからね！ちゃんと空気読んで静かにして
ますよ。

11・そろそろお暇させていただきます。

「ちょっと用事がありますので、しばらく出てきます。」

変な空気の中、そう言つて、ハティさんが部屋を出て行った。

そのハティさんの行動に、みんなもほっと体から力が抜けたみたいで、一気に空気が和らいだ。

はあ、良かった。事情が分からないままあの場にいると、この先どういった行動をとればいいのか分かんなくて、本当に困ってたのよ。

「じゃあ、私もそろそろお暇しますね。」

手元の紅茶を飲み干して、私も椅子から立ちあがる。

「は？」

「え？」

「……？」

「へ？」

上から、エル殿下、ナディア様、スケさん、カクさんね。って、またこれかい！

びつくり顔で私を見上げてくる面々に、私の方が首を傾げる。

「もうお城も十分に見学できましたし、あまり長居するのもお邪魔

でしょうし。

この度は大変お世話になりました。とても楽しかったです。ありがとうございました。」

にっこりと笑って、深々と頭を下げた。

そしてそのまま部屋を出て行こうとしたんだけど、がしりと腕を誰かに掴まれた。てか、しがみ付かれた。

「…つちよつ、ちよつと！あの亡霊どうすんの！？追い払ってくれないの！！？」

必死な様子でカクさんが問いかけてくる。

「いえいえいえいえ！！私は霊媒師でもエクソシストでも無いんですよ！幽霊を祓うなんてできません！どうか他所をあたって下さい！」

カクさんから腕を引き抜こうと、私は思いっきり力を込めて踏ん張った。

「だからって、ほつとかないですよ！俺もう二度とあそこに近づけないよ！というか城内歩けないよ！何とかしてよ～～～！！！」

段々カクさんに泣きが入ってくる。

だが断る！私も早くこの城を出たい！

「私だって、あれを見た後でこの城で一夜を越すなんて怖くて出来ません！私は城下の宿に泊まります！」

あの幽霊はあの辺りから離れられないと思いますから、皆さんは普段通り過ごしていれば大丈夫です！」

何か言っていることに矛盾があるような気がするけど、そこは気にしない！

だって、怖いものは怖いのよ！ああいった類は本当に苦手なんだってば〜！！

「うわ〜〜ん！！自分だけ逃げようなんて、ずるいぞ！！」

私の腕を掴み泣き叫ぶカクさんと、必死に腕を抜こうともかく私。

傍から見たら、随分と滑稽な争いだと思うけど、本人達はいたって本気だ。今夜の安眠がかかっている。

「何をやっているのですか。」

そんな時、多分に呆れを含んだ冷たい声が室内に響いた。

引つ張り合いの格好のまま声のした方を見れば、いつの間に戻ってきていたのか、扉の前に凍りつくような眼差しをしたハティさんが立っていた。

「カーヤ殿が城を出て行くと言い出して、カークランドがそれを必死に止めているところだ。」

あ、初めてスケさんに名前を呼ばれた！しかし、カーヤ殿って…

…すつごく変な感じ。

あと、スケさん。その言い方だと、私が出てもするみたいじゃないか。私は、あまり長居するのも悪いから、そろそろ帰ろうとしているだけなのですが！

「城を出る　ですか。」

わあ、ハティさんに流し目くらった！う…美しいです！でも、何か背中が寒いです！

「いえ、もう十分お城見学は堪能させて頂きました！皆様もお忙しいと思いますので、私はこの辺で失礼させて頂こうかと！」

片手にカクさんをぶら下げたまま、はきはきとハティさんに訴えた。

早く退出させて下さい！時間が遅くなると、宿をとるのが困難になりますし！

「そう言えば、あなたに対して、陛下からのご依頼を言付かっています。」

そう言って、ハティさんは手持ちの書類をぴらりと見せた。

そこには、陛下のサインと皇帝印がしっかりとなされた依頼書。ちなみにその内容は　。

「殿下に対する光魔術の教授??」

「どういうこと？と首を傾げれば、ハティさんは眼鏡を押し上げながら。

「あなたのおかげで、エリユレアル殿下に光属性があるということが分かりましたが、我が国には殿下に光属性の魔術をお教えできるような者はありません。

ですから、あなたの知る範囲で、殿下に光魔術をお教えして頂きたいのです。」

さらりと言われた言葉に、私は慌ててすごい勢いで首を左右に振った。

「いやいやいやいやいやいや！私の魔術なんて自己流ですから！殿下に間違ったことを教えでもしたら大変ですから！！」

無理です！無理です！と私がおたおたしていると、思わぬところから声がかかった。

「目の前で使って見せてくれるだけでもいい。間違っているとしても、使えなくても、決してお前に責を負わせることはしない。

俺に、光魔術を教えて欲しい。」

いつの間にか立ち上がっていた殿下が、真摯な目で訴えかけてくる。

おおお！美形の真剣な顔って、すっごく心臓にくる！

だが断　あ、何か周りのみなさんも、「お願いします！」み

たいな目になってる。いや〜！そんな目で私を見ないで〜！

「で……でも………」

往生際悪く渋っていると、ハティさんが持っていた書類の一角を指差した。

「分かりました！精いっぱい、頑張らせて頂きます！〜！」

そこに書かれていたのは
。

12・安眠確保のために！

「謁見の間では陛下からの褒美を断っていたのに、結局はお金ですか。」

ハティさんが、陛下からの依頼書を丁寧に丸めながら呆れたように言った。

「いや……これは正当な労働の対価ですし………」

そう、ハティさんが指差していたのは、依頼に対する報酬の項目だったのだ！

それはもうすごい額だった！

ギルドに登録した街で稼いだ金額とは、桁が違った。

あの苦労した日々を思い出して、ちよっぴり目頭が熱くなるほどには。

ちなみに、そのお金は魔術教育費として、ちゃんと国の予算に組み込まれているものらしい。

しかも、普通の魔術講師とほぼ同じくらいの金額なのだとか。

あの金額がお給料かあ……いいなあ、国家公務員。

まあ、皇帝陛下からのものとはいえ、依頼をこなして得た報酬なら、堂々ともらえるし、遠慮なく使えるし、そりゃ飛びつきたくな

ります。

うっ、周りのみんなの目が、何か生ぬるい気がします。
ふっ、しょせん世の中金なのよ！と、開き直ってみる。心の中だけだ。

「ああ、それから、この度の亡霊騒ぎを解決すれば、その分の報酬も下さるそうですよ。」

綺麗にリボンの巻かれた依頼書を私に手渡しながら、ハティさんがさらっと告げた。

あ、カクさんの目がきらりと光った。

「いやいや、幽霊に関しては私はド素人ですよ。むしろ極力関わりたいたくない人間ですよ。」

どこかに、除霊をする人とかいないんですか？あ、ほら、教会とかに。」

ほんと、丸められた依頼書で片方の手を打つ。

ハティさんに冷眼ビームを向けられた。すいません、丁寧に扱います。

「はあ。我が国の教会が信仰しているのは、創造神と7つの御使いですよ。光の魔術の使い手であるあなたが被えないのに、他の誰が被えるというのですか。」

ハティさんが、少し顔を落として溜息を吐いた。

うお〜！美人の溜息ってすっごく絵になる。いや、わたしのせいで溜息を吐かれたんですけどね。

まあ、幽霊の件は置いておいて、エル殿下に魔術を教えるにあたって、衣食住は報酬とは別に保障してくれるらしい。太っ腹！部屋は、今使わせてもらっている客室ね。

あのベッドって、本当に寝心地が良くて

！

「あ！あああのっ！依頼を受けるにあたって、一つだけお願いが！」

突然慌てだした私に、ハティさんが眉根を寄せた。

「一応お聞きしましょう。何ですか？」

「殿下と一緒に寝させて下さいっ！..！」

「はあ!?!」

「え?」

「.....は?」

「うええええ!?!」

上から.....って、もう言わなくても大体分かるよね。ちなみに、ハティさんは無言です。

「……………え?？」

あれ?なんで、みんなそんなに驚いてんの?私なんか変なこと言
った???

と、自分の言ったことをじっくり思い返してみる。

・
・
・

って!?!うわぎゃああああああ!?!!

「ちっ…………ちちちち違いますっ!?!いやっ!あのっ!い、一緒
の部屋で…………って、意味でっ!?!」

私は、頭から湯気でも出てそうなくらい真っ赤になってたと思う。
とりあえず否定しなければと、意味もなく大げさに手を振りまく
る。

殿下と一緒に寝たいって!こんな大勢の前で!どこの痴女ですか
!?!

「ひっ…1人で部屋で寝るのは怖いし!ど…どうせなら、幽霊避け
になる殿下の傍で寝させてもらえば、よりいっそう安心するからで
あって…………!?!

決ってやましい意味ではないんですよ!これ本当に!絶対です

「!!」

精いっぱい力説してみた。

途中、何か殿下に対して失礼な表現があった気がするけど、それどころじゃない!

いや、良く考えたら、私も光の属性があるから、幽霊は近づけないんだけど、だからって一人で幽霊と対峙できるかって言われると、それは絶対にお断りです!

仮に除霊できるとしても、怖いものは怖いんです!

私の必死さが伝わったのか、みんな「なんだ。」って私から視線を逸らした。

あ、おい、エル殿下。そんなあからさまに、ほっと息を吐かないで下さいよ! 地味に傷つくわ!

で、「床で寝ますからああ!」と必死に泣きつき、終いには「じやあ、城下で寝ますう!」と逆切れし、何とかエル殿下と同じ部屋で寝ることを許可された。

ああ、良かった。これで今夜は何とか眠れそうだ。

13・羨望、憧憬　寂寥。

どうにか話も纏まって、夕食まで解散ということになったので、私は、一人で私に与えられた客室へと戻っていた。

と言っても、途中まではスケさんとカクさんに送ってもらったのだけど。……………迷わないように……。

部屋の前へと着いたとき、背後からカツカツと規則正しい足音がしたかと思うと。

「ちょっとよろしいですか。」

「うわぁ！はいいい！」

ハティさんに声をかけられました！

しかし、背後から声優もこなせそうな美声が聞こえたものだから、背中にぞわぁという痺れが走り、思わず変な返事をしてしまった。

「ど、どうかしましたか！？ハティさ……………」

慌ててハティさんの方を振り返り、思わず口にしてしまった呼び名に、私ははっと口を塞いだ。

いやあああああああ！やってしまったあああ！！

実は、私がさんざん「ハテイさん」と呼んでいたのは、私の心の中だけでの呼び名だったのだ！

本当は、ハテイさんも貴族なので、ハテイツド様って呼ばないといけないんだけど、正直本人を目の前にして何度も噛みそうで……

しかも、これは私だけかもしれないけど、人に“様”付して呼ぶのって慣れてなくて。

だって、日本では目上の人はい“さん”付だし。

もしくは役職呼びが多かったのよ。会社の社長だったら、「社長」とかだし。大学の先生だって、「教授」とか「先生」って呼んでたからね。

だから、ハテイさんは、「ハテイさん」って心の中で呼んでた。

あ、私が声に出してハテイさんと呼んだことって、実は紹介されて一度もないんですよ。

ちなみに、「エル殿下」も、心の中だけの呼び名です。

本人に対しては、「殿下」としか呼んでないからね！ふふふ、気になる方は確かめてみてね

なんて、だらだら心の中で現実逃避してたけど、本人に向かって言っちゃったよー！

皇家に対するみたいに、不敬罪にはならないだろうけど、お…怒られるかしら……。

恐る恐るハティさんを見上げたけど、ハティさんはふうと溜息を吐いて、話を切り出した。

むむ、その辺を注意しないってことは、容認の方向でいいのかしら？

「あなたは、本日城の中庭で、結界の綻びを見つけたとのことですが……。」

「は…はい！」

殿下の側近としての仕事のハティさんの言葉に、私は背筋を伸ばして返事をした。

「殿下からの要請で、宮廷魔術師に点検させたところ、確かに綻びが見つかりました。」

人や大きな魔物の侵入は困難でしょうが、小さくても危険な魔物が侵入する恐れもありますし、あそこから綻びが拡大することも懸念されましたので、直ちに修復を行いました。」

淡々と告げられる言葉に、仕事早っ！と思いなながらも、まあ王宮だしね、とうんうん頷く。

「しかし、よくあれが見えましたね。結界自体を感知することができる者でも、魔術師の中ではかなりの上位。綻びまで見つけること

ができるというのは、宮廷魔術師でも長かそれに次ぐ者ぐらいですよ。」

ハティさんが眼鏡を押し上げながら聞いてくる。

「何か、色々と良く見えるもので……。」

私は、それに苦笑いを浮かべて返した。

エル殿下にも言ったけど、見えるものは見えるのだ。何故かと聞かれても、それは私も知りたところだ。

私がそれ以上説明する気がない　　というか、説明しようがないんだけど　　ことが分かったのか、ハティさんは私から視線を外し。

「まあ、あなたはたいそう規格外のようですので、これ以上はお聞きませんが。」

おっ！何だその規格外って！褒められてんのか貶されてんのか……、いや、褒められては無いなこれは。

「それから、エリユレアル殿下の件につき、陛下があなたにとても感謝しておられましたよ。そのうち、直接お言葉を頂くことになると思いますが。」

「殿下の件……ですか？」

はて、何のことやら。

「光の属性を見つけて下さったことです。」

私が首を傾げていると、ハティさんが補足を加えてくれた。

「実は、シューミナルケア皇家では、代々皇帝の地位についてこられたのは魔術属性を2つ以上持った方々なのです。」

エル殿下の光属性を告げたことの重大性が、全く分かっていない私に気が付いたのか、ハティさんはふうと溜息を吐いて話し始めた。

どうやら、ちゃんと教えてくれるらしい。

そう言えば、さつき殿下が光魔法使った時も変な空気になってたしね。ちょっと気になってたのです。

「エリユレアル殿下は、非常に知識に富み、知慮に優れ、また剣にしても、將軍に並ぶと言われるほどの使い手なのです。」

それに加え、常に国民の生活向上を考え、様々な面で力を尽くしておられます。

さらに、誰に対しても分け隔てなく、気さくに話しかけて下さるので、城内の者に限らず国民に至るまで、多くの者に慕われているのです。

それなのに！頭の固い教会や貴族の糞爺ども 失礼、古狸爺どもときたら！」

お…おお！ハティさんが徐々にヒートアップしてきた！
力の入るあまり、拳まで作ってます。

しかも、ハティさん、あんま言い直した意味ないですから。とり
あえず、爺どもが嫌いってことですね！

「エリユレール殿下が火1属性しか持っていないのでは、次期皇
帝に相応しくないと、第二皇子を皇太子にすべきだと陛下に進言し
たんですよ！

殿下自身も自らの属性のことを気に病まれ、本来ならすでに行わ
れているはずの立太子の儀を先延ばしにしておられたのです。

ふふふふふ、しかし、殿下がもう1つ属性、しかも、光属性を持
っておられたと分かった今、これ以上あの狸爺どもに好き勝手言わ
せたりはしませんよ！

何より、始祖以来の光の皇子です！うちの殿下はすごいんです！
参ったか、狸爺どもめ！

いい機会なので、あの爺どもを纏めて隠居に追いやって
「！」

そこで、漸くハティさんは正気に戻ったようだ。

いや、かつてなく良く喋っておられましたよ。よほど鬱憤が溜ま
ってらしたんですね。

しかし、この間誰も通りかからなくて良かったっす。噂の爺ども
でもいたらどうするんですか。

気まずそうにコホンと一つ咳払いをしたハティさんは、改めて私の方に向き直り。

「口にこそなさいませんが、あのままではいずれ殿下は皇位継承権を放棄なさっていたことでしょう。」

ですから、エリユレアル殿下の属性を見つけて頂き、殿下の憂いを取り除いて下さったあなたに、陛下は非常に感謝しておられるのです。」

それから、ハティさんは、胸元に片方の手を当てて、腰を折り深く頭を下げた。

「そして、殿下の部下であり友人である私からも、心から感謝を申し上げます。」

そうお礼を述べたハティさんの言葉はとても真っ直ぐで、本当にエル殿下を大切思っているということが良く分かった。

ハティさんとエル殿下の間にあるものは、信頼であり友情であり、親愛であるのだろう。

それは友であり、家族でもあるような。

そんな相手が傍にいてというのは、心底羨ましいなって、思った。

こんな時、本当に寂しいなって思う。

私にはこの世界に、そんな相手はいないから
。

14・クーデレに乾杯 (前書き)

話の区切りの都合上、今回は少し短いです (^| ^) a

14・クーデレに乾杯

そんな思いを抱きながらハティさんを見てみると、ハティさんはしばらく私を見てから、「それでは。」と言って踵を返した。

白い文官服の裾がふわりと揺れる。

と、2歩ほど進んだところで、ハティさんが足を止めて、くるりと振り返った。

どうかしたのかと首を傾げた私に近づいてきたかと思うと、すと私と目線が合うように背を屈め。

「それから、私のことは「ハティ」で構いませんよ。カーヤ。」

そう言って、照れたように小さく微笑んだ。

直近での美形の微笑みに、かちんと固まったままの私を残して、今度こそハティさんは立ち去って行った。

一方、残された私と言えば、ぎこちない手で部屋の扉を開け、背後で扉の閉まる音を聞きながら、次いで寢室の扉を開けて、後ろ手

にしっかりと扉を閉めた。

そのままばふんとベッドに倒れ込み

で、で、で、で、で、で、デレたあああああ~~~~~
~~~~~  
~~~~~

ハティさんが！あのハティさんが、デレたああああ！！！！
普段クールビューティーなハティさんが！

っっていうか、これが噂のクーデレですか！！まさにあれですか！
！？

うお~~~~~ハティさん萌ええええええええええ！！！！

クーデレ萌ええええええええええ！！クーデレすげえええええええええ！！！！

打ち抜かれた！もう、心臓ど真ん中を打ち抜かれたよ！！ストラ
イク即アウトですよおおお！！

なになに、あの微笑み！普段無表情だから、ギャップが半端ない
よ！！クーデレ半端ないよ！！

じたじたと悶えながら、枕を抱えたままベッドの上を端から端へ
とびろびろびろびろびろ転げ回っていた。

「ハティで構いませんよ。」って、きゃーきゃーきゃー！……ちよー！セクシー……！！！！

いや、もうハティさんなんて呼びません！今日この瞬間から、心からの敬意を表して「ハティ様」と呼ばせて頂きます……！！

あなたは神です！クーデレの伝道師です！

このときめきを世界中に伝えるため、どこまでも付いて行きますよ！ハティ様ああああああああ……！！！！

ハティ様の微笑みがぐるぐると頭の中を回る。

ああ、もうどうしてカメラを用意してなかったんだ自分んんん！！！！

「カーヤ」って、呼び捨てにされたあああああ！感激いいいいいい！！！！

おおおお！録音しときゃよかったあ！！あんな声の目覚ましが欲しいよおおおっ！！……ぞくっとして、飛び起きちゃっつよ……！！

うきやあああああああああああ……！！！！

と、ベッドの上をぐるぐるぐるぐる、時々悶えては、ベッドの上でじったんばったん暴れ回った。

やがて、夕食の時間になるまで、疲れ果ててぐったりとベッドに沈む私がいたのです。

うつ、こ…腰が攣った。

15・そうして濃かった一日が終わる。

で、夕食も終え、さあ寝ようかと、私はエル殿下の寝室にお邪魔しました。

毛足の長いふわふわ絨毯の敷かれた室内には、どんっと大きなベツドと、端の方に簡易ベツドが置かれておりました。

何でも、わざわざ私用に用意して下さったのだとか。

いや、お世話をおかけして本当にすみません。でも、ありがとうございます！

と、感激しつつ簡易ベツドに入ろうとしたんだけど、エル殿下に止められた。

え、もう眠いんですけど、と半ば閉じかけた目で殿下に顔を向ければ、簡易ベツドには殿下が寝るから、私はナディア様と殿下のベツドで寝ると言われた。

そうなのです。最終的に、今夜はエル殿下の寝室に、私、エル殿下、ナディア様、スケさんとカクさんが、泊まり込むことになったようです。

まあ、ナディア様も一人で寝るのは怖いという理由でしたので、

納得でしょう。

しかし、スケさんとカクさんまでいるのは、きっと殿下の護衛のためだと思われます。私が夜中に殿下を襲わないようにってね。

ふふふ、せめて危害を加えることを防止するための護衛であってほしいなあ。あ、それだと、私が殿下に対する刺客だと疑われてるってことか。それも嫌だな。

かと言って、アダルティな意味での襲うことを防止するためについていうのは、もっと嫌な気がする。結局、私のさっきの精いっぱい
の否定を信用してないってことじゃないの！

男性を襲える度胸があるなら、元の世界でとっくに彼氏を作りますから、私！

でも、カクさんの理由は護衛より、確実に殿下の幽霊避け効果狙いですよね。

しかし、幽霊相手だとあまり頼りになりそうもないカクさんだけが、対私用の殿下の護衛としては十分なのではなかるうか。

ハティ様は自室でお休みらしいのに、スケさんは付き合いが良いなあと思ってたんだけど。

よくよく見たら、スケさんこの状況何だかんだで楽しんでますよね。

無口無表情で分かりにくいけど、面白そうだ、って思ってるような気がします。

で、ああ、私がナディア様と殿下のベッドに寝るように言われた件ですが、もちろん私はご遠慮申し上げました。

皇女様とベッドを共にするなんて恐れ多いですし　寝相で下敷きにしたり、ベッドから落としたりしたら恐ろしすぎる！　殿下を簡易ベッドに寝させるのも心苦しいです。

もとは、私の我がままですし。

なので、折角ですからご兄妹で一緒に寝られたらいかがですか、と進めてみたんだけど、二人そろって変な顔をされました。

何でも、兄妹とはいえ、未婚の男女が一緒のベッドで一夜を過ごすなんて、外聞が悪いのだとか。

ううむ、20代前半のお兄ちゃんのベッドに、10代半ばの妹が「怖い夢見たの」と枕を抱えて忍び込むのは駄目なのか。

美形兄妹だし、ビジュアル的には全然有りなんだけどなあ。むしろ眼福。

あ、でもあたしも、あつちの世界にいる弟が、枕抱えて「怖い夢見たの」ってやってきたら、叩き出すな。キモすぎる。

あれ？状況が違う???

と、いうわけで、紆余曲折ありましたが、結局、私とナディア様が殿下のベッドで寝て、殿下は簡易ベッドへ、スケさんとカクさんは寢室の扉の前辺りで寢袋での就寝となりました。

うーん、ベッドはフカフカだし、隣のナディア様からは良い匂いがするし。今夜は良い夢が見られそうだ！

おやすみなさ〜い。

部屋の灯りが消されてから数分後には、私は眠りの世界へと落ちて行ったのでした。

え？幽霊？あ、忘れてたわ。

16・朝から大騒ぎです。

カーテンの隙間から漏れる光と、可愛らしい小鳥の鳴き声で目が覚めた。

いや〜よつく寝た〜！おかげで目覚めもすつきりです！

爽やかな顔で、すでに起きていた殿下とスケさん、私の横で目を擦っているナディア様に朝の挨拶をした。

あ、もう1人はどうしてるかって？

いや、何か寝袋に入ったまま、部屋の片隅でガクブルしてます。
一晩しか経ってないのに、目の下にすごい隈が出来てますよ。カクさん。

「あれ、カクさん、どうしたんですか？」

と私が声をかければ、カクさんはすごい形相で私を見た後、寝袋のままずざざざと近づいてきた。器用ですね。

「うわ〜〜ん！カーヤ殿のうそつき〜〜！！来ちゃったよ！あの亡霊ここまで来たよ！！怖かったよ〜〜！！！！」

と、泣き叫びながら、寝袋から出た両手で私の両肩を掴み、思うままに前後に揺すった。

お、お、お、お、おう！脳みそが揺れるう！！

「……………っ、つちよ！まつ、まつて、くだっ、さいっ……………！どっ、
いう、ことっ……………！…？」

ゆすゆすゆす揺られながら、何とか言葉を発するが、大きな
声は出ないわ、言葉は途切れ途切れだわで、全くカクさんには届い
ていない。

うっうっうっうっ！いい加減気持ち悪くなってきた！だ、誰か止め
てくれええええええ！！

と、私の心の声が届いたのか、それともあえて今まで放置してお
いたのか、スケさんが背後からカクさんの肩を掴んで私から引き
がしてくれた。

あ、まだ前後に揺れてる気がする。

「どっやら、昨夜、昨日の亡霊の夢を見たらしい。」

冷静な声でスケさんが説明をしてくれた。

カクさんは、また俯いてガクブルしている。怖い。

そんな2人から目を離して、私は室内をぐるっと見回した。

「え、でも、昨日の幽霊の瘴気の痕跡ありませんし。あの女性が
直接ここに来たってことは、ないと思いますよ。」

「昨日のことが衝撃すぎて、そんな夢を見たんじゃないかと、言っ

「ただが。」

私の答えに、困ったような苦笑いを浮かべながら、スケさんが言葉を送った。

「あれは絶対に違うよー！

だって、あの亡霊の女性が、『あの方はどこ？早く待ち合わせ場所に行かなければ。ヒューゴが待ってるわ。早くわたくしをここから……』って、ぶつぶつ言いながら、暗闇の中を彷徨い歩いてたんだよ！

必死な風なんだけど、目は虚ろで空洞みたく、ほんっとうに怖かったんだからあああ！！」

ああ〜〜〜ん、と、もはや遠吠えのように泣き叫ぶカクさんに、部屋の隅で身支度を整えていたエル殿下が、迷惑そうな顔をした。

「う〜ん、その夢が本当にあの幽霊の人からなら、何かチャンネルが合っちゃったんですかね？」

私が、首を傾げながら言つと。

「チャンネルとは？」

とスケさんが問いかけてきた。

「えと、波長といいますか。あの女性からの何らかのメッセージ、伝言が送られてきたのか。もしくは、たまたま思念を拾っちゃった

かですよねえ。」

私の言葉に、スケさんがなるほど頷いてくれた。

うむ、今更だが、私の話をまともに聞いてくれるのはスケさんぐらいだ。

カクさんは魂が抜けたようになってるし、ナディア様はまだベッドの上でうとうととしてるし、エル殿下は支度を終えて部屋を出ようとしている。

このフリーダムな奴らめ！

17・授業を始めます。

とりあえず、あの幽霊の女性からの接触があったわけではなく、特に解決策も見当たらないので、この件はひとまず放置ということになった。

自らも、亡霊のようになったカクさんは、スケさんに引きずられて本日の職務へと向かって行った。

「ご愁傷様です。」

んで、早速ですが、今日は午後から、殿下の光魔術の練習を始めることになりました。

午前中は殿下は執務が入ってて、私は例の特別閲覧許可を頂いた図書館へ行ってきたのです。

そこで、まずは殿下の執務室で、ハティ様が用意してくれた、光魔術のテキストみたいな魔術書を見ながらやってみたいと思います。

いや、やっぱりエル殿下に間違っただけを教えちゃったら大変ですからね！

この世界の指導方法があるなら、それに倣ってみようと思ったのですが…………。

まず、室内で発動しても大丈夫そうで、実用性の高い“光の防御”という項目を開いてみた。

え、まず、発動の呪文があるのね。

なになに、『我、ここに光の魔術を発現す。我が前に光の盾を、我が後ろに光の盾を、我が右手に光の盾を、我が左……………！』長いわあああ！！こんなん唱えてる間に、敵の攻撃にやられてしまうわ！！

少女アニメじゃないんだから、長々と変身シーンやっても、実は0.5秒でした、みたいな補正は適用されないんだからね！

私は黙ってぱたんとテキストを置き　　本当は放り投げたかったんだけど、ハティ様の御顔が浮かんで出来ませんでした、殿下と向かい合って座っていたテーブルから立ち上がった。

そして、部屋の端の方の、周りに何も無いスペースに立つ。

「とりあえず！魔術の基本はイメージです。まずは私がやってみますから、殿下はそれを見てやってみてください。」

私の言葉に、殿下が頷いたのを見て、私はすうっと息を吸った。

「光の障壁。」

途端に、ぱあっと淡く輝くドーム状の光の結界が、私を包み込んだ。

ぼんやりとした光の壁の向こうで、殿下が目を見張ってるの見える。

「これが、光魔術の防御結界です。光の防御結界は、物理的攻撃にはそれほど強くはありませんが、魔術による攻撃には完全なる防御を誇ります。」

使ってみると、けっこう便利ですよ。これ。」

そう説明して、私は光の結界を消した。

「さっき唱えていた呪文は何なんだ？」

「あれは、私の故郷の言葉です。魔術を使うときに便利なんで、私はこれを使っています。」

そう言いながら、殿下の座っているテーブルの方へ近づき、近くにあった練習用の紙に、ペンで『障壁』と書いた。

「この『障』という字が、防ぐとか隔てるとか、妨げるといった意味を持っています。」

この『壁』という字は、そのまま壁ですね。

だから、私としては、この二文字が、防御結界のイメージと繋がるので、これを唱えるようにしています。」

私の説明に、殿下はなるほど頷かれた。

ちゃんと説明になってるか、すごく不安なんだけど、人にものを教えたことって、あんまり無いからなあ。

「まあ、あの魔術書に書いてあるような呪文を使った方がイメージが固まりやすいのなら、そちらでもいいですし、他の言葉でも大丈夫だと思いますよ？」

「ならば、俺もこれを使ってみたい。」

紙の上の漢字を指差しながら、殿下は顔を上げた。

「え？殿下が普段使われている言葉じゃないんですけど、良いんですか？」

「ああ、この字と、カーヤがさっき見せてくれた結界のイメージが繋がるから、これを使った方がうまくいきそうだ。」

そう言うと殿下は席を立ち、さっき私が光の結界を披露した辺りへ立った。

そして集中するように目を閉じ、すうと呼吸を整える。

「光の障壁。」

殿下が唱えるのと同時に、殿下の周りをドーム状の光が取り囲ん

だ。

うん、結界自体はまだ弱い感じだけど、さすが殿下、要領はちゃんと掴んでいるようだ。

一度結界を消して、また張り直す。

それを何度か繰り返しているうちに、かなりしつかりした結界が出来るようになってきた。

そして、これなら大丈夫だろうという結界が出来たとき、私は殿下に向かって、人差し指と親指で作った銃の先を向けた。

「殿下、そのまま障壁を維持して下さいね。」

そう言って、不思議そうな顔をするエル殿下に構わず、「火の弾丸」と唱えて、指先に魔力を集めた。

人差し指の先から2センチほど離れた所に、炎が渦を巻きながら集まり球体を形成していく。

「えいつ！」

掛け声とともに弾を放てば、炎の弾は空を切りながら殿下の方へと向かって行く。

……しかし、こういう場面で「えいっ」て、何か格好付かないよね〜！

今度なんかいい掛け声考えておこう。

と、私がよそ事を考えている間にも、炎の弾丸は殿下の防御結果に当たり、炎が拡散したかと思うと、シュワッと音を立てて掻き消えた。

うん、ちゃんと機能してるみたいだし。

これで、『光の障壁』は大丈夫だろう。

私が頷いたのを見て、エル殿下も安心したように笑いながら、光の防御結界を消した。

「『障壁』の防御範囲を大きくしたいなら、その分魔力を流せばいいです。後は、いきなり攻撃されたときにも発動できるように、練習あるのみですね。」

私の言葉に、エル殿下も頷いた。

「じゃあ、思ったよりも早く『光の障壁』講座が終わったので、便利なのをもう一つお教えしときますね。」

私はそう言うと、掌を上に向けて「照明」と言葉を発した。

すると、掌の上に、直径15センチほどの光の球が浮かび上がった。

明るさは、日本の家で使われている蛍光灯ぐらいをイメージしてある。

それをふうと宙に投げれば、少し上に浮かんだ辺りで、光の球は停まり、その場で光を放ち続ける。

もうちょっと遠くで光らせたければ、その分力を込めて投げれば、適当なところで停まってくれるのだ。

「光だけですの、火を使って灯りを灯すより安全だと思いますよ。」

そう言って、発動の仕方を説明すれば、殿下も同じように掌に光の球を作り出した。

私のより、ちょっと光が強い。

「これは便利だな。しかも、これを高いところまで打ち上げることが出来れば、広く辺りを照らせるし、自分の居場所を教えることも出来るのだな。」

言いながら、殿下は思いっきり、光の球を高い天井へ向かって放り投げた。

バレーボールぐらいの光の球は、勢いよく天井にぶつかり、その場で停まって、部屋中を照らす。

「ああ、それは面白いですね。照明弾や、狼煙みたい。」

殿下の言葉に、私は頷いた。

暗い空高く打ち上げて、光を発する。もしくは破裂させる。

……お、あれ、もしかして、それって、あれ…？

光の魔術を使って、あれが出来そうな気がする。

日本の夏、夜空に浮かぶ、たくさんの“あれ”が！

「カーヤ？」

ふと浮かんだ可能性に、私はつい考え込んでしまっていたようだ。

どうかしたかと、殿下に声をかけられて、はっと顔を上げた。

おおおおお〜！これは、要研究じゃあ〜〜！

出来たらさぞかし綺麗だろうと、私は内心わくわくしていた。

あ、でも、どうせなら、無事に出来たらエル殿下達に見てもらいたいなあ。

うん、完成するまで黙っておこう。

「いえ、何でも無いです。」

にっこり笑って、首を振った。

殿下はまだ首を傾げていたが、ちょうど夕食の時間が近くなったということもあり、今日の光魔術授業はこれでお開きとなったのでした。

18・宮廷魔術師VS氷の女王様

と、そんな感じで、殿下の政務の合間に光魔術の授業を行い、それ以外は帝国図書館で魔術書や歴史書　私より前に、異世界から来たつばい人がいないかどうか　を見たりして、数日を過ごした。

あと、魔術書でろくに収穫がなかった私は、ハティ様に、宮廷魔術師の方々と魔術についてお話しさせてほしいと頼んでみた。

私何か難しい魔術の研究をしていると思っっているらしいハティ様は、後日、宮廷魔術師の、しかもかなり上位の方々とお話をする機会を設けて下さった……のだが。

そのときの私の設定が、帝立イル・シール学院のエル殿下の後輩で、かなり夢見がちで、おとぎ話のような魔術を卒論として研究している学生、ということになっていた。

いや、これだったら多少おかしなことを聞いても変じゃないと思うけど、何か、アイタタな人のように思えるのは私だけでしょうか。

宮廷魔術師の方々から、ちょっと生温い視線を感じているような気がするんですけど、き……気のせいでしょうか？

あ、ちなみに、私が研究していることになっているのは、空間同士のつなげて、人や物を行き来させるといふ魔術です。

これに関する質問に混じえて、「この世界とは異なる空間
例えば異世界といったような」といふ質問を、ぼかしながら
してみたりもしています。

まあ、全員に首を傾げられたけど。

あと、ハティ様と一部の魔術師の方の間で、ぴりぴりぎすぎすした雰囲気を感じるんですけど。

「確かに夢のような内容ですが、このような研究が成就すれば、帝国にとって非常に有益となるでしょう。」

今後、光の皇子であらせられるエリユレアル殿下が治めてゆかれる国のために、少しは役に立たれたら如何です?」

なんて、ハティ様は、面倒臭がったり渋ったりして非協力的な魔術師の方を、目が全く笑っていない微笑みで説得(?)したりしていた。

なるほど。あの辺りにいるのが、頭の固い古狸爺どもなのですね!

しかし、私がああの微笑みを向けられたら、即座にその足元にひれ伏しますよ!「ごめんなさい、何でもしますから許してください!」と泣き叫んじゃいますよ!

あ、案の定、ハティ様の微笑みを向けられた魔術師の方々は、一様に顔を青くして腰が引けてます。

中には、「わ…わしもそろそろ、氣候の穏やかな田舎で余生を過ごそうかのう……」と体を震わせながら、言っている方もいます。

分かります！今、その辺は絶対零度の気温なんですわ！寒いんですわ！

あ！…！
今日も一段と麗しいです！冷気も冴えています！氷の女王様あああ

と、ハティ様の協力（+ストレス発散）もあり、一通りの方々の話は聞けた。

そう言えば、宮廷魔術師の長の方は、非常に穏やかな笑顔を浮かべた、目尻の下がった白いお髭のおじい様でした。

どこかで見たことがあるなあと思っていたら、あれです！ハリィッターの映画で見た、魔法学校の校長先生ですよ！

まさにあんな感じですよ！口調も穏やかで優しそうな好々爺でも、すべてを見通すような淡いエメラルドグリーンの瞳が、実に印象的でした。

私の話も、面白そうに興味深そうに聞いて下さいましたしね。

19・お茶会ついでの対策会議です。その1。

今、私の前に亡霊がいます。

「カカカカカクさん！？ええ？いったいどうしたんですか！！？」

何となくお互いにタイミングが合わず、カクさんに会うのは数日ぶりだったんだけど、あまりの変わりように私は思わず後ずさった。

だって、全体的にげっそり痩せてるし、頬はこけてるし、目の周りは隈で真っ黒だし、目は充血して真っ赤なのだが、瞳には生気が全く感じられない。

うーわー！以前会ったときは、可愛い感じの美青年だったのに、今はムンクの叫びのようなお顔になってる。

「おい、生きてますか？」とつい目の前で手を振ってしまっただ。……………反応無いんだけど。本当に大丈夫！？これ！

さすがに心配になり、隣に立って、カクさんの肩を掴み立たせているスケさんに、顔を向けた。

「なんでも、あれ以来、毎晩あの亡霊の夢を見るのだそつだ。

殿下の部屋で寝させてもらっても、他の誰かと一緒に寝ても、城

下の宿で寝ても、娼館に行っても、教会に泊めてもらっても、効果は無いらしい。」

と、スケさんが肩を竦めながら説明してくれた。

知らなかった。色々と試してみてたんだね、カクさん。

途中、乙女の前でさらっと言わないで欲しいことが聞こえたけど、まあ、そこは大人の事情ということでスルーして差し上げましょう。

「いつそう、殿下に抱き締めて寝てもらったらどうですか？」

何となく提案してみただけなのに、先にテーブルについてお茶を飲んでいたエル殿下に睨まれた。

ええ、男同士なんだから良いじゃないですか。

いや、むしろ男同士だから嫌なのか。

ちなみに、今日は久しぶりに、私、エル殿下、ナディア様、ハテイ様、スケさん、カクさんのメンバーで、殿下の執務室でお茶をしています。

うーん、単なるお茶会だと思ってたんだけど、もしかしてカクさんのための対策会議だったりしますか、これ。

とりあえず、ふらふらしているカクさんを椅子に座らせ、私とスケさんもその両隣に座った。

エル殿下、ナディア様、ハティ様はすでに席についている。

「やはり、原因はあの女性の亡霊なのでしょう？光の魔術でぱつと被ってしまうことはできませんの？」

ナディア様が、こくと首を傾げながら聞いてくる。

うん、動作は非常に可愛らしいですが、解決策が何だか乱暴な気がするのですが。

「うーん、光の魔術を使えば、あの幽霊の女性に取り付いている瘴気は抜えますが、幽霊自体を成仏させることはできないんですよ。

彼女が、何らかの未練を持って彷徨ってるのなら、それを解決できれば自分で成仏してくれるかもしれませんが……。」

あ、そう言えば、まだ瘴気について説明してなかった。こほん。

えと、この世界では、誰もが魔力を持っているんだけど、妬みや恨み、悲しみといった負の感情が魔力に作用すると、濁った魔力、いわゆる瘴気と呼ばれるものが生まれるのです。

でも、普段なら、適当にストレス発散したり、他に楽しいことがあったりすると、その瘴気は体から離れて行っちゃうのね。

まあ、たまに瘴気をつまく切り離せなくて、瘴気によって負の感情が増幅されて、どんどん瘴気を生み出しちゃうっていう、悪循環にはまっちゃう人もいるらしいけど。

でも、そういう人は、たいていどこかで気がおかしくなっちゃって、狂死してしまうか、瘴気に取り込まれて魔物化してしまうのだそうだ。

稀にごく一部が、うまく瘴気を取り込んで魔物　　ベースが人の場合で、正気を保ったままの者は魔人と呼ばれたりする　　化するんだって。

それから、人から切り離された瘴気は、より瘴気を生み出しそうなものに取り付くか、もしくは世界中に点在する“磁場”と呼ばれる場所に集まる。

そして、そこから瘴気が凝り固まって魔物が生まれたり、運悪く磁場に取り込まれてしまった生き物　　動物や、たまに精霊などが魔物化してしまったりするのだそうだ。

魔物自体は武器や地の5属性の魔術で倒せるんだけど、瘴気を被うには、光魔術で浄化してしまうか、闇魔術で吸収してしまうしかない。

また、完全に瘴気に精神を侵蝕されていなければ、魔物化しかけていても瘴気を被うことで元の姿に戻れることもあるらしいのだ。

死んだ人間は魔力を持たないため、瘴気は生み出せないから、あの幽霊の女性に瘴気が付いているのは、きっと彼女の未練が強すぎて、瘴気を引き寄せているのだと思うんだけど。

ただ、この間見た感じでは、まだ魔物化するほどには至ってなかったはず。

「あの亡霊の未練か。カークラント、何か思い当たることはないのか？」

毎晩夢に見るほど恋しい相手のことだろう、とエル殿下がからかい交じりにカクさんに声をかけた。

殿下の声に、今までテーブルに顔を付けて、「寝てるの？」と聞きたくなるほどに微動だにできなかったカクさんが、ぴくりと動いた。

「うつゝ知らないよお……。……。毎回、真つ暗な暗闇の中を……。『ヒューゴはどこ？……。早くわたくしを、ここから連れ出して……。……』って言いながら、ふらふら歩いているだけなんだよ。あのぼろぼろの格好で、虚ろな表情でだよ！うつゝ怖いよお！！」

わあああああ〜ん！！と泣き叫びながら、テーブルに手をついて、がたがた揺らした。

「つちよ、危ないですって！お茶がこぼれる！」

あ、スケさんがカクさんの後頭部をチョップしたら静かになった。………なんか哀れすぎるぞ、カクさん。

「ここから連れ出して……。……ってことは、閉じ込められでもしてたん

ですかね？もしくはめったに外出を許されない深窓のご令嬢だったとか？」

私がお茶請けのクッキーみたいなお菓子を口に入れながら、首を捻ると。

「ん？……ああ、そう言えばあの辺りは……」。

エル殿下がカップをソーサーに戻して、顔をハティ様に向けた。

すると、ハティ様も何か思い当たったのか、「ああ、確かに。」と頷いている。

「何ですか？」

ナディア様が不思議そうに殿下を見上げると、殿下はナディア様を見て、少し言いにくそうにしながら口を開いた。

「あの場所には、確か先々代の皇帝の代まで、後宮があったはずだ。」

「そのような話を聞いたことがありますね。それで、先代の皇帝陛下が即位なされたのち後宮を廃止され、建物を取り壊して兵の訓練場にしたとか。」

その女性の亡霊が出たという辺りは、後宮の建物のうち、残された一部にあたるのやもしれません。」

殿下の後をハティ様が引き継いで説明をしてくれた。

「ああ、後宮ですか。だったら納得ですね！」

きつと、あの女性とヒューゴという方は、恋仲だったんですよ！それで、決して結ばれることのないお互いの立場を嘆き、ついに互いに手に手を取って愛の逃避行、駆け落ちをしようとして
！

「男が来なかったと、そういうことか？」

後宮といえは付きものな、道ならぬ男女の恋話に、私が鼻息も荒く盛り上がっていると、にやりと意地の悪い笑みを浮かべたエル殿下に水を差された。

「ええ！そうですよ！しょせん男なんてそんなもんです！女性の純粹な想いなんて、道にぼい捨てした煙草のごとくじりじりと踏みに
じるんです！！

はっ！そんな薄情な男は、とつと見限った方が彼女のためです！

カクさん、あなたのすべきことが分かりましたよ！彼女の新しい恋人になって、彼女を幸せにしてあげてください！！」

興奮のあまり立ち上がり、私はびしりとカクさんに指を突きつけた。

カクさんが、「えええ〜〜」と、より一層の悲壮さを滲ませている。

私はそんなカクさんの胸ぐらを掴み、

「何が不満なんですか！ 明るいところでちゃんと見れば、あの女性も美人ですよ！ 格好を気にせずよくよく見れば、ナイスバディですよ！ お話ししてみれば、きっと気も合いますよ！」

「いやいやいやいや！ それ以前に、相手は死人だよ！ 亡霊だよ〜〜！」

「大丈夫ですよ！ 今のあなたも亡霊のような状態です！ お似合いのカップルです！！！」

カクさんの胸ぐらを掴んで捲し立てる私と、涙目で必死に首を振るカクさん。もはやカオスな状態です。

20・お茶会ついでの対策会議です。その2。

「静かになさい。」

そんな中、静かな声が執務室に響いた。

ええ、あれです。北極の氷の上に立たされて、周囲には何にもない状況で、耳の痛くなるような恐ろしいほどの静けさってやつです。嵐の前の静けさです。

私とカクさんはぱつと離れて、速やかに席に着きました。

これが椅子取りゲームなら、他の誰も追いつけない、記録的なスピードだったと思います。

声の主はもちろん、我が恐ろしく
ではなく、愛しの君、ハテ
イ様です。

「駆け落ちの話で思い出しましたが」

私達が席に着き、静かになったのを見て、ハティ様が口を開いた。
あれ？私とカクさん以外の人もやけに静かな気がするんですけど
……………気のせいですよね。

「以前、私が、ちょっと仕事の合間に暇ができ、特にすることも無かったので、教会の懺悔室で聞き役をしたときのことですが。」

って、えええええ！？そんな、懺悔の聞き役って、暇つぶしみた

いな感じで出来るもんなんですか!?

それにもっと、カウンセラーのような、辛抱強く話を聞いてくれて懐も広い、穏やかな人がなるもんなんじゃないんですか!?!?あ、すみません、すみません。悪気は無かつたんです! つい本音が……いえ、何でもありません。ごめんなさい!

え? ハティ様は、教会からその免許も頂いてるんですか? さすがです! 完璧です! さすが、ハティ様です!!

と、今のやり取りを、ハティ様と何故か目線だけで交わしながら、私は話の続きを聞いた。

「1人の少年が懺悔室を訪ねましてね、彼は、幼い頃から定期的に不思議な夢を見ていたそうですが、帝都に来てからその夢を見る頻度が増したとか。

その夢の内容というのが、ある姫君とどこかから逃げる約束を交わし、約束の夜に待ち合わせ場所に向かおうとするのですが、突然現れた覆面の男達に切り殺され、森の中へ埋められる、というものらしいですね。」

え? まさにそれじゃん? みたいな顔を、私がしてたかどうかは分からないけど。

私は、ついハティ様以外の人達の顔をぐるりと見回した。
すると、みんなも何とも言えないような顔で、私を見返し、

(それって、もしかして……………)

(いや、もしかしなくてもあれだろ。)

(まああ、すごい偶然ですわね!)

(も少し早くその話聞いてたら、さっさと解決できてたんじゃないのか?)

(俺の今までの恐怖は何だったの〜!?ごっそり寿命が縮んじやっ
たよ〜〜!〜!)

(いや、文句でしたらハティ様に言ってくださいよ。)

()()(無理。)()()

という会話

というか心話

が、5人の中で交わされた。

「その者の話によると、夢の中の自分は『……………アイゼルリーテ様。
……………お許してください……………』と、何度も何度も謝っているのだそうで
す。」

そして、彼の手の届かぬ先に、淡い金髪の美しい女性が佇んでい
るらしいのです。」

ハティさんはみんなの表情には気づかず　　むしろあえて気に

せず　　、話を続けた。

いや、もう十分分かりましたよ。

きつと、そのアイ……………アイ……………なんだっけ?……………お姫様と、ヒ
ューゴさんは恋仲になったんだけど、お姫様が後宮にいて　　つ
まりは当時の皇帝のお妃様、既婚者だったってことだね　　、

それで2人で逃げようとして、待ち合わせ場所に行こうとしたら、何者かに殺されてしまったと。

それで、お姫様はいつまで経っても訪れないヒューゴさんを、ずっと待ち続けていて……。

あうう、ええ話やないかい!!

しかも、ヒューゴさんは後宮に入れたってことは、皇帝陛下の側近だったとか？

もしくは、お姫様に会うために命がけで忍び込んで!?

身分の違いや、お姫様の立場に悩み、葛藤を繰り返しながらも愛を深めていく2人。

やがて、溢れ出た想いは、もはや誰にも止めることはできず、ついに2人は決意をするんですね!!

愛しています、ヒューゴ。どうか、わたくしをここから連れ出してください。

しかし、姫様……。

自由にあなたに会えぬ日々にはもう耐えられないのです。それとも、あなたはそのように思ってはおられないのでしょうか……？

とんでもありません!私とて同じ気持ちです、姫様!……しかし、よろしいのですか?

ええ、わたくしをどこへなりとも連れて行って下さい。お慕いしております、姫様。

ヒューゴ……

「ひじっ！」と抱き締めあつ。）

てきな！

きゃあー！！すごい、すごい！これぞまさにハーレクイン！

1国に1つは欲しい後宮事情ですね！愛の聖地はここにあったのですね！！身分差身分差！騎士と姫様の禁断の恋！！

ハティ様の言葉に、殿下が、ああ、といった複雑な表情で頷き返した。

え？なにになに？？

その呼び名にやけに“て”の多い人が何だつて？

おそらく、エル殿下とハティ様以外のみんなが、同じようにハテナマークを浮かべていたに違いない。

そんな、私達の表情を見て、殿下が苦笑いをしながら説明してくれた。

「ウエツテルテネス帝といえば、この上なく大切にいらした寵妃が亡くなられて後、狂気を患い自ら命を絶たれたと言われる方だ。」

「ええ、その寵妃が、確かアイゼルリーテ妃であつたと記憶しています。」

え？？どういうこと？

でも、そのアイゼル妃？が、あの女性と同一人物なら、ウエ皇帝アイゼル妃 ヒューゴさんってこと！？

後宮内でのどろつどろの三角関係！！おおおお！お話も深まってまいりましたねえ！

「でも、その亡くなられたアイゼル妃がああ幽霊の女性なら、死因は」

「ああ、おそらくあの胸の刺し傷だろう。今までは、病死と言われていたが、裏があつたみたいだな。」

私が抱いた疑問に、すぐに殿下が返事をしてくれた。

そう、あの幽霊の女性の胸には複数の刺し傷があつたのだ。

ということは、アイゼル妃は誰かに殺された……？でも、誰に？？

え？これっっていきなりミステリーに！？

誰か名探偵呼んできてー！もしくは目撃してた家政婦！！

何だか複雑になってきた事情に、真相究明に乗り出しそうなエル殿下とハティ様以外の、みんなの目が遠くなっています。

色々と頭の中で整理が追いつかなくなったようです。

この幽霊話はどこまで広がるのか。

「とりあえず、その少年をあの亡霊と会わせてみたら良いんじゃないのか？」

おお！いきなり簡潔な意見が！

声の主はスケさんでしたか。やはり場のまとめ役はあなたですね！

近頃ようやくみんなの役割分担が分かってきましたよ！あ、カクさんはもちろんちよっぴり不憚な役です！

「え？でも、誰か教えてもらえるんですか？」

私は恐る恐るハティ様を窺った。

「ああ、彼は最近入った新人兵士の」

「えええええ！良いんですか！ほら、守秘義務とか、大丈夫なんですか！？」

あまりにもあっさりと教えてくれたハティ様に、私がつい突っ込んでしまうと、ハティ様は眼鏡をくいと上げて、

「時と場合によります。」

と、答えた。

うん。私がもし懺悔室に行くことがあったら、どこか冷たさを滲ませる美声のいるところは止めておこう。

というか、ハティ様の場合だと、聞いた懺悔内容とか、時と場合によっては良い取引材料にされそうだ。

はっ！まさか、ハティ様が懺悔室の聞き役なんて、全く似合わないようなことをしてるのって……………。

まままままさかの黒幕ですか！！？ひえええええええええ！！ここに最大のミステリーがあああ！！

22・作戦実行中です。その1。(前書き)

少しですが、残酷な描写があります。

22・作戦実行中です。その1。

なんてことがあった後日。

私、エル殿下、ナディア様、カクさん、スケさんは、建物の陰から、兵士の宿舎の長い廊下を覗いています。

あれから、結局、ハティ様にその少年　今は15歳の新兵らしい　の名前を教えてもらい、兵士宿舎の彼の部屋を調べ、ついでに勤務時間も調べ、彼がこの廊下を通るであろう時間に、5人でここで張っているわけです。

プライベート？え？何それ美味しいの？……………一応言ってみた。

しかし、私はともかく、エル殿下とナディア様は皇族なんですよ。ねえ。国民にとっては、まさに雲の上の人なはずなんです。高貴の塊なんですよ。

カクさんとスケさんだつて、エル殿下の近衛騎士をしてるくらいだから、エリートなはずなんですよねえ。

……………こんなところで張り付いてて良いんでしょうか？

みんな思い切り好奇心で動いてますよねえええ！

と、私が、大丈夫がこの国、と帝国の行く末を心配している間に、廊下の向こうに例の少年　　名を、バルール・アニンというらしき人影が見えた。

今はまだ遠くにいたので、目を凝らしてじつと彼を見ると、彼の背後に背の高い人物がぼうつと見え　　。

「っ……ひっ……！」

一瞬見ただけで、私は小さく悲鳴を上げて、エル殿下の背中に張り付いた。

あまりの恐怖に心臓が締め付けられて、胃の中がぐるぐるして吐きそうになる。

ぎゅうつと殿下の服を握り締めた私に、みんなが心配そうな顔をしてくれる。

ぎゃあああああゝ！見ちゃった、見ちゃったよおおおおお！
いや、もうシャレにならない！あれはシャレにならないよ！！
もう、ここで帰ろう？おうち帰ろう！？
あれはいかんで！関わっちゃいかんで！！

怖い怖い怖いグロい怖い怖いいいいいい！！

とりあえず、一通り脳内で叫んでから、あえて深呼吸を繰り返して何とか気を落ち着ける。

「い、良いですか？心臓の弱い方は見ない方が良いと思います。ナディア様も、見るならちらっとだけにしといたほうが良いですよ？

誰か、カクさんを支えといてあげてください。きっと気を失います。

それでは、皆様……心の準備は良いですか？……い……いきますよ？」

私の言葉に、ナディア様は、エル殿下の背中にくっ付いた私の背中に、スケさんがカクさんの背中に張り付いた。

「何で俺が前！？」と、慌ててスケさんの背後に行こうとするカクさんの肩を、スケさんががっしり掴んで支えている。

ほほほ、なんてワタクシの言葉に忠実に従って下さるのかしら。

私は、殿下の背中に顔を付け、バルールくんを視界に入れないようにしながら、一つ息を吸って言葉を唱えた。

「可視化！」

私達のいる場所と、バルールくんがいる場所はかなり離れているので、学校のグラウンド半分くらいの巨大な魔方陣が足元に現れる。

それと同時に、以前と同じように、辺りがうっすらと暗くなった。

「っーきゃああああー！！」

せめて、誰も吐く人がいなかっただけで、褒めてあげたいくらいだ！
偉そうに言っている私は、まだ口の中が酸っぱいですが。

古い型の騎士服は、前から後ろからズタズタに切り裂かれていて、黒いシミと付いた泥で元の色が分からない。

おそらく長かったのであろう髪も、所々切られ、不揃いでぼさぼさだ。

そ……それから、ヒューゴさんを殺した犯人は、よほどヒューゴさんに恨みがあったのではないかと思われる。

だって、顔が………！体以上にズタズタに切られているのだ。元の容姿なんて面影もないくらいに。

縦横に走る傷と、そこから流れ落ちた血がこびり付いて、ヒューゴさんの顔はよほど免疫のある人でないと直視できない。

ちらっと見た一瞬で、私の頭にはヒューゴさんの様子が頭に張り付いて離れなくなった。

うつつ、夢に見る！これ絶対夢に見るよ！！

あの日以来、殿下の部屋で寝させてもらってはいなかったけど、今日も集合だな、これは。

当のバルールくんは、いきなり辺りが暗くなったことに驚き慌てはしたが、背後のヒューゴさんに気付かないまま、首を傾げながら小走りで廊下を通り過ぎて行った。

うむ、あれを担いであんなに軽快に走っていけるとは、バルールくんって案外大物かもしれん。

23・作戦実行中です。その2。

そんなバルールくんを見送った後、私達も移動を始めた。

実は、この後バルールくんには、アイゼル妃のおられる例の武器庫の建物へと、行ってもらうことになっているのだ。

下っ端とはいえ、未だ新人兵士であるバルールくんは、本来1人ではあの辺りには行っではいけないそうさ。

危険だったり、あと過去に新人兵士に武器の持ち逃げをされたことがあるから、との理由かららしい。

それを、今日は1人で行ってもらおうのだ。

え？どうやってそう差し向けたかって？ふふふ、こちらには権力者がいるのだよ！こんな時に使わんで、何のための権力か！

目的はもちろん、アイゼル妃とヒューゴさんを会わせるためです！

まあ、会わせることで何が起るかは、さっぱり予想がつかないんだけど。

漸く会えた2人が、手に手を取って愛の成仏、だと良いんだけどな。

なんてことを考えながら、もそもそ移動しているわけですが。

今の状況は、エル殿下の後ろに私が張り付き、その後ろにナディア様が引っ付いているという、電車ごっこのような状況の、エル殿下下号と。

その後からは、魂が抜けたままのカクさんを、スケさんが後ろから押して進ませているという、カクさん号が続いている。

そんな2つの電車ごっこが、城の敷地をこそこそと歩いているわけです。

あ、ほら、案の定、すれ違った兵士の方が気まずそうに目を逸らした！

お、あっちの侍女さんは、先頭のエル殿下の美貌に見惚れたまま、背後のおかしさには気づいてねええ！

そっちの侍女3人！「私達も加わりたくい！」って。入りたいならどうぞお入りなさいな！行き先は恐怖の幽霊劇場だな！

そんなこんなでやってまいりました、例の武器庫のある建物。

私達は、武器庫の建物と廊下で繋がれている城の西棟に隠れながら、その建物に入っていくバルールくんを見送っていた。

「来た。」

既に可視化の魔方陣を敷いていたので、ぼんやりと薄暗い中で、エル殿下が声を上げた。

巧みにバルールくんの背中から視線を逸らしながら見てみれば、バルールくんの正面からはアイゼル妃の幽霊が。

可視化の魔方陣の中なので、当然にバルールくんにもアイゼル妃の幽霊は見えているようで、突然現れた幽霊に、バルールくんは声にならない悲鳴を上げてその場に尻餅をついた。

背後からでも、その体がかくかくと震えているのが分かる。

あ、何かちょっと罪悪感。

でも、許してバルールくん！これも昔のお姫様と騎士の恋のため。そして、しいてはその騎士にとり憑かれている君のためになるのだ！

後でちゃんと、説明と謝罪はしに行くからね！

「あら？」

ふと、私の後ろから、ちらちらとバルールくん達を見ていたナデア様が、声を上げた。

さっきはあんなに怖がってたのに、意外と好奇心が強いですね。いや、私も人のことは言えませんが。

「え？素通り？」

ナディア様に続いて、私もつい口に出してしまった。

だって、廊下の突き当たりを通りかかったアイゼル妃は、目の前にバルールくん　　プラス、ヒューゴさん　　がいるにもかかわらず、相変わらず目線の定まらないぼんやりとした様子のまま、その建物の奥へと歩いて行ってしまったのだ。

そして、バルールくんの背後にいたヒューゴさんも、見えないので表情は分からないが、特に変わった様子は見られなかった。

え？お互い気づいてない？あんなに真正面にいたのに？？

アイゼル妃が消えた途端、慌てて建物から逃げ出すバルールくん
に内心で謝って、全員今の状況に首を傾げたまま、とりあえずいつ
たん殿下の執務室へ戻ろうということになった。

境界の消えた建物は、人の声も風のさやめきも聞こえなく
て、やけに静かだった。

24・鬼の一声って怖い。

エル殿下の執務室に戻ると、仕事をしていたらしいハティ様が顔を上げた。

何か、まじめに仕事をしてるのがハティ様だけなんて………やっぱりこの国大丈夫ですか？いつかハティ様の国になっちゃいますよ！？と、殿下の胸元を掴んで揺さぶりたくなつた。

そして、やっぱり侍女さんの淹れて下さつたお茶を飲みながら、私達はハティ様に事の次第を説明しました。

うーん、ボスと現場　別名下っ端　のような状況な気がするんだけど。

ちなみに、ヒューゴさんの様子のところでは、誰もが手にした力ツブをソーサーに置き、目を逸らして口を噤んだ。

いや、もうちらつとも思い出したくないんですよ！

一人でお風呂入れなくなりますから！目を瞑って頭洗えなくなりますから！

そう言えば、やけにカクさんが静かだなと思ってたら、何故か苦行を乗り越えた修行僧のような顔でお茶を飲んでた。

つまり、無我の境地ってやつね。全くの無表情無反応無記憶。

わあ、ついに行くところまで行っちゃったのね。でも、いっそそっちの方が幸せかも。

さて、話はやがて、武器庫のある建物での、アイゼル妃とヒューゴさんの様子についての考察になりました。

「2人ともが、全くの無反応でしたよ。まるで、目の前に何も無いみたいな。」

私が首を傾げながら、その様子を口にする、それまでじっと考え込んでいたエル殿下が口を開いた。

「もしかしたら、何か条件があるのかもしれないな。」

「条件、ですか？」

つい聞き返してしまった私の目を、エル殿下は真っ直ぐに見返し、

「そう、例えば、2人が待ち合わせをした時間、とかな。」

低い心地の良い声が、ゆっくりと糸口を紡いだ……。

と、まあエル殿下がカツコよく提案をしてくれたわけなのですが、そりゃあ当然に、「え？で、それっていつ？」ってことになりま
すよね。

アイゼル妃に聞くわけにもいかないし、ヒューゴさんに聞くのも……いやいや無理でしょう！試してもいけません！

てなわけで、あーでもないこーでもない、え？これは？いや〜ないない。ちよつとそれ取って。はいどうぞ。みたいな話を長々と繰り返した結果。

「昼間に駆け落ちを企む馬鹿がどこにいますか。恐らくは夜中でしよう。いつそ一晩中挑んでごらんなさい。」

と、鶴の いや、鬼の一言で、私達は、バルールくんを連れて一晩中あの建物付近に待機することになりました。

ふふふ、何かハティ様のキャラが出会った時と随分違っている気がするんですが……。鬼畜さ急上昇、鰻上りですが！

え？なになにスケさん、そんな優しく肩を叩かないで。

あ、あれが素なんですか？まああ、親しい人にしか本性を表さない。それだけ仲良くなれたってことですか。わーい、うれしいなあ……（棒読み）。

25・突っ込み厳禁のシリアス展開。その1。

んで結局、夜中に行くなんて怖すぎる！これ以上付き合っつてられつか！と、夜になる前に城から逃げようとしたところをエル殿下に捕まり、部屋に立て籠もったところをナディア様に連れ出され

ちなみに、ナディア様は、いつそこまで来たら最後まで見届けなければ気が済みませんわ！とのお覚悟だそうです。私はこうして無事！（涙目）集合場所の城の西棟にいるわけです。

私とナディア様が到着すると、そこにはすでに、あまりのことに緊張して固まっているバルールくとエル殿下、そしてカクさんの襟首を掴んだスケさんがいました。

あ、スケさん。いないと思ったら、スケさんはカクさんの捕獲要員だったんですか。

いつの間に無我の境地から帰って来たのか、カクさんは真っ青な顔でガクガクブルブル震えています。

涙目で、「ねえ、俺ここにいらなくてもよくない!?」とスケさんに縋りついては、「お前も見届けろ。」とスケさんに宥められてます。

ああ、良かった、それでこそカクさんです。一人だけ高みに昇り詰めてしまうなんて、お天道様が許してもこの私が許しませんよ！

辺りはもうどっぴりと暗闇に沈み、お城の方からもどんだん人の気配や灯りが無くなって、ひっそりと寝静まってきたころ。

私達は、あの武器庫の建物の出入り口が見える辺りに待機していた。

すぐに対応できるように、すでにこの辺一帯に、“可視化”の魔方陣が敷かれています。

エル殿下は、廊下の見える辺りの壁に背を付けて立っており、バルールくんはスケさんと何やら話している。

もう、ヒューゴさんに慣れたんですか！やはり只者ではないようです！スケさん！

そして、私とカクさんとナディア様は身を寄せ合ってもバルールくんの背後を見ないようにして、気を紛らわせるために話をしていた。

「あら、それは何ですか？」

話が途切れたとき、ナディア様がカクさんの胸元に掛かっている物に気付き、カクさんに問いかけた。

あ、それは私も実はずっと気になってました！

カクさんに許可を得てそれを手に取ると、それは、な……何と！エ……エル殿下の手のひらサイズのぬいぐるみ人形！！

何でも、お守り代わりにスケさんが作ってくれたそうです。ただけ器用なのよ！んで、どんだんだけ愛されてんの！？

しかも何か、人形の肌とか服とか、この手触りにこの光沢……良
い布使ってますね。

わあ、目はちゃんと青い……宝石ですか。しかもこの大きさ……
いくら金かけたんですか！？この人形！！

輝く金色の髪の毛なんてすごいリアル！

な、何と、1本だけ本物のエル殿下の髪の毛が混ざっているそう
です。どうやって手に入れたのが気になる！

しかし、その前に

この人形持つてる方が怖いわああああ！！

思わずその人形を壁にぶつけようとしたが、その壁にエル殿下が
いたので止めました。祟りが起きそう。

ああ、でもバルールくんやナディア様が、ちよつと羨ましそうに
この人形を見てるよ。

うん、とりあえず、このお守りが流行らないことを祈つとこう。

エル殿下の髪の毛のために！

なんて、比較的まったりと時間が過ぎていたとき、途端に辺りに
ぴりりとした緊張が走った。

「来たみたいだな。」

エル殿下がそう言って壁から背を離れた。

そして、バルールくん目を見ると、バルールくんはすでに事情を聞いていたようで、こくと頷いて武器庫の建物の方へと歩き出した。

当然、背後のヒューゴさんもそちらへ向かい、その後に、エル殿下が歩いて行く。

ああ……！私は今、勇者達の旅立ちを目にしている！！

エル殿下もバルールくんも本当にすごいです！すごい勇気です！素晴らしいお覚悟です！お2人の背後に後光が見えます！！

特にバルールくん！なんて勇ましい姿なのでしょう！あなたよりしつかり年上な私達がここでガクブルしてて、本当にすみません！

あ、よろしければこの人形でも、と、エル殿下人形を渡そうとしたけど、すでにカクさんががつり握りしめてた。

武器庫のある建物の入り口にアイゼル妃が現れる。

しかし、昼間の虚ろな様子ではなく、明らかに扉の辺りに身を隠し、きよろきよろと辺りを窺っている。

こんな夜中に駆り出されて非常に悔しいが、どうやらハティ様のことだったように条件が満たされているらしい。

やがて、バルールくんが、建物と西棟をつなぐ廊下の半分まで行ったところ、すうっとヒューゴさんがバルールくんの体をすり抜けて、バルールくんよりも前に出た。

そして、ヒューゴさんがバルールくんを通り抜けた瞬間、がくとバルールくんの体が崩れ落ちた。

慌てて、バルールくんの背後にいたエル殿下が、片膝を付いてバルールくんの体を支える。

そんな2人の向こうで、徐々にヒューゴさんがアイゼル妃へと近づき、ついにアイゼル妃がヒューゴさんに気付いた。

顔を上げ、驚いた顔をした後、急いでヒューゴさんの方へと小走りに近づいていく。

アイゼル妃もヒューゴさんも、どちらも変わらずぼろぼろの格好で生気の無い顔だけど、ちゃんと意志のある行動をしてるだけで、やけに人間らしく思えた。

『待っていたわ……、ヒューゴ……！
あなた……その姿……』

おそらくアイゼル妃のものだと思われる声が聞こえた。

その声は今にも風に掻き消えてしまいそうなほどか細くて、しかし、可視化の魔術が作用しているのか、しっかりと辺りに響いて聞こえた。

『私のことはどうぞお気になさらず。さあ、早くここを出ましよう。』

ヒューゴさんがそう言って、アイゼル妃に手を伸ばす。

驚いた表情だったアイゼル妃も、おずおずとヒューゴさんの手に、自らの手を乗せようとした。

その時。

ゆ、許さん！そのようなこと、ゆるさんぞおおおおお
おおおおお！！

獣の咆哮のような声が辺りにびりびりと響き、武器庫のある建物の奥から真っ黒な瘴気の塊が渦となって噴き出した。

その黒い塊は、霧のような触手を、アイゼル妃の腰の辺りに巻き付け、彼女を自らの瘴気の中へと取り込もうとする。

許さぬ。許さぬぞ、ヒューゴおおおおお！！何故、私から彼女を奪おうとする！死してなお！！なぜだああああ！！

黒い瘴気の塊はズルズルと建物の奥から這い出し、ヒューゴさんの方へと向かって行く。

ぎゃああああああ！！な、何か出たあああ！！何あれ、何あ

れ!?!?

あまりの展開に、思わず解説だけに従事しちゃったよ!!

えと、えと、なんて説明したらいいんだろう!?

あ、しいて言えば、某ジリアニメの、崇り神の黒くてデカいバ
ージョンって感じ。周囲で動く瘴気の触手が、すごくリアル!

黒一面に覆われた体の間から、ぎよろりと血走った目がのぞいた。
うひひひひひ!

私とナディア様が、両手を握り合って、固唾を飲んで成り行きを
見ている間にも、瘴気の塊からはものすごい勢いでどす黒い瘴気が
吐き出されている。

憎い、憎い! ヒューゴおおおお!! わしからアイゼを奪う!
許さぬ! 今度こそ、その身を消し去って!!

その声と共に、吐き出された瘴気がヒューゴさんへと襲いかかっ
ていく。

『……………まさか、……………テネス…?』

ヒューゴさんはその場に立ち竦んだまま、驚きを浮かべ瘴気の塊
を見上げていた。

26・突っ込み厳禁のシリアス展開。その2。

あ、どうも、カーヤ・ナツキと申します。

えー、この度はシリアス展開のようですので、私の突っ込み、感想等は控えさせて頂いて、実況中継のみに専念したいと思います。

ちょ、うるさいのが居なくなっただとか言わないで下さいね！地の底までへこんじゃいますよ！？引き籠りますよ！！？

こほん。でわ、どうぞー！

わあああああー！飲み込まれるよ！！ そう、思ったとき。

『止めてくださいっ！！』

その、偉くも力強い声に、ヒューゴさんを覆うようにしていた瘴気が、ぴたりと動きを止めた。

『もう、お止め下さい。………陛下。』

悲しげな、声が響いた。

ザザッ

その時、砂嵐のような音がして、瘴気の塊の前に薄いセピアっぽい色の映像が浮かび上がった。

それは、砂嵐だらけの薄いスクリーンに、何度も何度も途切れながらも壊れた映写機がカラカラと回り続けるように、一コマ一コマの画像を映し出しているようだった。

これも“可視化”の魔術の影響だろうか、それとも他の何かの力が働いているのか、分からずに、私はそれでも目を凝らしてその映像を追った。

ザザッと音を立て、粗い砂嵐の後に現れたのは、覆面の男に金を渡すシーンだったり、ドレスを着た女性にナイフを突き立てるシーンであったりした。

ただ、その映像はどれも、誰かの目線から見たものばかりのようで。

おそろく目線の主は、瘴気の塊の本体となった……ウエ

……皇帝、なのだろう。

次々と切り替わる映像。それは、ヒューゴさんとアイゼル妃が笑いながら話しているものだったり、悲しそうに涙を零すアイゼル妃だったり、緊張で強張った顔だったり。

その後はただ、笑顔、笑顔、笑顔。

徐々に幼く逝っていく、アイゼル妃の、笑顔だった。

そして、その笑顔の映像が、6・7歳くらいの女の子が、両手で一輪の花を握り、はにかむ様な笑顔で止まったとき。

スクリーンに真ん中から亀裂が入り、ぱきいんとガラスが割れるような音を伴って、粉々に砕け散った。

う……ぐ……おおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオアガアアアアアアアアアアア！！！！

黒い瘴気の塊から、絶叫が迸った。

初めは人の声だったものから、低く太く地の底から這いだしてくるような声へと変わる。

その叫びに、私はナディア様から手を離すと、通路の途中でしゃがんだままのエル殿下の方へ、急いで駆け出した。

ああ、今ので、完全に黒い塊が魔物と化したのが分かった。

先ほどよりも一回り大きくなった塊は、この世の全てを取り込もうとするかのように、辺りに触手を走らせる。

そこにはもはや意思はなく、無差別に周囲のものを絡め取ろうと

蠢き回る。

やばい！このままでは、殿下達まで……！

「殿下……！」

走りながら叫ぶと、エル殿下が驚いて顔をこちらに向けた。

「“浄化”の魔術です！早く……！」

大声で言えば、殿下は頷いて、抱えていたバルールくんをそっと床へおろした。

そのまま両手を前に掲げる。気を落ち着けるように、背中が一度上下した。

「浄化！」

殿下の声が響くのと同時に、殿下の両手の間に急激に光が生まれ、その光は勢いよく大きさを増していった。

まるで昼間になったような、強い光が辺りを包み、世界を真っ白に塗りつぶす。

「……………え？」

その時私の目に、光の中に立つ、5歳くらいの小さな子どもの影

が映った。

影なのではつきりとはしないが、その子は嬉しそうに笑ったかと思つと、くるりと体を翻して光の向こうへと走って消えていった。

何だつたんだと目を瞬かせる私と離れた所では、殿下の手元から伸びた光が、瘴気の塊を突き刺し、切り裂き、真っ白な光の奔流が黒い瘴気を拭い去っていく。

グギヤアアアアアアアア!!!

もがく様な絶叫を上げながら、瘴気の塊が散り散りに霧散し、やがて風に攫われるように消え去った。

しばらくして訪れた静寂の中、私は手を下ろし荒い息を吐くエル殿下の傍らへと立った。

その時ちらりと辺りを見回したが、やはりさっきの小さな子ども姿はない。

様子を見る限り、殿下は、いきなり初めて大きな光の魔術を使つたため、少し疲れてしまっただけのようだ。

殿下の魔力にはまだ余裕があつた。

やはり、殿下の魔力は非常に膨大のようだ。

このことが、今後、彼を苦境に立たせるようなことに、ならなければよいのだけだ。

ふと苦笑いを浮かべた私の目に、ふわり、と小さな光が過った。

顔を上げてみれば、いつの間にか、辺り一面にふわふわと螢火のような光の玉が、いくつも漂っていた。

おそらくは、先ほどの“浄化”の魔術の残滓だろう。

夜の帳の下りた真つ暗な世界に、小さな光の玉がゆらゆらと舞い飛ぶ。それは、ひどく幻想的で。

その光の玉の向こうに、向かい合って立つ男女の姿が見えた。

一人は、腰のあたりまで淡い金色の髪を伸ばし、上質なドレスに身を包んだ、遠目からでも儂い美しさを感じさせる女性。

そしてもう一方は、騎士服をきっちり着こなした、カーキ色の長い髪を背中で括った、きりりと引き締まった顔立ちの青年だった。

あれがきつと、生前のアイゼル妃とヒューゴさんの姿なのだろう。

アイゼル妃を真剣な顔で見下ろすヒューゴさんの前で、アイゼル妃ははらはらと涙を流した。

『ごめんなさい、ヒューゴ……、わたくしのせいで、貴方まで……』

……

『どうか泣かないで下さい。これは、私も覚悟をしていたことです。』

それでも私は、あなたの願いを叶えて差し上げたかった。』

涙で頬を濡らしながらも、顔を上げたアイゼル妃に、ヒューゴさんはそっと手を差し出し。

『……………ようやく、貴方を外に出して差し上げることができる。さあ、参りましょう。』

小さく笑ったヒューゴさんに、アイゼル妃も、戸惑いながらも小さく頷いて、ヒューゴさんの手に、自らの手を重ねた。

『世のしがらみから解き放たれた今だからこそ、ずっとあなたに伝えたかった言葉を、口にするのを許してください。』

アイゼ、ずっと君のことが好きでした。』

柔らかくも切ない愛の言葉に、アイゼル妃はそっと微笑んで、

『ありがとう。ヒューゴ。』

それだけ、答えた。

そんなアイゼル妃の言葉に、ヒューゴさんは満たされたように笑い。

そのまま手を重ねた二人は、中庭の真ん中辺りまで歩み出たかと思つと、夜闇に溶けるように、すっと姿を消した。

ただ静かに見守っていた私達の前で、小さな光の玉が祝福でもしているかのようにくるくると踊っていた。

26 突っ込み厳禁のシリアス展開 その2。(後書き)

べたな展開で、すみません……；

27. どうもお疲れ様でした。その1。

「 ということがあったんです。ボス！」

「 誰がボスですか。」

いや、もうボス以外何者でもないよ！1人優雅にお茶飲みながら報告聞いててさ！

あ、どうもお早うございます。

ところ変わって、翌日のエル殿下の執務室に来ております。

やれやれも、あれから何が何やら。

とりあえず、へろへろになったエル殿下をナディア様が支え、気絶していた 　　いつからかは不明。 　　カクさんをスケさんが背負い、気絶したままのバルールくんを私が抱え 　　非力ですが、頑張りましたよ！ 　　、何とかエル殿下の寝室へたどり着いた私達は、その場で倒れ込み、全員そのまま眠ってしまったのでした。

んで翌朝、ふらふらしながら殿下の寝室を出てきたところを、仕事をしていたハティ様に出会ったというわけです。

あー、何か、ハティ様の顔を見て、現実だあって実感しちゃった

辺り、もう色々末期な気がする。

というわけで、現在、殿下の執務室で、相変わらずの、私、エル殿下、ナディア様、ハティ様、カクさん、スケさんのメンバーでお茶をしているわけなのですが。

エル殿下は、椅子に深く腰掛けてお疲れのご様子だし、ナディア様は何やらぼーっとしてるし、カクさんも遠くを見てぼーっとしてるし、スケさんはいつも通り無口無表情で紅茶を飲んでるし、誰も何も言わないから、何やらだるーい空気が漂ってます。

あ、私？私も机に頭を伏せてぐったりしてますよ。

昨夜は別に何もしてはいないんですけどね、これは、あれです。シリアス疲れ。

あんな、思い切り口出しのしにくいシリアス展開に陥られ、しかもそれに合わせてのシリアス解説を頑張ったんですよ！

もー、シリアス語彙を使い切った気分です！

そして何より、私のこの苦勞が、ここにいるみんなに全然わかってもらえないのが悔しいiiiiiiii！！！！

そう言えば、バルールくんは、エル殿下の寝室で未だお休み中です。

バルールくんの寝顔は、それはもう安らかなものでした！

長年の悪夢からようやく解放されたので、それも無理ないと思うけど。

しかし。

「私思うんですけど、バルールくんは、もしかして、ヒューゴさんの血縁者なんじゃないでしょうか。」

顎はテーブルに付けて、顔だけ上げてそう言えば、エル殿下が「そうかもしれないな。」と頷いてくれた。

最近気づいたんだけど、エル殿下って、何だかんだでちゃんと私のお話を聞いてくれたり、返事を返してくれるんだよね。

何か、それってちよつと嬉しい。

あ、それで、バルールくんに対して私がそう思ったのは、ヒューゴさんが、死んだ後に、アイゼル妃のようにお城に憑くのではなく、人に憑いてたからということと、いくらなんでも、全く関係ない人なら15年近くもヒューゴさんのような年期のある幽霊にとり憑かれていたら、精神的におかしくなっているのではないかと考えられるからだ。

つまり、バルールくんはヒューゴさんに対して何らかの耐性

それが、おそらくは血によるものだと思うれる。

があった

んじゃないかと、思うわけです。

まあ、今となつては確かめようが無いけどな。

横目でエル殿下を見る限り、エル殿下も近いことを考えているのだと思う。

テーブルに顎を付けるといふ行儀の悪い格好で、うだうだ考えていると、一度席を立ったハティ様が、自分の机から用紙の束を持って戻ってきた。

「こちらの方でも、ウエツテルテネス帝とアイゼルリーテ妃について調べてみたのですが、なにぶん古い記録でしたので、分かったことはあまりありませんね。」

そう言いながら、ハティ様は手元の資料を捲った。

いつの間に調べていたのでしよう！？さすがハティ様です！

私達は現場で、ハティ様はデスクワークだったわけですね！え？それって、肉体派と頭脳派ってこと？？

「まず、ウエツテルテネス帝。正式には、ウエツテルテネス・ジンセラム・デュ・シューミナルケア。第29代皇帝。享年34歳。

穏やかな賢帝と評判の高い方でしたが、寵妃であるアイゼルリーテ妃が亡くなられて後、人が変わったようになり、時に室内で何事かを叫びまわりながら、剣を振り回すこともあったそうです。

身罷られた状況に関しては、アイゼルリーテ妃の肖像画のある部屋で、自らの胸を短剣で突いて亡くなつてらしたのを、翌朝側近が見つけたようですな。」

ハティ様が淀みなく説明する中、私達はみんな黙ってそれを聞いていた。

あの時、“可視化”の結界の中で浮かび上がった、おそらくウエ皇帝記憶の映像。

あれには、誰に何を聞くよりも、はっきりとウエ皇帝がしたことも、彼がおかしくなった経緯も、すべて浮き彫りにされていたのだから。

「それから、病気で亡くなられたとされる、アイゼルリーテ・ジョレス・デエ・シューミナルケア側妃。享年は26歳。本名は、アイゼ・モリーナ。

彼女は平民の出自で、親が城の調理場で働いていたそうです。

それで、たまたまお使いで城を訪れた時に、幼い頃のウエツテルテネス帝と、その側近で従兄のヒューゲンバーク・ハージエス氏に出会い、しばしば共に遊ぶようになったとか。

その後、ウエツテルテネス帝が即位した際に、側室として後宮にお入りになったそうです。

彼女を寵愛していたウエツテルテネス帝は、アイゼルリーテ妃を正室に据えたかったようですが、元が平民ということで認められなかったようですね。」

へえ、じゃあ、ウエ皇帝とアイゼル妃と、ヒューゴさんは幼馴染

だっ たんだ。

そこから始まる三角関係。うっ…、あれを見た後じゃなければ、ものすごくときめけたんだけどなあ。

反応の薄い私達に構わず、ハティ様はくいつと眼鏡を押し上げて、資料を一枚めくり。

「最後にヒューゲンバーク氏ですが、彼に関する記録は、城には全くと言っていいほど残っていませんでした。資料室の状況からすると、意図的に消されたものと考えられます。」

他の資料から辛うじて読み取れたのは、彼が文武に優れ人望も厚かったということと、ある日突然姿を消されたらしいということですね。」

ハティ様の説明を一通り聞いて、みんなは同じタイミングでお茶を飲んだ。

ハティ様も資料をテーブルに置き、お茶を口にする。

アナウンサー張りの滑らかな説明、ありがとうございます！

今回のことは、おそらく後宮の生活に疲れたアイゼル妃が、幼馴染であるヒューゴさんに外に連れ出してほしいと頼んで、それに気が付いたウエ皇帝が嫉妬のあまりヒューゴさんを始末するよう命じ、思い余ってアイゼル妃まで手にかけてしまったってところだろう。

それで、愛する者を喪った苦しみからか、自責の念からか、自らも命を絶ってしまったと。

ああああ！それでも疑問が山積みだあ！

例えば、昨夜の瘴気の塊の本体がウエ皇帝だとして、死んだ後に徐々に瘴気が集まりああったのか、それとも生前からすでに瘴気に憑かれていたのか。

もしそうだとすると、いつからだろう。アイゼル妃を殺してから？アイゼル妃とヒューゴさんの駆け落ちを知ってから？それとも、実はもつと前から………？

後は、あの時浮かび上がった映像だ。

いくら“可視化”の魔術があつたって、さすがに人の記憶を覗けたりはしないし。他の何かの力が働いたとしか。

そこまで考えて、私はふーと息を吐いた。

でも、これ以上真相は探りようがないから、最終的には推測に留まるしかないんだよね。

28. どうもお疲れ様でした。その2。

とりあえず、どうしても気になるのは……。

「結局アイゼル妃は、誰が好きだったんですかね？」

ちょっと手を上げて発言した私に、みんなの視線が集まる。

「だって、最後のヒューゴさんとアイゼル妃のやり取りだと、2人は恋人同士ではなかったようですし。愛の逃避行では無かったんですかねえ。」

私が首を傾げると、他のみんなも頷いてくれた。

「わたくしは、お互い口にはできませんでしたが、やはりヒューゴさんだと思いますわ！」

あれ、ナディア様が元気になってる。てか、目がきらきらしてる。

「お互い口にできなかった想い。それを死して後に漸く伝えることができたなんて、すごく切ないですわ。」と、遠くを見ながら、ほつと溜息を吐いてる。

その様子は、昼ドラに心躍らせる奥様のようだ。

あれ？さつき静かだったのって、禁断の愛の世界に浸ってたからですか???

「もしくは、他に好きな人がいたとかね〜。」

やっぱり少し元気が無いような様子で、カクさんがふつと笑った。

ああ！違う！これは、様々な（精神的）苦難を乗り越えて、（精神的に）成長した者の、達観した余裕のある微笑みだ！世の中の地獄を見てきました、みたいな。

RPG風に言つと、カクノシンは（精神的な）レベルが上がった、ってことか！

んん？カクさんの名前って何だっけ？

「どうだろうな、女心は複雑だからな。」

スケさんが手に持ったカップの中を見ながら、誰にとは無しに言った。

えええ！？ス……スケさん！何ですかその意味深な発言！

過去に女性と何かあったんですか？あったんですね！？心に禁断の思い出の宝箱があるんですね！！

し……知りたい！いや、だが、スケさんのミステリアスさを今後も大事にしていくなら、そっとしておくべき！？でも気になる！！

「さあな。」

疑問を投げかけた私に対して、エル殿下は苦笑いを浮かべながらそう返した。

あつ、止めてください。その、人の恋愛事情が気になるなんて、まだまだ子どもだな、みたいな微笑ましげな眼差し！

こんなところで大人の余裕を見せ付けても無駄です！

私忘れませんかからね！あなたが昨夜、カクさんのエル殿下人形をこっそり捨てようとして、カクさんの手から抜けなくて苦戦してた姿を！

「分かるはずがありません。」

ええ、ハティ様は相変わらずのクールなお答えです。

でも良いんです！ハティ様がこの話題に乗ってきた方が怖いですから！

ナディア様みたいに、頬を染めてうつとりとされても……

……見たいいいいいいい！！

「カーヤさんはどう思われます？」

興味津々に聞いてきたナディア様に、私はふっと笑い。

「私は、裏の裏のそのまた裏をひっくり返して、ウエ皇帝だと思います！」

胸元で、両方の手でこぶしを作って力説してみた。

しかし、みんなの反応は、ええ〜？つて、不評な感じだ。

ハティ様は、「変な呼び方をしないで下さい。」と呆れ気味。

でも、だって、すごく綺麗だったのだ。

ウエ皇帝に向けた、アイゼル妃の、あの映像の中の笑顔が、どれも。

そりゃあ、最後の方は、辛そうな顔だったり、泣き顔だったりしたけど、それ以前、きつとアイゼル妃が後宮に入るまでは、あんなふうにならぬウエ皇帝に微笑みかけてたんじゃないかな、って思った。

でも、もし、2人が心から想い合ってたんだとするなら、今回のこの結末は……………。

すれ違っちゃったんだろうな、気持ちがお互いにつましく伝えられなかったのかもしれない。それはひどく悲しい。

やっぱり、言わなきゃならないことは、ちゃんと直接伝えとかないと、だよな。

うん、と頷いて、私はエル殿下を見た。

「殿下！」

席を立て、声を上げた。

そんな私に、エル殿下は驚いた顔をしたけれど。

「私は……………」

本当はずっと考えてた。

いつ言い出そうかと悩んでただけ。

ぐっと言葉を飲んだ私に、みんなの視線が集中しているのが分かる。

よし、言っぞ、言っぞ。

私は、一息を吐いて、ぐっとお腹に力を込め。

「私、明日この城を出ようと思います！」

きっぱりと言えば、周囲から息を飲む声が出た。

殿下も、目を見張って私を見上げている。

もう、エル殿下への魔術の教授も一通り終わったし、光魔術の最重要特性である“浄化”の魔術も問題は無かった。

幽霊事件の解決はおまけのようなものだったけど、帝国図書館の魔術書も調べ終わったし、宮廷魔術師や、めぼしい魔術師の方々の話も聞いた。

もう私が、ここに居る理由が無いもの。

いや、本当は、いつ、どう言おうか考えてた。

見送られるのはどうにも恥ずかしいし、別れの言葉を言うのは、何だか寂しくて。泣いてしまいそう。

みんなを前にして、「さようなら」なんて、言いたくなくなるほどには、みんなといえるのが楽しかったから。

だからと言って、いつ元の世界に還るか分からないから、「またね」って約束も躊躇われた。

いつそ、みんなが寝てる間にこっそり出ていこうかと、ちらっと考えたこともあるけど。

じつと殿下を見ていけば、殿下もしばらく真顔で私を見返し、やがてふつと笑って、「そうか。」と答えた。

その言葉に、私は、ちゃんと伝えてほっとするような、勝手にも止められなかったことを寂しく思うような、複雑な想いを浮かべな

がら、笑った。

うまく笑えていたかは、分からないけれど。

だって、ここはあまりにも心地が良すぎて。

いつまでも居たいと、思ってしまうから。

でも、私は還らないといけない。

きつと心配している両親や、弟が待つてるから。

家族が、必死になって私を探している姿を想像するだけで、心臓が締め付けられるほどの痛みが走る。

もういいから、自分で必ず還るから、ただ待っていて、と、せめて伝えられたらどれほどいいだろう。

あの温かい家を、優しい家族を、穏やかな日常を、思い出すだけで泣きたくなるの。

だから、いつまでもここにいるわけにはいかない。

前に、進まなきゃ。

「つきましては、報酬は誰に貰えばいいのでしょうか?」

諦められないものがあるの。

28. どうもお疲れ様でした。その2。(後書き)

今後は、更新が遅くなります。

29・謁見の間に行こう！その1。(前書き)

以前敷いた伏線の回収話です。

29・謁見の間に行いじう！その1。

その日の夜、何と、皇帝陛下が夕食に誘って下さった。

マナーとか、どどどうしたら！？と、昼過ぎからパニックになっていた私を、エル殿下とナディア様が、「普通にしていればいい。」と宥めてくれた。

そうして、もういつそ今から出ます、と言ったときゃよかったと、私が頭を抱えている間に、時間は過ぎていき。

どうも、ただ今、映画とかでしか見たことないような、長いテーブルに着いている私です。

いや、想像してたのよりは短いけど、でも、私と陛下までは5メートルほどの距離がある。

こうして実際に座ってみて、改めて思うけど、この長さの意味って何？？

陛下のお言葉に答えるのにも、腹筋に力を入れて大きな声で答えないといけないから、食物を詰め込まれている胃が、過重労働に文句言いそうなんだけど。

縦長のテーブルの両端に座っている皇帝陛下と私、そして、陛下の両サイドにはエル殿下とナディア様がいた。

第二皇子は、今は帝立イル・シエル学院にいるらしく、また、皇后様は、体調を崩していて、避暑地の方で療養中らしい。

とはいえ、そんなに体調が悪いわけではなく、休暇がてらに離宮に行っているのだそうだ。

いや、実は最初っから、皇后様のことは気になってましたよ。

だけど、聞いちゃいけないことだったらどうしようかと、今まで口に出せずにいたのです。

ああ良かった、胸のつかえが取れました。これで気兼ねなく旅立てる。

それから、思ったよりも夕食は和やかに進みました。

いやー、あの子にして、この親あり、と言いますか、さすが気さくなナディア様とエル殿下のお父様です。

皇帝陛下も非常に気さくな方で、最初がちがちに緊張していた私にも、色々と話しかけて下さり、気が付けば非常に穏やかに会話ができるようになってました。

あ、食事の前に、エル殿下の光属性を見つけたことを感謝されました。

陛下が礼を口にされた時の、エル殿下の表情が、ぷぷ、照れくさ

いやらこそばゆいやら。

三者面談で、父親に、先生に対して「うちの子は良い子で」と親ばかり自慢されて、ちょ、父さん止めてよ、こんなところで、なんて言いながら嬉しい、みたいなそんな顔。

隣に座っていたら、肘でうりうり〜と脇腹を突いていただろう。

「それで、城の見学はいかがでしたかな？」

陛下がそう聞いてこられたので、

「ええ、とつても……………楽しかったです。」

くうっ！最後の方をつい遠い目をして言ってしまった！

ここは建前として意地でも、充実した日々でした！とにこやかに答えておかなければならなかったのに！

しかし、どうしても、あの恐怖の日々が頭を過って……………。

ああ、ほら！きっと事情を知っている陛下が、苦笑いしてらっしゃる！我が表情筋の正直者！

あ、でも、気になってはいたんだけど、行けてないところがあるのだ。

「あの、もし不躰な質問でしたら申し訳ないのですが……………」

おずおずと言葉を切った私に、陛下は目線で先を促して下さった。

「謁見の間の、赤絨毯の下に、何かありますか？」

その私の言葉に、陛下は少し考え込まれ、陛下の両サイドに座っていたエル殿下とナディア様は、きょとんと首を傾げた。

「いや、そのようなものは無かったと思うが……………」

思い当たることが無かったのだろう、陛下が、そう答えられた。

一介の小娘に、謀略渦巻く世界を渡ってこられた陛下の顔色を読むなんて芸当はできないが、その表情に嘘はなさそうなので、私は遠慮なく気になっていたことを口にした。

「最初の日にあの辺りに立った時、足元から魔力の残滓を感じたんです。ですから、何か仕掛けがあるんじゃないかと、思ったんですが。」

いや、てつきり落とし穴だと思ってたのよ。

ほら、この無礼者！とか言って、陛下が天井から吊り下げられている紐を引いたら、足元がパカッと割れて奈落の底へ真逆さま、みたいなの！

ちえー、もしそんな仕掛けがあるんなら、是非とも見てみたかったのに。てか、紐引っ張ってみたかったのに。

「ほう。」

そう答えた陛下の目が、何か好奇心に輝いているような……。あれ、なにこれ、前にもどこかで見た様な……。って、ナディア様だー！

わあい、思わぬところで父娘の共通点を発見！実に似た者親子なんですね。

というわけで、食事を終え、折角だから調べに行こう、ってことになりました。

何か、思いつきりわくわく感丸出しの皇帝陛下。

実は、先日の幽霊騒動にも参加したかったらしい。

止めてください、そんなことしたらお付や護衛の人がぞろぞろと……その方が怖さ激減だったな。参加してもらっておけばよかった！

そうして、私、皇帝陛下、エル殿下、ナディア様と、食事の間を出て、謁見の間への移動中、気が付けば、謁見の時に陛下の傍にいた神経質そうなオジサマ　この国の宰相様だったらしいがいて。

途中会った、カクさんとスケさんが、「え、なににな〜？」「また何かしたのか？」と、加わり。

ちよつとスケさん、今までの騒動は、別に私が起こしたわけでは……ないとも言い切れないところが悲しい。

曲がり角で出会ったハティ様は、溜息を吐きながらも加わり。

「別に問題を起こしたりはしませんよ？」と前もって宣言した私に、ハティ様は苦笑いをして「あなたが起こす騒動にも、しばらくは出会えなくなりますからね。」と。

え、何？一瞬心臓が止まりかけたよ。きゅんてしたよ！

ああ！やっぱり普通の鬼畜さとのギャップが大きいだけに、その破壊力は半端ないよ！あ、やばい、私ハティ様にハマりそうだ！こんなところで人生を捨てることになるうとは！

……しかし、だから何で、私が騒動を起こすことが前提なんですか！？

その後にも、ぞろぞろと廊下を進む豪華メンバーに、城で働く侍女さんや騎士さんや文官さん達が、え？何々？あ、ほらあの黒髪の人が噂の……。ああ、なるほど。なんて言いながら、後から付いて来る、付いて来る。

え？何その噂？ちよつと気になる………が、聞かない方が私の心の平穩のためにはいいのかしら？

しかし、どんだけ好奇心旺盛な人が多いの、この城！

こんだけの人の前で、実は何もありませんでした、てへ。じゃあ
終われなくなるじゃないかああああ！

こうなったら、もし何もなかったら、集まって下さった皆様に、
日本人のお持て成しの心をつぎ込んで、一発芸でも見せるしかない！

物真似か？いや、あれは元ネタが分からんとどうしようもない。
じゃあ、一発ギャグ……通じんのかしら、異世界で。

などと、どの芸にすべきか悩んでいる間にも、私達は謁見の間へ
と到着した。

30・謁見の間に行こう！その2。

陛下に許しを得て、中央に敷かれていたカーペットを捲ると、そこには一辺20センチほどの正方形のブロックみたいなものが、床に嵌められていた。

その上部の窪みにはひねるような摘みがあつて、遠慮なくそれを右にひねってみると、90度ほど回ったところで、ずずずずつという音と共に、正方形の台がせり上がってきた。

え？何これ何これ？とテンションが上がりながら見ていると、摘みの付いている天板が左右に割れて、下からドーム状の半透明の水晶が出てきた。

私の頭の中では、何かのヒーローものの、出撃シーンの音楽が流れている。

その一連の出来事に、一緒に謁見の間まで来ていた皆さんが、何だ何だと周りを囲むように集まっていた。

思ったより人数が多くて、……………熱気で暑い。

え？何これ？何かのスイッチ？

これを押すと、謁見の間が回り出すとか、天井が開くとか、より大きな仕掛けが動き出すのでしょうか？

ちよつとわくわくしながら、ドーム状の水晶を押してみる。

ぺち…………

ああ、何か、どこからともなく、何してんの？みたいな視線を感じてるんですけど。

誤魔化すように、おほんと1つ咳を試してみる。

そして、よくよく観察してみれば。

「あ、これ、魔力が切れてますね。光の魔術を使う装置のようです。」

そうやって、念のため皆さんに壁際に移動してもらい、エル殿下にご協力頂いて え、だって1人で挑むのって怖いじゃないですか、水晶に魔力を注いでもらう。

そうして、しばらく魔力を注いでいけば、突然水晶がカツと四方に光を放った。

え？何何？と水晶を見ていけば、誰かが「あれは！？」と、声を上げた。

その声に顔を上げれば、謁見の間の壁から天井にかけて、ウエ皇帝の傍に浮かび上がったみたいな、薄いセピア色の映像が浮かび上がっていた。

そして、その映像が動き出すと共に、石の台座から音が響く。

その映像は、やはり誰かの目線から見たものようだった。

最初に映ったのは、後ろの方だけ長い淡い色の髪を括り、古めかしい鎧に身を包み、長いマントを羽織った青年だった。

高台に立っているその青年の周りには、同じように鎧を纏った数百人の人々。

そして、彼が見下ろす大地には、地面と空を埋め尽くさんばかりの魔物達が蠢いている。

その時いつそう強い風が吹いて、彼の髪とマントを揺らした。

そんな中、彼は腰に差していた剣を抜き、それを空に向かって高く掲げた。

その剣が根元から光を放ち、二回りほど大きな、光の剣に代わる。

彼が何かを叫んだのと同時に、彼は丘を駆け下り、魔物の群れへと突っ込んで行く。

彼の周りや後ろにいた人々も、いつせいに彼に続いて走り出した。

先頭に立った彼が、光の剣を一閃すれば、目の前にいた魔物達がまとめて立ち消えていく。

「ここここで、人と魔物の交戦が起こり、魔術の炎や風などが沸き起る。」

しばらくの混戦状態の後、場面は切り替わり、多くの死体が横たわる大地の真ん中で、彼は部下らしい男性に支えられ辛うじて立っている状況だった。

しかし、その精悍な顔立ちは決意に満ち、彼の濃い色の瞳は強い光を宿していた。

ぼろぼろに傷つきながらも、彼は、周りに集う人達を見回し、頷くと、手に持っていた剣を空へと高く突き上げ、

『我、イディシオム・シューミナルは、ここに我らの国の建国を宣言する！』

澄んだ空のもと遠く響いた彼の声に、いつせいに大きな歓声が上がる。

血に汚れ傷ついた人々が、互いに抱き締め合い、肩を抱き、涙を流しながら興奮と歓喜を顕わにしていた。

「これはまさか………建国史。」

みんながそれぞれに天井を見上げながら、その映像に見入っていたとき、誰かがそうぽつりと呟いた。

実は、私はずっと、この謁見の間の造りが気になっていたのだ。

だって、窓は、陛下の座っていた王座の後ろに、しかもあまり高さの無いものがあるだけで、左右の壁には何もなく。

柱だって必要最少限で、天井は高く丸くなっており、大抵こういつた歴史ある王宮にあるはずの壁画も彫刻もない。

ただ真っ白な壁と天井が広がるだけだったのだ。

それがまるで、以前日本で行ったことのある、プラネタリウムの会場みたいで。

やっぱり、この部屋は、この映像を映すための、大きなスクリーンだったようだ。

しばらくみんなは感嘆の溜息を吐きながら、天井や壁を見上げていたが、そんな中、エル殿下がそっと顔を寄せてきて、実は建国史に関して記された書物が、この城にはどこにも存在してなかった、ということを教えてくれた。

そして、この仕掛けに関しても、いつの間にか忘れ去られていたのだろう、と。

建国史をあえて文書で残さず、このような形で残した人は、一体何を想ってこの仕掛けを作ったのだろう。

まあ、その辺りもまた歴史のロマンですけどね。

「お手柄だな。」

と笑った殿下は、やっぱり、何処か映像の中の男性に似ている気がする。

その美形っぷりに、私が、その頬を思いつきり引き伸ばしたいと思ったとしても、仕方がないでしょうよ！（何ギレ？）

31・それでは、お世話になりました。

翌日、元々少ない荷物を纏め、数日お世話になった部屋を後にした。

もちろん、この間何かと世話をしてくれた侍女さんにも、ちゃんとお礼を言っただね。

その足で、一応の挨拶にとエル殿下の執務室へと向かう。

執務室までの道を歩きながら、漸くこの道も憶えたのになあと、やっぱり寂しくなった。

ノックをして扉を開くと、そこには、執務机に着くエル殿下とハティ様、それから、テーブルに着いてるナディア様、スケさん、カクさんのいつのもメンバーが揃っていて、ちよっと驚いた。

まあ、その驚きの何割かは、エル殿下が執務机に着いていたからだけだ。

私、良く考えたらエル殿下が仕事している姿、初めて見たような……。

これもいい思い出ってやつになるのだろうか、一応目に焼き付けておこう。

「じゃあ、もう行きますね。お世話になりました。」

笑って、改めて頭を下げた。

そんな私をみんな複雑そうに見たが、まずスケさんが「気を付けてな。」と頭をぼんぼんと撫でてくれた。

あ、何かどきつとしたぞ。大人の魅力ってやつだ。

今回はスケさんの魅力を、ほとんど引き出せなくてすみませんでした。

次機会があれば、もっとスケさんの秘密のベールを捲ってみたいと思います。

すると、ナディア様が、「またいつでも戻ってきてくださいね!」と、ぎゅっとお腹に抱き着いてきた。

うん、一緒に寝たり、ご飯食べたり、本当に楽しかったですよ。

ナディア様と出会って、まだ十数日しか経ってないっていうのが、すごく不思議な感じだ。

「今度は一緒に城下街回ろっね。」って、カクさんが笑う。

何だか、カクさんに対しては、ともに戦場を潜り抜けた同志意識

のようなものを感じるのだが。

私達は、どちらともなく手を固く握り締めた。

ふへへ、いいお化け屋敷探しときますから、また一緒に行きましようね。

へ？懲りてない？いやいや、カクさんと一緒だと、カクさんの方が怯え方が激しいから、こっちは怖さが減るんですよ。

え、S心ではないですよ。カクさんの怯えてる姿が楽しいだなんて、決してそんなこと思っちゃんいませんよ！

たぶん私が怪しい笑い方をしていたからだろう、カクさんが訝しげな顔をしていた。

それから、いつの間にか傍に立っていたハティ様は、「存分に、思うことをやってきなさい。」と、私の頭に手を置いた。

うん、鬼畜ではあったが、色々と気にかけてくれたハティ様は、まるでお母さんのよ……いや、ないない、母は無い！

やっぱり、学校の先生かなあ。常に厳しく、ときに優しい、みたいな女教師！

あ、いたた、ハティ様、頭押さえつけないで下さい。縮む、背が縮んじゃいますから！

だから何で、考えてることが分かるんですか！？

最後にエル殿下は、「門まで送る。」と、私の背中を押した。

え、いやいや、良いですよ！せっかく仕事してたんだから、仕事してください！との私の念は、エル殿下には通じなかった。

ハティ様や、カクさんにも何となく伝わるのに、何故エル殿下には分かってもらえないのか。

うむむ、と複雑に思いながら、エル殿下の背中を見ながら歩く。

そういえば、この背中には色々とお世話になったなあ、と感謝の念を送っておく。背中に。

特に会話もなく、門の前に到着してしまい、え、何のために送られたの？これ。と、私が困惑していると、エル殿下は胸元から何かを取り出し、その手を私の前に出した。

殿下の手に乗っていたのは、シューミナルケア皇家の紋章である、バラのような花の細工が巻き付いたヘッドに、ダイヤモンドのような透明な石が嵌められた、ペンダントだった。

首を傾げて殿下を見上げれば、すつとそれを首に掛けられる。

えええええ？これ、くれるってことなんですか？何かすごく高そうなんです！

貸すって言われても、返す当てなんか無いですよ！

慌てて、鎖に手をかけた私の手を、殿下が上から手を重ねて止める。

「持っている。」

照れくさそうな声に、目を瞬いた。

「それは俺に関係のある者という徽章だ。門でそれを見せれば、直ぐに城に入れる。」

それを聞いて、私は鳩尾の下辺りにあった、白銀のペンダントヘッドを手に取って、じっくりと見てみた。

ああ、そう言えば、この石は、皇家の人によって色が違うのだと聞いた気がする。

確か、その人の髪や目の色など、その人に関わる色が使われるらしいんだけど、何でエル殿下は透明な石なのだろう。

「一月後、俺は立太子の儀を行う。」

石を見ながら首を傾げていると、殿下がそう言葉を発した。

その言葉に、以前にハティ様が言っていたことを思い出す。

そうか、これで気兼ねなく、皇太子になれるんですね。

「おめでとございます。本当に良かったですね。」

笑ってそう言えば、殿下は「お前のおかげだ。」と笑った。

いや、こうして美形に感謝されるなんて、満更でもないですね。

属性を見つけたのは偶然だし、言い出した経緯もあれですが、まあ、終わり良ければすべて良しってやつです。

いつまでも、こうしてほのぼのしているわけにもいかず、「じゃあ、もう行きますね。」と告げると、

「ああ、いつでも戻って来るといい。」

と、頭を撫でられた。

ここ数日だが、何か皆さん人の頭を撫でるの好きですよ。

え、何ですか、それは、もしかして背が低くて撫でやすいとか、そういうことですかね！？もしくは子ども扱いですか！？実はケンカ売られてたんですかねえええ！

なんて無理矢理思考を逸らそうとしてみましたが、照れ隠しです、すみません。

もー、その優しい手つきがすごい恥ずかしいです。なに？何なの

これ？

心臓を羽毛で撥られてる気分。ぞわわわわわって、こそばゆ過ぎる！

あわわわわ、門番の兵士の方にすごく微笑ましそうに見られてる。

私はぱつと顔を上げ、「お世話になりました！」とはきはきとお礼を言つて、素早くエル殿下から離れた。

エル殿下に向かって深く頭を下げて、温かい目を向けられながら門番の兵士さんにも挨拶をし、今の出来事を記憶から抹消してくれることを祈りながら、門の外へと歩き出した。

振り返れば、まだエル殿下はそこにいて、それにへらりと笑い返してから、背を向けた。

もう振り返らないつもりで。

門を出て、城下へと続く、石畳の緩やかな坂道を歩く。

ふと上を見上げれば、青く澄んだ空はとても綺麗で、何だか誰かさんの瞳みたいで。

「楽しかった……な。」

つい、そっぽと漏らしてしまった。

31・それでは、お世話になりました。(後書き)

これで第1章は終わりです。

ここまで読んで下さって、ありがとうございました。()>。

1. プロローグ的な。

神がこの世界に舞い降りられたとき、この世界は無であった。

そこで神は、世界の土台にと闇を溶かし、次いで光を灯した。

そして、風を流し、大地を植え付け、水を注ぎ、植物を宿して、有の世界とした。

やがて神はその身を分け、世界へと散りばめられた。

神の欠片は世界中に落ち、命となって、世界に息づいた。

創世記より

硬い寝床の感触に、目が覚めてしまって、ゆっくりと体を起こした。

板の上に布を敷いただけのベッドの上で体育座りをして、手の届

かないほどはるか高い位置にある、鉄格子の嵌められた窓から、星の散らばる暗い夜空を見上げる。

硬い寝床は野宿で慣れていたが、眠りが浅くなってしまふのは、この環境のせいだろう。

6畳ほどの広さで、石が敷かれただけの冷たい床と壁、硬い木のベッドに、部屋の隅に作られたトイレ　せめて囲いがあるのが幸いだろうか。

部屋全体は薄暗く、壁の一面には、頑丈な鉄格子が張られている。

突然放り込まれた牢獄で、私は膝を抱えて、そこに顔を埋めた。

どうしてこうなったのだろう。

私は、この国に来てからの経緯を思い出していた。

2・テミズ教国に来ました。

ポイン。

え？ あれ、おかしいな、何でポイン？ 目の前で揺れる巨乳が真っ先に頭に浮かんだ。

あれ、いや、違う違う。その見事な谷間に何か隠れてそう、って、いや、関係ないから！

顔埋めたら、本当に窒息するの？って、オヤジか私は！

もっと、カメラ引いて引いて。そうそう、全体的に。

えと、あれは確か、シューミナルケアのお城を出てから、帝都では元の世界に戻るための情報は得られなかったし、ギルドでちょうど、隣国テミズ教国の首都コンタツに行く商人の護衛を募集してたから、それに便乗して、馬車に十日ぐらい揺られて、テミズ教国に来たのよ。

それで、首都コンタツで、魔術資料館に行ったり、ロコミで有名な魔術師を探して話を聞いたりしつつ、仕事でもしようかなと、ギルドの依頼の張られている掲示板を見てたのね。

あ、ちなみに、皇帝陛下の依頼をこなしたからか、ギルドランクが、一気に2ランクアップのCになってました！

いや、あまりランクが上がるようなことした記憶が無いんだけど、まあ、何かRPGゲームで、レアモンスターを倒して、一気に経験値獲得！ レベルが2上がりました！ ラッキー！ ってな気分です。

あ、例えばマニアックで申し訳ない。
弟に借りてよくやってたのよ。RPGゲーム。

「おい」

なんてことをうたうだ考えながら掲示板を見てると、背後から声が聞こえた。

あれ、私かな、と思って少しだけ後ろを振り返る。

いや、掲示板を見たい人が、ちよつとずれて、とかって言ってるのかと思って。

すると、そこには、ベージュ色のマントを身に纏い、顔も見えないほどに深くフードを被った、私よりも少し背が高いくらいの人が立っていた。

え？ なに、怪しい。と、私がつい後ずさってしまったのも、もはや防衛本能というやつだ。

そのまま何でも無い風を装って、掲示板の前を離れようとしたんだけど、もう一度その人物に声をかけられた。

「そこのお前」

いや、これは私にじゃないと、すつとぼけて立ち去ろうとしたけど、悲しいかな、その場所には私とその人しかおらず、その人に行

き先を遮られた。

きゃー、何か変な人に絡まれたー、と内心焦りながら、その人物を見上げる。

まあ、顔は見えないんだけど。見えるのは顎先か。うん、なかなか形の良い顎先だ。

「何ですか？」

声が、警戒心丸出しだったのは許してほしい。だって怪しいんだもの！

すると、そんな私に構わず、その人物は掲示板をすつと指差した。

「その依頼は受けないのか？」

は？ と、首を傾げながら掲示板を振り返り、その人の指差した依頼書を見てみると、

『貴族の悪事を暴くために、屋敷に忍び込む。協力者求む』

と書いてあった。

って、アホかああああ！！

何じゃこの、馬鹿正直な依頼書は！

忍び込むってことは秘密の計画なんじゃないの！？ 何でこんなところで、計画丸出しにしてんの！？ やる気あんの！？

いや、依頼内容がはつきりしてて、考えようによっては親切かもしれないけど！

てか、良くギルドの人もこんな依頼書載せたなあ、と思っていると、おや、この紙なんか変。

まさか、まさかとは思うけど、勝手に貼ったわけじゃないよね？

「受けませんよ」

危険な内容だけに、報酬の額はかなり高額だったけど、いやいや、怪しすぎるでしょう。

何かの罠か？ とも疑ってしまうけど、こんないかにも疑って下さいって感じの罠ってあんのかしら？

「何でだ!?!」

と、その怪しい人が声を荒げる。

ええ〜、こっちが何でだ!?! ですよ。受ける必要性が分かりません。

「これなんかどうだい?」

私が再度お断りの言葉を口にしようとしたとき、いきなり隣から声がした。

おや、いつの間にか他に人が来ていたようだ、隣を向くと。

ボイン。

え？ あれ？ 何これ？

ちょうど私の目の前に、非常に立派なボインがあるんだけど。あ、ボインって、女の子が使う表現として大丈夫かしら？

しかし、本当に目の前にたわわな巨乳が。おおお〜、と心の中で

感嘆の声を漏らしてしまう。

つい釘づけになりすぎて、上を見るのをしばらく忘れてた。

ちらつと隣を見れば、フードでわかんないけど、顔の角度からしてその人も、その立派な巨乳に目が奪われているようだ。

いや、ちょっと触っていいですか、と言いたくなりつつも顔を上げれば、ウェーブを描くオレンジ色の豊かな髪を肩に流した、褐色の肌のエキゾチックなお姉様がおられました。

うわー、背も高い。なんだって、私の目の前にちょうどポイン…
…いや、胸がくるぐらいた。

何となく見ていると、彼女が手にしているものが目に入った。

あ、そのいかにも怪しい依頼の紙は……………。

「それを受けるのか？」

隣にいたフードの人が、彼女に声をかけた。

どんだけ受けて欲しいのよ！

この人、掲示板を見ている人みんなに声をかけていたのかしら？
よく摘み出されなかったわね。

「あんたは？」

その女性は、フードの人を訝しげに見下ろしながら、問いかけた。

「その依頼をした者だ」

フードの人がそう答える。ああ、やっぱりか。

その女性は、その人をじろじろと上から下まで見た後、「話を聞こうじゃないか」と頷いた。

え？ 受けるんですか！ 明らかに怪しい人物に怪しい内容なのに。

ああ、でも、あんなに馬鹿正直に依頼内容書いて、こんなに堂々と勧誘してるんだから、もはや疑うのも馬鹿らしいって感じなのかもしれない。

というか、何かあつたら、目の前のこの人を絞めればいいのか。

とりあえず、受けてくれる人がいて良かったね。と、私がある場を離れようとしたとき。

「で、そのあなたは？」

いきなりボインの女性に声をかけられた。

3・何かに巻き込まれました。

あ、私の存在、気づかれてました？ 頑張つて気配消してたんですけど。

いや、ただの通りすぎりです、と笑顔で答え、立ち去ろうとしたのだが。

「ああ、こいつにも依頼を受けてもらったんだ」

フードの人が何でも無い風に言った。

え？ っちょ！ 私受けるなんて一言も言ってないんですけど！
ああ、ほら、女性の方も、戦力になんの？ みたいな顔で見たら
っしやるじゃないですか！

私はそういつた依頼は向かないんですよ！

ほら、見てください、あそこの依頼書！ 庭の草むしり、って書いてあるでしょ？ 私には、あちらの依頼の方が性に合ってます。

燦々と降り注ぐ太陽の下、日焼け防止用の完全装備をして、庭を覆っている草をザクザク抜いて行くんです。

途中虫なんかが出てきちゃって、きゃっ、と声を上げながら、それを放り投げ。

お昼には、塩だけで握ったおにぎり……は無いので諦めますが、木陰でお弁当を食べて。

作業が終わる頃には、綺麗になった庭に、ほうつと溜息を吐いて

達成感を噛み締めるんです！ ああ、なんて健康的！

間違っても、人のお屋敷に忍び込むなんて、不健全なお仕事は嫌です！

と、私が断ろうとしたとき。

「こいつは、光の属性を持っているんだ。こいつがいた方が、都合がいい。」

フードの人がさらっと言った。

くっ、こいつ！ ええ、ええ、私だって、あなたが光の属性を持つてるなんて、とづくに気づいていましたとも！

しかし、先に言われるとなんか悔しいな。今度から、会う人会う人の属性ばらして回ったるか。

と、私がぎりぎりしていると、女の人がぎよっとして私を見た。

そう、ここ、テミズ教国では、創造神が世界に融けた後、光の精霊こそが世界の原点であるとし、光の属性を持つ者。この国では光の御子と呼ばれる。は、神の意志を具現する者として、絶対的な存在とされているのだ。

光の御子の意志は神の意志、逆らう者は神に背くものであり、悪である、みたいなね。

そして、光の精霊を崇め奉る一方で、闇の精霊は世界を無に還すもの、世界の終焉をもたらすものとして、恐怖され、忌避されてい

る。

だからこの国では、光の精霊の色である白は尊い色であり、闇の精霊の色である黒は嫌悪すべき色として、扱われているのだ。

そうそう、私の髪と目も、ちょっとあのままではやばかったようで、この国に來た時にお世話になった商人の方が心配をして、色々教えてくれたのです。

いや、日本の恵比寿様みたいに人のよさそうなお顔の方でした。

それで、現在の私は、光の魔術で目の錯覚を利用して、髪と目の色を変えています。

髪は少し濃いめの茶色、目も茶色です。

カラフルな髪や目に憧れなかったわけじゃないんだけどね、あんまり元の色と離れすぎると、ぼろが出やすくなるので。

あ、私が光属性持ちだと知って、女性の人が複雑な表情をしている。本当だろうかって疑わしいのと、ひれ伏すべきなのかって悩んでいる感じ。

いや、そんなことしなくてもいいですから。むしろ私が、そのボインにひれ伏したい。ご利益ありますかね？

「そういっあなただっ

人の属性ばらしておいて、何食わない顔をしてるフードの人が何だか腹立たしくて、この人のもばらしてやろうかと口を開こうとしたとき。

私達に、影が差した。

いや、建物の中だし、昼間だから灯りは点けてなかったから、もともとあまり明るくは無かったんだけど、より一層暗くなったというか。

んん？ といつの間にか目の前にできてた壁を見上げていくと、そこに山があった。

ええええ？ と、ぽかんと口を上げて見上げていると、山の頂上、あ、失礼、その人の頭がわずかに動いた。

切れ長の威圧感のある目が、私より遙か高い位置から私達を見下ろしているようだが、多分頭頂部しか見えてない気がする。

しかし、大きい。2メートルは優に超えていると思われる身長に、筋肉の付いたがっしりとした体形。

黙ってズーンと立っていると、本当に山みたいだ。

と、少し顔を動かせば、あれ、隣にももう一個山が。

先ほどの山よりは頭一つ分小さめだが、良く似た体形に、あ、でも目はぱっちり愛嬌を感じさせる。

わー、でも、彼らの三分の二ほどの身長しかない私からすれば、この二人に目の前に立たれると、とてつもない息苦しさを感じる。

というか、周囲の景色が全く見えなくなっただけ。私の景観返して！

「どうしたんすか？」

小さいほうのお山さんが、ボインの女性に声をかけると、女性は私の隣のフードの人を見ながら、

「どうやら、この人が依頼人らしいよ。」

と答えた。

へー、と言いながら、小山さんがフードの人を覗き込む。

あ、フードの人が押されたように後ずさった。

フードの人からしても、小さいほうのお山さんも大きいほうのお山さんも、ボインの女性も、だいぶ大きいからなあ。

結局、いつまでもみんなでそこに立っているわけにもいかず

いや、ほとんど掲示板全体を覆っちゃってたからね。

近くの食堂に、移動することになった。

というか、何故私まで連れてこられているのでしょうか？

私としては、移動する間こっそり逃げようとは思ってたのよ。

ただ、気が付いたら、フードの人に上着の裾を摘ままれてました。何となくだけど、依頼のために逃げないようにしたというよりは、この三人相手に一人で挑みたくないっていう方が、本音な気がするんだけど。

私は道連れか。

4・自己紹介をしました。

食堂に着いて、とりあえず、お互いに自己紹介をすることになった。

大人数を収容するような食堂らしく、長い机に丸椅子がいくつも並べられている、その一角に私達は向かい合って座っていた。

片側には、ボインの女性を真ん中にして、その両サイドに大山さんと小山さんが座っている。

二人とも大きいから、一人が椅子二つ分のスペースをとってる。

その向かいには、私とフードの人が並んで座っていた。

これ、傍から見たら、ものすごく変な組み合わせに見えると思う。この三人を前にしていると、自然と体がちまっと丸まっちゃうんだよね。何とも言えない圧迫感を感じる。

まずはこちらから自己紹介しよう、と、ボインの女性が名乗った。名前をリシャトリエ・トレノさんというらしい。

そして、他の二人も紹介してくれる。

大きなほうのお山さんが、ダルクス・トレノさん。

名前で分かるように、ダルクスさん　　申し訳ないが、私の心

の中では大山さんと呼ばせてもらおう　と、リシャ姐さんは夫婦なのだそうだ。

似たもの………というか壮観夫婦だ。

この人に口説き落されてねえ、と色っぽく頬を染めながらリシャ姐さんは、ばしばしと大山さんの腕を叩いていた。

しかし、大山さんは表情を変えることも、びくともしなかった。

この人がどうやってリシャ姐さんを口説き落としたんだろう。機会があれば、是非とも二人の馴れ初めを聞いてみたい。

それから、小山さん、お名前は、トニゼツティ・ボランというらしいけど、もう小山さんで良いだろうか。

実は、大山さんと小山さん、こんなに見た目も体型もそっくりなのに、赤の他人らしい。てつきり、兄弟か何かだと思っていたのに、びっくりだ。

何でも、小山さんが大山さんに憧れ、大山さんを目標に日々努力をしているらしい。

人間、目標って大事なんですな。ここまで近づくことができるなんて！

大山さんと小山さんの身長差は、遺伝によるものか、小山さんが成長期だからか。

是非とも頑張つて、双壁ならぬ双山になってほしいものだ。夫婦山は無理だからね！

それから、三人はパーティーを組んで、ギルドで色んな依頼をこなしているらしい。

ギルドランクは、リシャ姐さんと大山さんがAで、小山さんはB。パーティーランクはAなのだそうだ。

なんて心強い！

と一通り紹介してもらったところで、フードの人がフードを脱いだ。自己紹介をするためだろう。

その様子を横から見ていた私は、思わず目が点になった。え？ だって、そのフードの下には……………

「……………仮面……………」

あ、つい口に出しちゃった。

いや、だって仮面だよ！ しかも、顔全体を覆うやつじゃなくて、顔の上半分を覆うような、滑らかな白磁の仮面なんだよ！

私の頭の中を、某ロボットアニメの金髪の人や、美少女戦士のタキシードの人が通り過ぎて行った。

ネタが古い？ いや、前に、昔懐かしのアニメで見たもので、ついで。

「何だ？」

横からまじまじと見ていた私に気付いたのか、フードの人、改め仮面の人の不機嫌そうに聞いてきた。

「何で仮面？」

いや、今日初めて会った人ですけど、この疑問を口に出してしまったのは仕方がない。

「顔を隠すためだろうが。」

何を言っただ、と顔を顰められたけど。いやいや、だからって、
……………え？ この世界では、これが普通なの？？

「何だ、こっちの方が良いのか？」

相変わらず、ぼかんと見上げている私に何を思ったのか、仮面の人は懐から今度は口元だけの仮面を出して、顔の上半分の方を取り外し、下半分の方を付けた。

今のであなたの素顔分かつちやいましたけど。

うーん、下か、下半分かあ。

これだと、単にマスクをしてる人に見えるような……………もしくは、どこかの忍者かしら。白くて忍んでないけど。

しかし、こういう仮面で顔隠してるのを見ると、どうやって食事するのか、いっつもつい気になるのよね。

まあ、とりあえず、私は上半分を進めときましたよ。

あのまま日焼けしたらどうなるのかが、気になったからってわけでは決してない！ 下半分の場合も見てみたかったけどね！ 食事してるところも見てみたかったけどね！

仮面を外した時に見えた彼の姿は、ふわふわ猫っ毛っぽいグレー混じりの白銀の髪に、濃いめのグレーの瞳。目元もちょっとネコ目っぽい。

年齢は、私と同じくらいかちょっと下かも。幼い顔つきだったし。将来有望そうな、生意気そうな美少年でしたよ。

仮面付けてると、目元が隠れてちょっと大人ぽくなるから……………うん、身の安全のためにも仮面しときなさい。

彼は名を、フェルと名乗った。

まあ、仮面を被って正体を隠しているくらいだから、本名ではないと思うけど。

彼に続いて私も簡単に自己紹介をした。

旅をしてるってことと、フェルくんとは今日会ったばかり、って感じのことをね。

5・依頼を受けることになりました。

それから、依頼内容の本題に入ったんだけど。

フェルくんはリシャ姐さんの方に体を乗り出して、目の前にあったポインに驚いて身を引いた。

そして、気まずそうに視線を彷徨させた後、こほんと誤魔化すように咳を一つ。

ふふふ、若いわねえ……。私の胸じゃないけど。

改めて、「最近、この都で多発している子どもの誘拐事件を知っているか？」と、話を切り出した。

うん、この話は、私もここ、首都コンテツに着いてから、色々な所で耳にした話だ。

何でも、一月ほど前から、平民の子どもや孤児院の子どもが、ふと消えてしまう事件が続いているらしい。

最初は、事故や家出の件も疑われていたらしいんだけど、たまたま子どもが攫われかけているところを助けた人がいて、それから誘拐事件ということになったそうだ。

攫われた子どもは、すでに六・七人に至り、都の警備兵も躍起になって捜査を行っているんだけど、一向に犯人は捕まらない、と聞いてただけだ。

「え？ まさか、その犯人が、その貴族ってこと？」

私の問いかけに、フェルくんは頷いた。

フェルくん曰く、いくつか証拠もあるらしいんだけど、相手が貴族なだけに、警備兵もなかなか屋敷に踏み込むことができないでいるらしい。

そうして、警備兵が手を拱いているうちに、昨日新たな行方不明者が出たため、いてもたってもいられなくなったとか。

おお、いい奴だな、フェルくん！

いかにも高貴っぽい、上質な服装に綺麗な仮面、偉そうな口調に非常識な行動、多額の報酬と、どこぞのお坊ちゃんの無茶な行動だと思っただけだな。

もしそうなら、何とかして止めようと思ってただけど、余計なお世話だったみたいね。

目元は見えないけど、その噛み締めた口元がいかにも真剣で、つい頭を撫でてしまった。

驚いたように振り向かれたけど、笑って返してやった。

「しかし、どうしてそのお貴族様は、子どもを集めたりしてしてんだい？」

眉間に皺を寄せて、リシャ姐さんがそう問いかけた。

あ、うん、私もそれは気になる。

聞いた話だと、攫われた子ども達は、年齢性別はバラバラらしい。だから余計に、犯人が特定し辛かったり、子どもの方で警戒がし辛かったっていうのもあるみたい。

あえて言うなら、貴族の子どもは対象にはなってなかった、って

ことだけど、貴族の子どもの場合は、元々ボディーガードみたいなが付いているから、手を出しにくいっていうのもあるし、貴族の親によつては、色々厄介ってこともあるんだろう。

結局、攫われたのが平民や孤児っていうことから、国の上部としてはあまり捜索に熱心じゃないらしいのよね。腹立たしいことに。

「“闇幸福論者”を知っているか？」

フェルくんは、少し声のトーンを落として、そうリシャ姐さんに問いかけた。

リシャ姐さんは、大山さんと小山さんと顔を見合わせて、少し重苦しそうに頷いた。

「え？ それって何？」

それに関しては聞いたことが無かった私が問いかけると、リシャ姐さんも声を擧めながら。

「一般的に“闇の者”と呼ばれていてね、光の精霊を称えるこの国に対して、闇の精霊こそが幸福をもたらすと主張する者達のことだよ。」

「闇こそが世界の原点であり、すべての人を平等に戻すと、主張してるんっす。」

リシャ姐さんの言葉を小山さんが引き継いで、説明をしてくれた。

ああ、なるほど、反国家組織みたいなものか、と私が頷いていると、リシャ姐さんは顔をフェルくんに向け、

「で、そいつらが、何だっただい？」

と、問いかけた。

その姐さん問いに、フェルくんは頷いて。

「どうやら、子どもを生贄に、闇の精霊王を呼び出そうとしているようなんだ。」

言い辛そうに述べられたフェルくんの言葉に、みんなの表情が一気に変わった。

リシャ姐さんは顔を眇めて嫌悪感を顕わにしてるし、小山さんは顔を赤くして相当頭に来ているらしい。

大山さんは表情は変わってないけど、眉間にびきびきと、け…血管が…！ 無表情なだけに、その胸の内にどんな怒りが渦巻いているか、すごく怖い。

そういう私は、怒りというよりは驚きの方が大きい。まさか、って気持ちだ。

だって、そんな、子どもを生贄になんて、一体どうやって…。実感が湧かなすぎて、一人だけぼかんといい顔になってしまった。

「だから、念のために光属性を持つ者がいた方が良い。お前も来てくれ。」

そんな私の方を向いて、フェルくんが改めて問いかけてきた。

「……あ、……うん……」

とりあえず頷いてみたけど。

なるほど、フェルくんが光属性を持つ者を必要としてたのは、そういう事情からだっただけか。

一応フェルくんも光属性を持つてるけど、もし本当に闇の精霊王が出てきたら、一人じゃ敵わないから、念のためってことね。

でも、本当に闇の精霊王を相手にしたら、二人でも全然敵わないと思うけど。

まあ、あの闇の精霊王様が、そんなに容易く出てくるとは思えないけどね。

気紛れで来たとしても、そんな幸福論、鼻で笑われて終わりだからね。

とは言えないけど。

とにかく、ここまで聞かされると、私も攫われた子ども達の状況が気になるし、一緒に行きますとも！

改めてみんなと顔を合わせて、決意を込めて頷き合った。

5・依頼を受けることになりました。(後書き)

ひねりが無くて申し訳ない……m(┌:)m

6・いざ突入です！その1。

決行は夜ということ、一旦みんな準備やら何やらのために解散することになった。

フェルくんは相当下調べをしてくれてたらしく、本当に、後はただ忍び込むだけ、という状況だったらしい。

だから、必死にメンバー集めてたのね。

ちなみに、警備兵に頼まないのは、フェルくんなりの事情があるようだ。

あの仮面といい、謎多き少年だ。そういうお年頃なのか。

そうして、その夜。人々も眠りについているであろう深夜に、私達は目的の屋敷の前に来ていた。

え？ ちょっと、フェルくん！ 下調べを頑張ってたところは褒めるけど、侵入が正面からってどういうこと！？

こういう場合は、普通裏口とか、地下の秘密通路とか……ああ！ 皆さん行く気満々ですね！

突入ー！ っ、ちょっと置いてかないでええ！

門の前に立っていた門番を、あっという間に小山さんとリシャ姐

さんが殴って気絶させ、一気に屋敷の庭へと駆け込んだ。

すると、異変に気付いたのか、茂みの中から十数匹の番犬が……。

え？　なんだ、あの番犬、何か変……？

普通の大型犬よりも、二回りは大きな体に、ぼこぼこ瘤だらけの背中、色は真っ黒で、凶暴そうな唸り声をあげている。

いやいや、いくら異世界だからって、こんな奇妙な犬は見たことが無い。

どうやら魔物のようだが、それにしてもその体を形作る瘴気の状態がおかしい。……まるで、無理矢理注入されたような　　。

ガアアアアア！！

大きく吠えた番犬　一応そういうことにしておこう　が、
いつせいに飛び掛かってくる。

すると、私達から一步前に出た小山さんが、ぶんと棍棒のようなものを振り回して、飛び掛かってきた番犬を打ち飛ばした。

す、すごい、ナイススイングです、小山さん！　そんな武器を持つてたなんて！　まさに、鬼に金棒、つて、ええ！？

小山さんが持っていたのは、本当に金棒でした！　鉄製で、痛そうなとげとげがたくさん付いた……。

いや、鬼に金棒の意味をこの場で体験できて、非常に勉強にはなつたけど、それ以前に、その金棒を見ているだけで、自分まで痛い気になってくるのは何故でしょう？

魔物の体とはいえ、あれでぶん殴られた番犬に思わず同情してしまつのは、何故でしょう！？

と、私が内心で、うひひひひひひ！ と悲鳴を上げている間にも、飛び掛かってくる番犬を小山さんが打ち返し、リシャ姐さんがアラビアンナイトに出てくるような曲がった形の双刀で切り捨て、大山さんが火の魔術で焼き払った。

そう、驚きですがこのパーティー、前衛担当が小山さんとリシャ姐さんで、後衛が魔術師の大山さんらしいのだ。

てつきり大山さんが最前衛だと思ったんだけどね。

ああ、でも、背後が大山さんなら、安心して後ろを任せられるっていうのもあるのかも。

あ、私！？ す、すみませんが、私は走るのに必死ですよ！ 走りながら銃を撃つなんて、器用なマネできません！

何より、この状況でヘタに撃つたら、大山さんや小山さんに当たる！

フェルくんと一緒に、しっかりガードされちゃってますからね、三人に。役立たずですみません！

と、考えながらも、私達は全力で中庭を駆け抜け、屋敷の入り口へとたどり着いた。

屋敷の入り口を開け、中に入ろうとする間にも、番犬達は次々と襲いかかってくる。

それを、屋敷の入り口で立ち止まった小山さんが、

「ここは自分が何とかするっす！ 先に行ってください！」

と、カッコよく叫んだ。

きゃ〜！ 映画みたいー！ と、喜んでる場合じゃなくて、え

？ そのセリフって、何かのフラグみたいで怖いんだけど！
大丈夫だよ、小山さん、大丈夫だよ！？

私がハラハラしている間にも、リシャ姐さんと大山さんは頷いて私達を先に促す。

きっと、三人の間にはしっかりとした信頼関係があるんだろうけど、私は心配で仕方がない。

「風の障壁、光の障壁。」

とりあえずの保険として、小山さんに対物理攻撃用の防御結界“風の障壁”と、対魔術攻撃用防御結界“光の障壁”をかけておいた。

無事に追いついて来てね、小山さん！

その弁慶のような勇ましい背中を見ながら、私達は屋敷の内部へと走り出した。

先頭に立って道案内をするフェルくんについて、私達は広い屋敷の中を駆けた。

屋敷の中は複雑に入り組んでいて、似たような廊下が続いているため、すでに私は自分がどの辺りにいるのか、さっぱり分からなくなっていた。

こうなったら、行も帰りも君だけが頼りだ、フェルくん！

途中何度か、屋敷の警護の私兵のような人にも会ったけど、そんな時はすかさずリシャ姐さんが前に出て切り倒し、大山さんが魔術で攻撃を　って、大山さんは魔術を発動するのと同時に、大きな杖のようなもので相手を殴り倒していたけど……うん、確実に、そ

の杖の方が攻撃力高いよね。
どかんどかん人が飛んでいくのですが。

そうやって、何とか追手を振り払いながら走っていると、フェルくんが、壁際に一定間隔で銅像の置かれている廊下の、一つの銅像の前で立ち止まった。

どうかしたのかと問いかけようとしたが、フェルくんはその銅像を、見回したり撫でたりしている。

いや、その銅像がね、何処かの髭のおじさんの銅像なもんで、ちよつと奇妙なものを見る気分ですよ。

どうしたフェルくん。いったい何があったんだ。それがそんなに気に入ったのか？

と、声をかけるべきか私達が悩んでいたとき、「あつた」と、フェルくんが声を上げ、その銅像の一か所に手を翳し、魔力を込めた。

すると、その銅像の横の壁の一部が、ずずずずと音を立てて横へずれ、そこに奥へと続く通路が現れた。

ま、まさかの隠し通路！

その人一人分の幅の通路の奥は真っ暗で、奇妙な不気味さと、アドベンチャーへのわくわく感を感じさせる。

この先はあれかな、左右から槍が飛び出して来たり、地面がパカッと開いたり、大きな玉が転がってきたりするのかな？ と、状況を忘れて恐る恐る隠し通路を覗き込んでみる。

「いたぞ！ 侵入者だ！」

私がそんなことをしている間に、私達のいる廊下の前と後ろから、

多くの警護私兵が駆け込んできた。

あわわわわ、す、すみません！

左右から雪崩れ込むように襲いかかってきた警護私兵との間で、その場は一気に混戦状態になった。

私も腰から銃を抜き、風の衝撃波を打ち放つて、私兵を吹き飛ばす。

何とか背後の隠し通路を守りながら、そこにフェルくんを押し込んで、「よし、ここは私に任せる！」と、勇ましく言おうとしたんだけど、気が付けば私まで通路の中へと放り込まれていた。

えええ！ と、慌てて後ろを見ると、通路の入り口に、無表情のまま攻撃をする大山さんと、私達の方を振り返り、「ここは何とかするから、あんた達は先に行な！」と、笑うリシャ姐さんが見えた。ああ、何ですかその勝気な笑顔！ すごく色っぽい………じゃなくって！

いやいやいや、今回は私もそちらが良いですよ！ 防衛頑張りますから、どうぞお二人が先に、と言おうとしたんだけど。

「何をしている！ 行くぞ！」

フェルくんを腕を引かれ、通路の奥へと走り出すはめに。

ああ、あの「ここは任せて先に行け！」って状態って、タイミングとか、相手に有無を言わせない感とか、実は色々テクニクがあっただんですね。

なんて思いながら、遠くなっていくリシャ姐さん達を見ていた。

とりあえず、私にできたことは、二人にも“風”と“光”の防御

結界を張ることもべからず。

7・いざ突入です！その2。

あー、まあ、幸いなことに、通路には何の仕掛けもなく、私達は黙々と真つ暗な通路を走っていた。

光を点けようと思えば出来たけど、そんなことを口に出せる状況でもなく、ただ黙って足を動かした。

やがて通路の先に、ぼんやりと灯りが浮かび上がった。

その火によるオレンジ色の光は、明らかに人工的なものだと分かる。

フェルくんと並んで通路から飛び出せば、通路の先は十畳ほどの広さの何もない部屋で、その奥に重厚な鉄製の扉が見えた。

そして、その扉の前に、一人のでっぷりとしたおじさんが立っていた。

その派手な服装と、両手にはめられた大きな石の付いた指輪はいかにもで。

「ギリヤーケット伯爵」

そのおじさんに対して、フェルくんが声をかける。

「き……っ！ 貴様、何者だ！！」

扉を背にしたおじさんは、顔を真つ赤にしてフェルくんを睨みつ

け、怒鳴りつけてきた。

唾でも飛ばしそうなおじさんに、フェルくんは至って冷静に、

「貴殿の悪事もここで終わりだ。貴殿が“闇の者”だということが明らかになれば、すぐに異端審問機関から捜査の手が入るだろう」

「なっ………!!」

フェルくんの言葉に、おじさんは息を飲んだ。

まあ、確かに、国教である光の精霊信仰を揺るがしかねないしね。しかも、闇の精霊王まで引つ張り出そうとしたなんて、国家転覆を図っていると思われても仕方がないのかも。

異端審問とか、信仰に関して大抵のことは自由だった日本人からすると、ちよつと理解できない世界なんだけどね。

毅然と言い放ったフェルくんに対し、そのおじさんは顔を強張らせながらも、

「闇の精霊王の手に掛かれば、邪魔な者共など、一瞬で消し去ってくれるわ！　そして、この儂こそが闇の精霊王による新たな国の王になるのだ！」

歪んだ顔で、おじさんは笑った。

ああ、うん、いかにも悪役って感じた。

闇の精霊王を呼び出そうとした理由も、自分が王になるためですか。それをお願いする気ですか。

殺されまますよ……!!

と、何故か私の体に震えが走った。

「そんなことはさせない！」

フェルくんが強く言うのと、おじさんはぎりぎりどフェルくんを睨みつけ、腰に手をやった。

そして、腰に下げていた剣を抜くと、フェルくんに向かって切り掛かってきた。

「フェルくん！」

慌ててフェルくんの前に入ろうとすると、フェルくんは私を肩を掴んで止め、自分の剣を鞘ごと抜き、おじさんの方へ躍り出た。

「うおおおおお！」

と声を上げながら剣を振り上げたおじさんのお腹に、フェルくんが鞘付のままの剣を叩きこんだ。

カハツと息を吐いて、おじさんが地面に倒れ込む。

そして、フェルくんが体勢を直しておじさんの方を振り返ったとき、おじさんの剣を持ってなかった方の手が上がった。

「危ない！」

私が声を上げると同時に、おじさんの手から風の鎌が放たれた。

フェルくんの顔めがけて放たれたそれを、フェルくんは寸でこのころでかわしたけれど、風の鎌の端がフェルくんの仮面に当たり、それを跳ね上げた。

宙を舞った仮面が石の床に落ち、カシャンと音を立てて碎け散る。

「フェルベルト……王弟殿下……」

風に巻き上げられた白銀の髪が、フェルくんの額に落ちるのを見たおじさんが、目を見開いて呟いた。

次の瞬間、フェルくんは、おじさんの首元に剣を落とし、おじさんを今度こそ気絶させたようだった。

おじさんを見下ろしたまま、私に背を向けるフェルくんに、私もどうにも困っていた。

あー、今何か聞こえたかしら？ いやいや、うんうん、私は何も聞いちゃいないわ。フェルくんが、ピーチヨメチヨメ（脳内自主規制）だなんて、はっはっは、やだなあ、そんな物語みたいなおあるわけナイナイ！

しかも、フェルベルトで偽名がフェルだなんて、ははは、そんな安直な、ははははは……。。

頑張つて今聞いたことを無かったことにしつつ、私は碎け散ったフェルくんの仮面を見ていた。

「……フェルくん……」

私が声をかけると、フェルくんは僅かに肩を揺らしてから、私の方をゆっくりと振り返った。

その灰色の瞳が、不安そうに揺れた気がしたけど。

「仮面壊れちゃったけど、どうする？ 下半分の方しとく？」

私が、床の仮面の破片を指差しながら聞けば、フェルくんはちょっと目を睨った後、苦笑いを浮かべて首を振った。

「いや……もう、ばれてしまったしな」

後半の方は小声だったけど、聞こえてますから！

せつかく人が、聞いてないことにしようとしてるんだから、とぼけ通してよ！ 誰かと勘違いしてるんだろう、とかありきたりな言い訳ぐらいしなさいよ！ もしくは、このおっさんボケてんな、なんて暴言吐いてもいいから！

やる気見せるやあ！ と内心拳を握りながらも、私は、そう、とだけ頷いた。

「子ども達はこの奥だろう。行くぞ！」

扉を真っ直ぐに見ながら言ったフェルくんは、目元がきりりとしてて、ちよつとかっこ良かったぜい。

8・いざ突入です！その3。

所々に松明の灯された、地下へと続く石階段を、私とフェルくんは足元に気を付けながら、ゆっくりと下っていた。

あー……、何か、やばいわこの先。

進むにつれて、どんどん瘴気が強くなってきてる。

空気もじめっと重くなってくるし、自然と歩調も遅くなってくる。フェルくんも何かを感じているのか、ぴんとした緊張感を漂わせていた。

やがて、階段が終わり、石造りの細い通路を抜けると、途端に開けた空間に出た。

学校の体育館ぐらいの広さの部屋は、壁や柱に松明が灯されていて、それなりに明るかった。

部屋の中に足を踏み入れると、部屋の中は物が無くがらんとしていたが、

「っ！ あれは！？」

そんな部屋の中央には、不気味で複雑な模様の大きな魔方陣が描かれており、その魔方陣の周りには攫われた子ども達であろう、小さな人影が倒れていた。

それに気づいたフェルくんが、声を上げる。

「おや、侵入者ですか」

慌てて近づこうとすると、愉悦を含んだ低い男性の音がして、私達は足を止めた。

よく見れば、魔方陣の前に一人の男性の影があった。

警戒をしながら、ゆっくりと近づいていくと、それは見慣れた制服を着た、がっちりした体つきの、三十代くらいの男性だった。

「……テストワーク警備隊長……!？」

フェルくんが息を飲みながら、かすれた声で呟く。

そう、その制服は、この国で警察的役割を果たしている、警備兵の制服だったのだ。

しかし、隊長ってことは……

「まさか、子ども達を攫っていたのは……」

呆然としているフェルくんは、警備隊長は肩を竦め、

「いや、直接攫ったのは、伯爵の手の者ですよ。私はただ、警備の配置を教えたり、彼らを逃がすのに協力しただけです」

何でも無いことのように、言った。

「どっして、そんなことをっ!?!」

フェルくんが声を荒げて叫ぶ。

「闇の精霊王を、呼び出すためですよ。子どもの純粋な魔力を、精霊は好みますからね」

そんなフェルくんに対し、隊長はうつすらとした不気味な笑みを浮かべたまま、そう答えた。

確かに、子どもの方が、身に宿す魔力に瘴気が混ざってないから、精霊としては好むだろうけど。

けれど、魔力を捧げられたからといって、精霊はそれに寄ってくるものでもないのに。

彼らはいったい何を根拠に、精霊王を呼び出そうとしているのか。

んん？ でも、精霊王を精霊界から呼び出すのって、この世界と別世界を繋げるってこと！？

ということは、あの魔方陣、私が地球へ還るためのヒントになるかも！

「っ！ 貴様！！」

直ぐにでも魔方陣を見に行きたい気持ちを抑えながら、私は慌てて、今にも隊長に飛びかかろうとするフェルくんを、腕を掴んで止める。

「近づいては駄目よ、フェルくん。あの人、すごい瘴気を漂わせてる」

私は、じつと隊長を見ながら、そう告げた。

その隊長の周りには、不気味なほどに濃い瘴気が漂っているのだ。

ただ、その均衡は危ういもので、隊長はまだ瘴気に取り込まれてはいないけど、それも時間の問題のように思えた。

このまま正気を保ちながら、魔力で瘴気をうまくコントロールできれば、魔人となるのだらうけど、隊長に瘴気を抑えられるだけの魔力も、精神力もあるようには思えなかった。

「あなたにも、新たな世界の誕生に立ち合わせてあげますよ、憐れな王弟殿下」

隊長が笑みを深め、そう口にするのと、フェルくんの肩がぴくりと揺れた。

いや、だからそれを言うなって！ そんな意味深なこと言われたら、フェルくんの背景事情が気になり出すじゃないかあああ！！

私は、状況を忘れて、内心で文句を言ってしまった。はふ〜。

隊長は、目を爛々と輝かせながら、魔方陣の方へと体を向けた。そして、彼が何かを呟いたかと思うと、倒れている子ども達の体から、魔力が魔方陣へと流れていく。

その後、魔方陣の周りに、渦巻く様に真っ黒な瘴気の煙が立ち上り

ずるり、と。

ひええええええええええ！！ またこれかー！！

どうして、魔物っていうのはこうも！

うっ、今度は、真っ黒などろりとした液体を纏わりつかせた魔物が、魔法陣の中から這い出してきた。

その姿はまるで、いつもお借りして申し訳ないが、某ジ リアニ
メの、半端な状態の巨神兵だ。しかもその体は、石油でできている
ような、黒くて艶があつてドロネバの液状だった。

その魔物の体から落ちた粘液が、べちよりと辺りに落ちる。

どう見ても魔物だ！

しかし、隊長は恍惚とした表情を浮かべているし、フェルくんも
畏怖の表情でそれを見ている。

いやいやいやいやいや、あれを闇の精霊王様だなんて言ったら、
ぶん殴られますよ！

「貴様には、その両の目は必要無いようだな」とか言いながら、
踏み潰されますからね！

しっかりしてください！ フェルくん！

と、私がフェルくんの肩を掴んで、揺さぶろうとしたとき、フェ
ルくんが、

「どうしてこんなことを……」

と顔を歪めながら、隊長に問いかけた。

「……この国が、憎いからですよ。」

私達に背を向けたまま、感情をそぎ落としたような低い声で、隊
長は呟いた。

魔方陣に半身を埋めたまま、魔物がずるりと私達や隊長のいる方
へと這い出してくる。

そんな魔物を見ながら、隊長は言葉を続けた。
勝者の演説のように、……悲痛な訴えのように。

「俺の妹は、とても黒に近い髪の色をしていた。それは、両親が濃い色の髪をしていたから、たまたまそんな色になっただけで、完全な黒でもなかった。」

しかし、村の者達は、そんな妹を忌子だと、闇の精霊に憑かれた者だと言って、避け、嫌い、時には暴言を吐いて、村中で妹を差別的に扱った。

両親もそんな村の者達の妄言に惑わされて、次第に妹に辛く当たるようになっていった。

それでも妹は懸命に、ただ人の目から隠れるようにひっそりと生きていたんだ！！」

淡々と紡がれていた隊長の言葉が、次第に激情を孕んでくる。

隊長は、体の横に垂らしていた拳を、血管が浮くほど強く握りしめた。

「それなのに……あの子が心から信じていた親友と、恋心を抱いていた幼馴染に裏切られた時、あの子はこの世の全てに絶望した……。そして、自ら命を……」

そこで、隊長はぐつと言葉を飲み込んだ。

怒りゆえか、体が小刻みに震えている。

「持って産まれた色が何だっというんだ！！ どうしてそんなことで、あの子があんなに苦しまなければならなかった！！」

隊長は私達の方へと振り返り、激情のままに叫んだ。

そんな隊長の背後に、ゆっくりと這い迫ってくる魔物が見えたけ

れど、喉に鉛でも詰まっているかのように、言葉が出なかった。

「こんな国……こんな世界など、無くなってしまうえばいい……！！
……あの子を拒絶した世界など……」

隊長は、苦しそくに言葉を吐き出しながら、両の手で自らの目元を覆った。

小刻みに肩を震わせる隊長は、泣いているのかもしれない。

私はかける言葉も見つけられず、そつと隊長から視線を逸らすようにフェルくんを見た。

フェルくんは、眉間に皺を寄せ、何かに耐えるように隊長を見ていたけど、その目の奥に、何かを羨んでいるような感情が揺れた気がした。

目元を覆ったまま立ち尽くす隊長に、背後から粘ついた液を垂れ流しながら、魔物が手を伸ばし、

「っ、あぶな　　！！」

「っひ　　」

慌てて声を上げたが、それよりも先に、魔物は隊長を掴み、その手を自らの体に刺し入れた。

隊長は、悲鳴を上げる、間も、無く。

ぐらんと、何かにはたかれたかのように、頭が揺れた気がした。
キーンと耳鳴りがして、貧血のように、目の前が真っ暗になる。

隊長の瘴気を取り込んで力を増したのか、先ほどよりもスムーズな動きで、魔物が私達の方へと這ってくる。

魔物の体から流れ落ちた液体が、どろどろと辺りに流れ、部屋の床を覆っていく。

魔方阵の周りにいた子ども達のいた場所にも、いつの間にか艶のあるどろりとした黒い液体が広がっていた。

「フェ……フェルくん！早く、光の魔術を！！」

私が声を上げると、フェルくんははっとしたように、目を瞬いて。

「『我、ここに光の魔術を發動す。清浄なる光が瘴気を排し、その清廉なる』」

や、やっぱり、長あああああい！！

は、早くしてよ！フェルくん！やつがどんどん迫ってるよ！

私1人が焦っている間にも、フェルくんが呪文を唱える声はどこか力が無く、たどたどしくて。

「『消化せしめよ！』」

漸く呪文を唱え終わり、フェルくんの手から浄化の光が発せられたんだけど、フェルくんの魔力量に比して、その光はやけに弱くて。フェルくんの光に構わず、魔物はズルズルと迫ってくる。足元も黒い粘液で埋め尽くされようとしていた。

「ちょっと、フェルくん!？」

フェルくんは声をかけるが、フェルくんはやはりどこかぼんやりとしたふうで。

「……俺がここで死ねば……、兄上は……」

ぼつりと咳かれた言葉に、私はがごと頭に血が昇った。

「私は、こんなところで死ぬ気はないわよ!!」

魔物を睨みつけながら、両手を前に出し、

「浄化!!」

全力をつぎ込むつもりで、魔術を発動させた。

目を焼く様な光が手から溢れ出て、辺りを真っ白に染め上げていく。

一気に爆発した白い光は、部屋のすべてのものの輪郭を打ち消して、その途中で引っかかった黒を拭い、欠片も残さず塗り潰して

その白さが目に痛くて、私はつい、目をぎゅっと閉じてしまった。

光が消え去った後には、一切の音を閉ざしたかのような静寂が広がっていた。

ゆつくりと目を開ければ、綺麗に瘴気が消し去られた空間には、床に描かれていた魔方陣と、倒れたままの子ども達、そして、オレンジ色の松明の光が部屋を照らしているのが見えた。

先ほどの魔物は跡形もなく、……隊長の姿もなかった。

何とも言えない感情が胸の中に渦巻いていて、私は深く深く息を吐いた。

ふと隣を見れば、呆然としたフェルくんが私を見ていて、どうかしたのかと首を傾げた。

「……おまえ、……その髪と、目……」

フェルくんの呟きに、はっと自分の髪に手をやったとき、慌ただしく階段を下りる複数の足を都が聞こえてきた。

そして、この部屋の入り口から飛び込んできたのは、先ほどの隊長と同じ服を纏った、警備兵の皆さんだった。

「フェ……フェルベルト王弟殿下!？」

フェルくんを見た警備兵の人が、目を瞞ってフェルくんを呼んだ……ような気がしたけど、知りませーん、私は何も聞いてませーん! とそっぽを向いていると、警備兵の人達の目がいつせいに私に向けられ、彼らは慌てて私とフェルくんを引き離れた。

そして、私の周りをいきなり警備兵が囲んだかと思うと、肩を押さえつけられ、強い力で腕を後ろに回された。

「っちょ、痛い、痛いって!」

痛みに抵抗していると、背中に回された両腕に、何か冷たいもの

がはめられる。

腕を動かそうとしても、そのせいで自由に動かさなくて、ジャラジャラと鎖が動く音がするばかりだ。

え、これつてもしかして……………！

「おい！ 彼女は！」

嫌な予感に頭が真っ白になっていると、フェルくんの焦ったような声が聞こえた。

顔を上げれば、フェルくんも警備兵の人達に、体を押さえつけられていた。と言っても、私の方へ来ないようにだけど。

「殿下は早く外へ。“闇の者”に近づいてはいけません！」

警備兵の人がそう言いながら、フェルくんを連れ出そうとする。

それに何とか抗おうとするフェルくんだが、成人した男の、しかも複数の人に押されて、どんどんと部屋の入口へと連れて行かれていく。

一方の私といえば、武器を構えた警備兵に囲まれ、身動きすらできずに、

「異端者が、闇の王を呼び出そうなどと！」

警備兵の一人が、私に向かって、そう憎々しそうに吐き捨てた。

あゝ、どうやら、さっきの浄化の魔術の方に集中し過ぎたせいで、髪と目にかけていた目くらましの魔術が解けたみたい。

そう確信したのは、警備兵達の、畏怖や侮蔑の目を見たからだ。
た。

まあ、それからあつという間に屋敷から連れ出され、檻付の馬車でどこかへ連れ込まれたと思ったら、牢屋へと放り込まれた。

9・たまには自棄になることもあります。

というわけで、現在はここです。

はあ、と重い溜息が口から洩れる。

回想に浸っていた間にだいぶ時間が過ぎていたようで、高い窓の外に見える空は、薄い青色になっていた。

朝特有の、ひんやりとした空気に、私は体を震わせた。

ここに入れられてから、もう三日か四日は経っているだろう。

幸いにして、薄いスープと硬いパンだけだけど、一日に二回は食事が運ばれてはくる。

あー、でも、この閉塞感と薄暗さに、精神的にも体力的にも、いい加減辛くなってきた。

そりゃあ、私だって、脱獄しようと思わなかったわけではないですよ。

何ていったって、ここに投獄された理由だって、髪と目が黒いっただけで、“闇幸福論者”云々は、完全なる濡れ衣なんですからね！

この牢獄は、一応罪人を閉じ込める牢らしく魔術封じが施されているけど、私にとっては解けないほどではないし、他にも手はあ

る。

けど、このまま誤解も解かずに脱獄したら、私は国家犯罪者として追われる身になるし、ギルドの登録も抹消されるだろう。

下手したら、ギルドからも追われることになるかもしれない。そうになったら、もう自由に街中を歩けなくなるし。

何よりも、今まで出会った人達や、お世話になった人達にも、誤解されて嫌われるのが怖かった。

そんな奴だったのかと、そんなことを企んでいたのかと、軽蔑されたくなかった。

私と関わったことを、後悔されたくなかった。

でも、私これからどうなっちゃうんだろう。

異端審問で頭に浮かぶのは、魔女狩りだ。

濡れ衣を着せられ、不当な裁判を受け、弁解も聞いてもらえずに、処刑……………。

そんな光景が頭に浮かんだ。

ぞつと背筋が寒くなって、速くなった鼓動を抑えようと胸元に手をやれば、ちゃりつと音がした。

ずっと首に掛け、服の中に入れてあったそれを引っ張り出せば、エル殿下からもらった首飾りで。

警備兵に、荷物や武器や上着は取られたけど、彼らは黒を体に持つ者に触れるのも嫌らしく、それ以上身体検査をされなかったから、これも奪われずに済んだのよね。

その透明な石を見ながら、ああ、そういえばそろそろ一ヶ月経つか

ら、エル殿下の立太子の儀が行われる頃だろうと思いついた。
残念ながら、出席は出来そうに無いけど。

私、このまま死んじゃうんだろうか。こんなところで。
元の世界に還ることも叶わずに。

そう思うと、鉛を飲み込んだように、お腹の底が重くなった。

いや、殺されるぐらいなら、全世界を敵に回しても逃げてやるけれども。

でも、……………誰か……………。

願ってしまう、誰か助けて、と。

ここは暗くて寒くて、独りで寂しくて、誰かに手を伸ばしたくなる。

けれど、誰に？

リシャ姐さん達は無事だったのだろうか。子ども達は。

……………フェルくんは、どうしているのだろうか。

あいつが黒を持つ者だとは知らなかったと、私と関わったことを無かったことにして、私のことを忘れて、もう普通の生活に戻っているのだろうか。

リシャ姐さん達も、私のことなんか忘れてるんだろうか。

他の人は？ エル殿下は？ ナディア様は？ ハティ様は？ カクさんは？ スケさんは？ シューミナルケアのお城の人達は？
他のみんなは？

みんなみんな、私のことなんて忘れてしまったのだろうか。
私がここで死んだとしても、誰にも気づいてももらえないのだろうか。

この環境のせいか、思考がずるずると昏い方へと引っ張られていく。

やっぱり、この世界に私の居場所なんてなくて。

私はどうしてここに居るの？ どうして、この世界に来てしまったの？

誰にも気にしてもらえないのに、誰にも受け入れてもらえないのに、誰の傍にもいられないのに……存在していてもいなくても同じなのに。

誰と関わっても、誰にも受け入れてもらえないなら、誰の心にも残れないなら、私なんていなくなっただって同じじゃない。

かえりたい！ かえりたい！ かえりたい！ 地球へ還りたい、家へ帰りたい、家族のもとへ帰りたい！！

どつやったら還れるの？ いつになったら還れるの？ ……どつうして、還れないの？ このままずっと、還れないの……？

どつやっても還れないなら、生きる場所が無いなら、この世界にいても、何の意味もないのに。

それとも、この世界が………？

この世界にいるから、還れないの？ 私はこの世界に閉じ込められてるの？ 縛られてるの？

この世界があるから、還れないの？ この世界がなくなれば、還れるの？

この世界で生きているから、還れないの？ この世界から消えれば、還れるの？

ふと、あの隊長の苦しげな声が頭を過る。

黒い色を持つてるっただけで、人を差別して、苦しめる世界なんて、無くなってしまう方がいいのかもしれない。

この世界があるから私が還れないのなら、存在するだけで人を不幸にする世界なら。

何処にも誰にも救いなんてない世界なら、無くなっただけ………っ！！

いない、いない、いない、いない、いない、いない、こんな私
なんていない、こんな世界なんていない、いない、いない、
いない、誰も、何も、何も !!

イラナイ、ノ？

ギイ……

遠くから、地下牢の入り口の扉が開く音が聞こえた。
その後、カツカツカツカツと、人一人分の足音が響いてくる。

看守だろうか？だけど、食事を持ってくる時間には、まだ早いよ
うな……。。

何かあったのかと、途端に怖くなって、鉄格子の向こうを息を飲んでじっと見ていた。

私のいる牢獄の鉄格子の向こうで、足音が止まる。

そして、薄暗い中から現れたその人物は……

「まったく、お前は」

そう言って、苦笑いを浮かべた。

10・感激MAX！（前書き）

何だこのタイトル……；

10・感激MAX！

「……………どうして……」

ぼつりと漏れた言葉に、相手は私のいる牢獄の扉の鍵を開けながら。

「また、変な騒動に巻き込まれたと聞いてな」

キイと金属の擦れる音がして、牢の扉が開く。

呼ばれるままに牢を出て、約一月ぶりに会ったその相手……………エル殿下を、私は呆然と見上げた。

薄暗い地下牢の中なのに、その姿はやけに神々しく、美術館で見た絵画の天使のようで。

ああ、後光が見えます、エル殿下！

思わぬ救世主の登場に、私は不覚にも手を合わせて拝みたくなくな

エル殿下の後に続いて、地下牢への入り口の扉を出ると、そこに看守の人が立っていて、エル殿下に私の荷物を手渡した。

そのままエル殿下に頭を下げ、その後ろの私には、忌々しいような目を向けてくる。

薄暗い石造りの階段を上り、重々しい鉄製の扉を潜れば、そこには青い空と緑の木々が広がっていて、久々の外の空気に、私は手を大きく広げて肺いっぱい空気を感じ込んだ。

そんな私に目を細めた殿下は、「行くぞ」と声をかけて、どこかへと歩き出した。

私も慌ててその後へ続く。

「そういえば、どうして殿下がここに？」

改めて殿下の背中に疑問をぶつけると、エル殿下は少し後ろを振り返って、「その話は、ここではまずい」と、苦笑いを浮かべた。

ふむ、何か事情があるのかと、大人しく頷いておく。

「じゃあ、どうやって、私が出れるようにしてくれましたか？」

「やっぱりあれですか？ 権力ってやつですか？ きーっ、大人って汚い！」

そう、手元にハンカチが無かったので仕方なく、唇を噛み締めていると、私の表情を横目で見ていたエル殿下は、私の考えを読んだかのように苦笑いを深めて、顔を正面に戻した。

「俺は、シューミナルケア帝国の第一皇子だが、それ以前に光属性の持ち主でもある」

「えと、それで？」

「この国の王や上層部のやつらに、お前は我が国に縁の深い者であ

るから、俺が身元を引き受けると言ったんだ。

それでも渋った奴らには、『光の御子の意志に従え』と……』

そこまで言っつて、エル殿下が何かを思い出したように笑った。

「“光輪”を使ったんだ。以前お前と光魔術の練習をしていたときに、お遊びで作ったあれだ。」

その殿下の言葉に、私は記憶を探る。

ああ、そういえば、頭の背後にうつすらと光を纏わせる魔術を作ったことを思い出す。

後光みたいなもので、「何かこれってかつこ良くないですか？」とか言いながら、大仏様のポーズとかして二人で大笑いしてたんだが。

「光を背負った俺を見て、そこにいた者達がいっせいに膝を付いたぞ。あまりの効果に、俺も驚いたがな」

その時のことを思い出したのか、エル殿下は少し困ったような表情になっていただけ。

へえ、思わぬところで役に立つものだと、私はエル殿下の後頭部の辺りを見た。

しかし、この精巧に作られた容姿に、眩いばかりの金色の髪で、背後に光を背負ってたら、光の精霊を称えるこの国の人達からしたら、かなりの衝撃だったんじゃないだろうか。まさに光の精霊の化身って感じで。

そりゃひれ伏したくもなりますよねえ。

え？ ていうか、さつきエル殿下の背後に後光が射して見えなうな気がしたのって、その魔術のせいとかじゃあ……………？

「そいつらとの話し合いの時に、俺の光属性を見つけたのがお前だということも言ったんだが、どうも納得がいかないといったような、複雑な顔をしていたぞ」

続けられたエル殿下の言葉に、私は、そうだろうなあと苦笑いを浮かべてしまった。

だって、彼らが崇拜する光の属性を持つ者が、彼らの忌避する黒い色を有しているのだ。うーん、なんていうか、基本理念の崩壊？別に、その人の持つ属性によって、髪や目の色が変わるわけじゃないんですけどね。

変なところに固執しちゃってんのよねえ。

朝の爽やかな空気を肌を感じながら、私ははっとあることに気が付いた。

「あれ？ 私どのくらいあそこに入っていました？」

ちよつと歩調を速めて、エル殿下の斜め後ろまで近づいて、問いかけた。

「俺が知らせを受けたのが、お前が牢に入れられた日の夕方だから、四日ぐらいか。」

横目で私を見ながら答えたエル殿下の言葉に、私は目を瞠った。だって。

「え？ 私がここに来るまでに、馬車で十日ぐらいかかりましたよ？
なのに、殿下は約三日で来たんですか？ どうやって……………」？

そんな私の問いに、エル殿下は目を逸らし、「馬でな」と返した。

ええ？ 馬で、ここまで三日って、まさか不眠不休で……………？

眉を寄せた私に気付いたエル殿下が、「兵の訓練ではよくあることだ。大したことじゃない」と苦笑いを浮かべる。

私の前を颯爽と歩く姿は、危うげも疲れた様子も無くて、それが本当に体を鍛えているからなのか、それとも疲れを見せないという彼の精神力によるものなのか、分からなかったけれど。

無茶をしてでも、急いで駆け付けてくれたエル殿下に、心臓がぎゅっと苦しくなった。

あ、でも。

「立太子の儀までに、確か後三・四日しかないですよね！？」

国を挙げてのイベントだから、そう簡単に日にちをずらしたりはできないはずだ。

そう思っただけのように問えば、エル殿下は苦笑いを深めて、

「何とか間に合うだろ。」

と軽い口調で返してくる。

それは、また帰りも不眠不休でってことだろうか。

いやいやいやいや、そんなことをしたら、城に帰る前に今度こそ倒れちゃいますよー！

「じゃあ、私が風の魔術でお送りします！」

私は、しゅたつと手を上げてそう申し出た。

殿下が何かを言おうとしたとき、「あんた！」と女性の声が出て、私はむぎゅつと柔らかい何かに顔を覆われた。

驚きにぴきんと固まった体も、太い紐のようなものでぎゅつうつうつと締め付けられる。

てか、く……苦しい……！ ああ、でも何だこれ。柔らかいし、あつたかいし、良い匂いがする……。

呼吸がままならないにも関わらず、私は不思議な幸福感に包まれていた。

うふふふふ、何かしら、ここは天国かしら？ ああ、ふわふわの白い雲が周りに……。

徐々に白くなっていく意識が、危うく途切れそうになったとき、ぐいと誰かに体を引っ張られた。

いきなり呼吸ができるようになって、私は本能的に大口を開けて空気を吸い込んだ。

あれ、もしかして、私いま窒息死一歩手前だった？

え、一体何が起きたの？ と辺りをきよろきよろと見回すと、何だか足が地に付かない。

ぶらぶらと揺れている足に、頭の上がハテナだらけになる。

やがて、脇の間に誰かの腕があって、どうやら誰かに持ち上げら

れているのだということに気が付いた。

え？ 誰かって、誰???

と背後を振り返ると、そこには見慣れたぱっちり目。

あれ？ 小山さん？

何が起きているのかと首を傾げていると、小山さんは私の向こうを見ながら。

「リシャトリエ姉。それじゃあ、この人が窒息してしまっつす。」

小山さんにつられてそちらを見てみれば、そこには腰に手を当ててばーんと胸を張るリシャ姐さんの姿が。

え？ もしかして、さっきまで私がいたのはあそこですか!?

あああ！ 何でしっかり意識を保っていなかったんだ、私！ 胸に埋もれるなんて、めったに出来ない体験だったのに！

てか、本当に窒息出来たよ！ すごい！ ボイン本当にすごい！ 頭の中にボインコールがわき上がる。

死に掛けたにもかかわらず、称賛の目でリシャ姐さんを見てしまった。

11・寝不足ってよくないよね。

「そんなことより、あんた、無事で良かったよ！」

リシャ姐さんが、小山さんに持ち上げられたままの私に向かって、安心したように笑った。

「まったく！ 何度、あんたは“闇の者”とは関係ないって言っても、一向に聞きゃあしないんだからね！ この連中は頭が固すぎるよ！」

そう言って、姐さんは近くに立っていた、兵士らしき人を睨みつけた。

あわわ、そんなことを大声で言って、大丈夫ですか？

と私がおろおろしながら周囲を見回してみると、いつの間にか大きな門が傍にあることに気付いた。

そして、門の向こう側に見える景色からして、こちらは門の外側のようだ。

「え？ どうしてここに？」

私が首を傾げると。

「警備兵に、あんたが城の地下牢に入れられたって聞いたんす。

それで、リシャトリエ姉とダンスの兄貴と、あんたを牢から出すように訴えに来たんすけど、ここから通してもらえなかったんす」

私の背後から、小山さんが答えてくれた。

「何を言ったって、聞く耳も持ちやしなくてね、いつそう突入でもしてやるうかと、旦那と話してたんだよ」

リシャ姐さんが、ふんつと顔を逸らした。

その時、いきなり顔にかかった影に顔を上げると、太陽を背にしてズーンとそびえる大魔神……いや、大山さんが。

その大山さんが、ゆっくりと腕を上げ、大きな手を私の方に向けてきた。

その、スイカぐらいなら掴んで砕けそうな掌に、私は思わずぎゅっと目を閉じて体を縮めてしまう。

がしっ、と音がつきそうな感じで、大山さんが私の頭を、わわわわわ驚掴みに！

さつき浮かべていた、スイカが赤い汁をまき散らしながら粉々になる映像が、頭に蘇り、きよああああ！ と私は内心で絶叫を上げていた。

私の頭に手を置いた大山さんは、そのまま円を描くようにぐりぐりと回した。

その手に合わせて、私の頭もぐるんぐると揺れる。

っちょ！ もげる！ 首がもげるって！ このままぼろっと逝っちゃいますからあああー！！

大山さんの手の中で、しばらく回された私の頭は、大山さんの手

が離れてからも、ぐらぐらと揺れていた。

船酔いのように揺れる感覚のまま、私は大山さんを見上げた。すると大山さんは、無表情だけど、ちよつと目を細めていて。

その目が何ていうの？ 象の親がやんちゃしている子象を見るときのような……つまり、深い瞳の奥に慈愛が満ちてるっていうか！ すごい優しい目だったんです！

えと、これは、自惚れでなければ、心配してくれてたってことなんですかね？

さっきのあれも、頭を撫でられたってことなのでしょうか？ そう思うと、何だかとても照れくさくなって、かーっと頬に熱が集まった。

うーわー！ リシャ姐さんが大山さんに惚れたのが、分かった気がする。

普段無反応無表情なのに、ふとした時に、こんな不器用でも優しい対応されたら、きゅんときますもの！

恥ずかしくなって目を彷徨わせてたら、リシャ姐さんにも微笑ましげに見られてた！ うおー！ なにこの、照れくさい空気！

内心で悶えながら、はつと、私は気になっていたことを口にした。

「えと……リシャ姐さん達は、あの、嫌じゃないんですか？ ……

…私の、黒目と黒髪………」

ちよつと尻すぼみになったけど、私はそつと窺うようにリシャ姐さんを見ていた。

すると、リシャ姐さんは、むっと眉根を吊り上げて。

「やっぱり、その目や髪の色で、“闇の者”って濡れ衣を着せられたんだね！？ まったく、上のやつらはいったい何を考えてるんだい！ こんな小さい子が、“闇の者”であるはずないだろうっ！」

へ？ は？ 小さい子？ え？ 背が??

「黒は不吉だなんて信じてるのなんか、国の上層部や役人達、それから閉鎖的な農村の者ぐらいいさ。街の人達だって、髪や目の色なんかで、人を判断したりしないよ」

そう言いながら、リシャ姐さんは私の髪を撫でてくれた。

「それに、あたし達は、ギルドの依頼で色んな人達と関わったり、色んな国に行ったりするからね、色なんか気にしやしないさ」

にこりと優しく笑ったりリシャ姐さんに、私はしばらくぽかんとしてしまっただ。

しばらくして、リシャ姐さんの言葉を頭が理解するにつれ、私は何だか恥ずかしくなった。

ああ、もう！ 私って、なんてやさぐれていたのかしら！

この国が宗教上、黒を嫌っているって聞いたからって、全ての人がそうとは限らないのに。なのにすべての人が黒を忌み嫌ってるんだって思い込んで、ひどい国だとか思っちゃって、……無くなってしまうばいいとか考えて。

ああ、何か、最低なのは私だね。黒を気にしないで、優しくしてくれる人だつて、ちゃんといえるのに。それぞれの人と接してみないと、分からないこともあるのに。

そんなこと、分かっているつもりだつたんだけど。

もう、あれはあの牢屋のせいなのよ！ あの環境が悪いのよ！と責任転嫁をしつつ、私は深く反省していた。

「もういいか？」

そんな時声が聞こえて、顔を上げると、エル殿下がこちらに歩いて来ていた。

エル殿下の向こうに、馬を従えたシューミナルケアの騎士の人、四人が見える。きつと、エル殿下の護衛の人達だろう。

あああ、私つてばあの方達にもご迷惑を！

と、未だに小山さんにぶら下げられたまま、あわあわしているとリシャ姐さんが「ここを離れるのかい？」と聞いてきた。

いったんエル殿下を送るためにシューミナルケアに戻るつもりなので、私が頷くと、リシャ姐さんは私の手をぎゅっと握って、

「あなたのおかげで、ダンもトニーも無事だつたんだ。あなたには感謝してもしきれないよ」

と、真剣な顔でお礼を言われた。

私が首を傾げていると、背後から小山さんが説明をしてくれた。

何でも、あの屋敷で、私とフェルクンが隠し通路に入った後、どこからともなく魔物が現れたのだそうだ。

それで、警護私兵の人達と一時休戦して、魔物と戦っていたんだ

けど、その時に大山さんが魔物の吐いた炎に巻き込まれ、小山さんが魔物の攻撃を直にくらってしまったらしい。

その魔物の攻撃の威力に、リシャ姐さんも小山さんも大山さんももう助からないだろうと絶望していたのだが、何と二人とも無傷だったのだ。

ああ、なるほど、あの時私がかけた“風”と“光”の防御結界が役に立ったのか。

良かった、念のためとはいえ、一応かけておいて。

その時の魔物との戦いがどんなものだったのかは分からないけれど、三人とも大きな怪我が無くて良かったと、私はほっと息を吐いた。

「この恩は何としてでも返すからね！ 困ったことがあったら、あたし達を頼ってくれよ」

リシャ姐さんはそう言って、私の手を握る手に、ぐっと力を込めた。

その手が温かくて、その真剣な言葉が嬉しくて、私は、言葉が詰まったまま、何とか頷いた。きつと、泣き笑いのような表情になつてと思う。

そんな私達のやり取りを、微笑ましそうな顔で見ていたエル殿下が、すつと小山さんにぶら下げられたままの私の前に、両手を差し出した。

……………え？ 何ですか？ その手。

ま……まさかとは思いますが、このままの状態で、私を小山さんから受け取る気じゃないですよ……？

いや、単にこのまま小山さんが、腕を下に下ろしてくれればいいですから！ そしたら徐々に、地面と再開することができますから！
いいりません、その手、いいりません！！

と、私が必死に首を振っているというのに、小山さんはゆっくりと私を持った手を、エル殿下に近づけていく。

地面に下ろして！ との懇願を込めて、小山さんを振り返れば、何だかものすごく暖かい目で見られた。

何これ！ 何これえええええ！！ と私が内心で絶叫している間に、気が付けば私はエル殿下の腕の中にいた。てか、抱き上げられてた。

うおおおおおおい！ 猫の子を受け渡してんじゃないんだぞ！
何だこの、はい、ひよい、って簡単さは！ 易々持ち上げんな！
恥ずかしいわああああ！！

下ろせ！ とばかりに、身をよじると、宥めるように背中を軽く叩かれた。

いやああああああ！ 余計に恥ずかしい！！

どうした！ エル殿下どうした！？ こんなことする人じゃなかっただろう！ この一カ月でいったい何があったんだ！！？

え？ この人本当にエル殿下？ まさかの別人か？ 誰かの陰謀かああああ！！

ど、どうしたら！ と辺りを見回せば、大山さんや小山さんやリ

シヤ姐さん、そして遠くにいる騎士さん達の顔が目に入った。

………もうね、暖かいよね、みんなの目がね。お風呂だったら入り時だよ。

しかし、これは、バカツプルに見られてるんだろうか？ それとも、さつきりシヤ姐さんも言ってたし、私が幼く見えるんだったら、えと、兄妹か、お………親子、とか？

あゝもう、いっそ後半で良いわ！ わゝい！ パパの抱っこ高い！

と、私が幼児退行をしている間に、エル殿下はリシヤ姐さん達と何か話し、礼を言つて、くるりと踵を返した。

すると自然に、笑顔で手を振るリシヤ姐さんや小山さんや、やっぱり無表情の大山さんが目に入って、すごくいたたまれない気持ちになった。

12・シューミナルケアへ！

そのまま、エル殿下の護衛の騎士さん達のところに、エル殿下が行こうとしたので、私は必死に懇願して、何とか地面へ下ろしてもらった。

うん、そうだな、これは寝不足だからだ。エル殿下は、完徹のせいでハイになっているんだ！

と、今の出来事を記憶から消し去って、私は、護衛の騎士さん達のところへ駆け寄った。

そして、ここまで来させてしまい、迷惑をかけてしまったことを詫びた。

すると、騎士さん達は、「これも、仕事ですから」と答えてくれたんだけど、その目が、すっごく微笑ましいって感じ全開で。

もうね、色々と精神的にすり減ってる私からしたら、その温かい眼差しも、視線による暴力ですからね！精神的に大ダメージですからね！

何かを弁解したいのだが、何をどう弁解すればいいのか分からないまま、色々と諦めた私は、騎士さん達に頭を下げ、エル殿下の方へと戻った。

「彼らはどうするんですか？」

一緒にシューミナルケアに戻るのかと、問いかけた私に、エル殿下は首を振り。

「あいつらには、一旦この街で休んで、ゆっくり戻って来るように言うてある」

その殿下の言葉に頷いて、二人、城壁の傍のひらけた辺りへと移動した。

そして、あゝもう！ これは恥ずかしいんだけど仕方がない、と覚悟を決めて、エル殿下の手を握った。

こちらを見てくるエル殿下の顔を、視界に入れないようにしながら、私は、「風の障壁。風の翼。上昇」と唱えた。

途端、私とエル殿下の背中に、片方が二メートルほどの大きな透き通った双翼が現れ、その翼が吹き上げた風を捉えて、上空へと飛び上がった。

これは、あれだ。ほら、「ああ、私鳥になって、この空を飛んでいきたい」とか「そ〜らを自由に〜、と〜びたいな〜」とかゆうあれです。

いや、私だって、空を移動しようと思った時に、色々と試したりしたんですよ？

ハンググライダーみたいなのか、パラシュートぽいのか、ムササビみたいなのとか、忍者とか。

ちなみに、風を受けるものを使わずに、体だけで飛ぼうとすると、空中での浮力の維持とか、移動するときなどに、すごく魔力を使うのです。

だから、何か風を受けるものがあつた方が省エネになって、機動性を考えたら翼になつただけで。

え、何をうだうだと説明しているかというところ、つまり、背中から羽を生やしているこの状況が、すごく恥ずかしいってことです！

と、激しい葛藤を抱えながら、私は上空から、シューミナルケアのお城の方へと体勢を向け、翼の角度と風を調節して、前進を始めた。

あ、羽と一緒に、“風の障壁”を張ったのは、風圧と飛行物対策です。結構速いスピードで飛ぶので、以前鳥とぶつかりそうになって、すごく怖い思いをしたからね。

それから、エル殿下の手を握ったのは、これって、初めの際は体勢を整えるのが大変だから、補助のためですよ。

決して、お空のデートを目論んだわけではないです！ ないんですよ！！

私と手を繋いだまま、エル殿下は何とか体勢を整えようと、必死に羽を動かしていた。

そんなエル殿下を見守りつつ、ぐんぐん遠ざかって行くテミズ教国のお城に、私が苦い思いを抱いていると、何とか体勢の維持に成功したエル殿下が、そつと言葉を紡いだ。

「お前の状況について、フェルベルト王弟から、手紙をもらったんだ。『自分は助けに行けないから、助けてやってほしい』と」

その言葉に、私はエル殿下に視線を移し。

「え？ 助けられないって？」

「フェルベルト王弟は、現在自室で軟禁状態にあるそうだ」

そう言ったエル殿下に、私は目を瞠った。

「軟禁って、どうして!？」

慌てる私に、エル殿下は複雑な顔をして。

「テミズ教国では、“光の御子”は何者よりも高貴で絶対的な存在とされている」

話がずれたことに首を傾げながらも、私は頷いた。

「だが、現在のテミズ教国の王は、光属性を持つフェルベルト王弟ではなく、光属性を持たない兄の方なんだ」

言葉を区切って、エル殿下は視線を私に合わせた。

「我が国では表面化しなかったが、前王が亡くなったのが突然だったこともあるし、うち以上に、し烈な王位争いがあったのだろう」

そして、未だにフェルくんを王にしようと企む貴族達も多く、フェルくんはあまり自由に行動することを許されていないのだそうだ。そんな時に起こした今回の騒動に、騒ぎを起こした罰として、自室に軟禁されることになったらしい。

それで、自分ではどうしようもできないから、光属性持ちのエル殿下に、監視の目を盗んで、風の魔術で手紙を飛ばしたのだと。

「あれ? でも、どうしてエル殿下に?」

私が首を傾げると、エル殿下は、空いている方の手で、私の胸元を指差し、

「たまたま、お前が付けているその首飾りを見たのだそつだ。それで、お前がシューミナルケアの王族と縁のある者だと分かつたらしい」

と言った。

私は、服の上から胸元を見て、なるほどこの首飾りも色々と役に立つのだなあと、感心していた。

そうして、もう見えなくなった、テミズ教国のお城の方を、再び振り返る。

あの、闇の精霊王を呼び出す魔方陣のあった地下室で、警備隊長の妹への想いを羨んでいたフェルくんの顔や、自分が死ねば、と呟いていたフェルくんの言葉が、頭を過る。

フェルくんはきつと、その王様になったお兄さんが好きなのだろう。

では、お兄さんの方はどうなのだろうか。

フェルくんも風属性の持ち主だから、その気になれば、城を抜け出してこうして空を飛んで、どこまでも行くことができるだろう。

光属性があると分かれば、どこの国でも手厚く迎えられ、生活には困らないはずだ。

でも、フェルくんはきつと、どんな状況に陥っても、それをしないだろう。そう、思った。

そんなことを考えながら、しばらく飛行を続けていると、下の方にぼつぽつと見たことのない湖や森、街や建物が見えた。

それに興味を示せば、エル殿下が名前や成り立ちなんかを説明してくれる。相変わらず博識な人だ。時折冗談なんかを交えて、二人で笑い合った。

はっ！ いやいや、だからこれは決してお空のデートなどではなく！！

誰にか分からない言い訳を、脳内で必死にしていると、やがて、視界の先に白く大きな建物と、それを中心に広がる建物の屋根群が見えてきた。

「城だ」

「おお〜！ 何だか、すごく久しぶりの気がします」

なんて話しているうちに、お城はぐんぐんと迫ってきて。

あ、でも、以前城を出るとき、二度と戻らないつもりで格好つけて出てきたというのに、一カ月もしないうちに戻ってきてしまった。うわ、そう考えると、みんなにどんな顔して会えばいいのか分からないかも……。

「そういえば、城には結界が張ってあるんだが、このまま突っ込んで大丈夫なのか？」

エル殿下に言われ、私ははっとお城に目を凝らした。
そうだった、この城には、城壁の上から城全体を囲むように、ドーム状の結界が張られているのだ。

慌てて着地場所を変更しようとするも、もうお城は目の前にあつて。

さて、問題です。空気の入った巨大な風船に、身一つでタックルをかましたらどうなるでしょうか？

正解。ばいーんと跳ね返される。

「うわっ！」

「ぎゃー！...」

案の定、城の結界に跳ね返されたエル殿下と私は、城壁の外の茂みへと落下した。

一応、“風の障壁”を張ってたから、怪我とかはしなかったけど、衝撃がすごかった。脳味噌が揺れたね。

ガサガサと音を立てながら、茂みから這い出てみると、城の結界に何者かが衝突したことで、それが茂みに落ちたことを聞いた兵士達が、何事かと駆けつけてきて、葉っぱだらけの私達は、困ったように笑うしかなかった。

その後、兵士の人達に生暖かい目を向けられながら、私達はシューミナルケアのお城の門をくぐった。

そのまま、エル殿下に続いて城内に入ると、向こうから駆け足で近づいてくる、ナディア様とカクさんスケさんが見えた。

駆け込んだ勢いのまま、ナディア様にお腹にタックルをされて、私はつい「ぐほっ！」と乙女らしくない声を出してしまった。

「お体は大丈夫ですか？」と、上目づかいに心配そうに聞いてくるナディア様に、打ち震えるような感動を覚えた私は、危うく頬ずりをしてしまふところだった。

ナディア様の後から来たカクさんは、

「ひっさしぶり〜！ 大変だったね〜」

とニコニコ笑っており、その感情の籠らない軽い物言いに、ちょっとイラッとさせられたり。

続いて傍に来たスケさんには、「元気そうでした」と頭を撫でられて、心臓に衝撃をくらい、ついよろめいてしまった。

ああ、何でしょうその落ち着き。大人の深い包容力を感じさせられます。

その後、エル殿下の帰還の知らせのために、執務室に向かうエル殿下に付いて、私ももはや執務室の主……もとい、ハティ様に挨拶をしに行った。

「まったく、何をやっているのですか」とか言いながら、どこかほっとしたような苦笑いを浮かべられて、思わず「ハティ様あああああ！」と抱き着きたくなった。

城の結界に激突したことに對しては、呆れたように溜息を吐かれたけど。

一連のやり取りが、何だかすごく楽しくて、嬉しくて、私は久々

に声を出して笑った。

13・あなたにお礼の花束を。

雲一つない、真つ青な空が、なんとも気持ちいいこの日。

現在、私は、シューミナルケアのお城の天辺。四角錐の形の屋根にこの国の国旗がはためいている、その旗の傍に腰掛けて、遙か下に見える街並みを見下ろしています。

今日は、めでたくエル殿下の立太子の儀が行われる日で、城の前の広場には、多くの人が集まっていた。

くくく、人がまるでゴミのようだ。……ちょっと悪ぶってみました。すみません。ちなみに、アリのようだ、だったら普通の感想？

背後から襲う強い風に、ポンチョのような上着をはためかせながら、私は遠く空の向こうを見ていた。

実はシューミナルケアに来て後、私は、風の魔法を使って届けられた、フェルくんの手紙を受け取った。

フェルくんの軟禁はまだ続いていて、部屋から出ることは叶わないのだけど、室内では比較的自由に行動できるらしい。

フェルくんは、手紙の中で何度も、牢屋から助けられなかったこと、事件に巻き込んでしまったこと、そして、自分の国が私にしたことを、謝っていた。

それから、事の次第を手紙の中で説明してくれた。

これは、兄王には秘密なのだが、フェルくんには、フェルくんを崇拜する味方が、城内にも城外にも、何人もいるらしい。

その人達は、フェルくんを王にすることは考えておらず、ただ“光の御子”であるフェルくんに従うことを喜びとしているのだとか。そして、その人達から、城下の街で起きている子ども誘拐事件の話聞き、兄の治める国のために、何かできないかと、今回の行動を起こしたそうだ。

それから、あの事件の後、城の魔術師が、あの地下の魔方陣を調べたそうなのだが、あの魔方陣は、精霊界と繋げて精霊を呼び出すものではなく、あの場で集めた魔力を瘴気に変換し、魔物を生み出すという仕組みになっていたらしい。

あの魔方陣を、あの貴族の人や隊長が、どうやって知ったのかは不明だが、彼らは魔方陣の本当の仕組みを知らなかったのだろう。この情報も、フェルくんの味方の人が教えてくれたのだそうだ。

その文を読んだとき、私はがっくりと肩を落とした。

せつかく、元の世界に戻るための、ヒントになると思ったのに……。

そして、誘拐されていた子ども達は、無事に家へと帰されたそう
だ。

子ども達は、栄養失調や精神的疲労で、衰弱してはいたが、命に別状はなかったらしい。

結局、子ども達のことは誰にも聞けなかったから、私はほっと胸を撫で下ろした。

最後に、今回のことは、ギリヤークット伯爵と、テスワーク警備隊長の仕業ということが明らかになったらしいが、私が関与していたという疑いもまだ残されているようで、それに関しては、フェル

くんが責任を持って晴らす、と誓いのようなものが書かれていた。

もやもやと心の奥にわだかまる何かを、私は深く溜息を吐くことで収めた。

その時、わあっという歓声が、下の方から聞こえてきた。

ハティ様に今日の段取りと聞いたところ、王城の儀式を行う間で、エル殿下の皇太子の指名式を行い、その後この下にあるバルコニーに出て、国民へとお披露目をするらしい。

押し開くようになっていたガラスの扉が開かれ、そこから正装したエル殿下がゆっくりと出てきた。

“光の皇太子”ということから、白を基調とした衣装に、王家の紋章であるバラのような花が刺繍された、ゆったりとした長さのマントを羽織っており、上からでも分かるその堂々とした出で立ちに、つい感嘆の溜息を吐いてしまった。

エル殿下が手を振ると、より一層の歓声が上がる。

女性のキャーッという甲高い悲鳴も聞こえてきて、まるでアイドルみたいだと思った。今度名前入りのうちわでも用意しよう。

「エリユレアル様〜！！」と叫ぶ声に、一瞬誰のことか分からなかった。あ、そっか、エル殿下の名前か。しかし、噛まずによく言えるなあと、ちよつと感心してしまう。

などと、ぼんやりとその様子を見ていた私は、はっとここに来た
目的を思い出して、よしっと気合を入れた。

「夜の空」

そう呟いて空に手を振れば、さっきまで青く晴れ渡っていた空が、
日蝕の日のように暗くなった。

いきなり陰った空に、下の方で悲鳴やざわめきが聞こえたけど、
私は構わず続ける。

「花火」

そう唱えて腕を振り上げれば、ひゅーっという音は無いものの、
いくつもの光の筋が空へと駆け上がり。

ドンツと盛大な音を立てて弾けた。

大輪を咲かせた初めの一発に続き、ドンドンドンと音を響かせな
がら、次々と色とりどりの花火が暗い空を色づかせる。

大小様々な光の花が、重なるように弾けては、キラキラと光をば
らまきながら消えていく。

そう、これは、以前エル殿下との練習中に思いついた、光の魔術
による花火だ。

私のイメージを形にしたものなので、その色や形も思い通り。打
ち上げによる回転もないから、見える角度もばっちりです。

ほーら、星形。次は、ピカ ユウ。続いて、頑張つて、ドラも
ん。

と、誰にも分かってはもらえないが、いくつもの花火で空を埋めた。

やがて、最後に打ち上げた、空全体を覆うような大きな一発が、金色の光をまき散らして消えていくのに合わせて、その光の欠片を花へと変えた。

様々な色の花が、風に吹かれればらと下へと流れていく。そして、それと同時に空も元の青空へと戻した。

しーんと静まり返る国民に、あれ？まずかったかな、とひやりと腹の奥が冷えた。

一応、事前にハティ様に相談して、不吉な現象だとは思われないだろうと、許しはもらったんだけど……。

色とりどりの花が、花弁を揺らしながら地面に到達する頃に、いきなりどつと空気を揺らすような歓声が上がった。

わあああ！ とはしゃぐ声があちらこちらから上がり、バルコニーの前に集まった人達のみならず、街のそこそこで、エル殿下を讃える声が聞こえてくる。

国民のみんなが空に手を上げて、花を捕まえようとしながら、口々にエル殿下の名前や「光の皇子！」と叫んでいた。

その活気が上まで伝わってきて、あ、悪いことにはならなかった、とほっと息を吐いた。

そのまま、私が下を見ると、いつから私に気付いていたのか、エル殿下がこちらを見上げて苦笑いしていた。

それに、ふへへと、悪戯がばれた子どものように笑い返す。

「随分と派手にやったねえ」

いきなり聞き覚えのある声が聞こえて、私は首を擦じって背後に目をやった。

すると、近くの屋根に、真っ白なコートを羽織った、淡い金色の髪に金色の目の、長身の男の人が立っていた。

その人は、危うげもなく軽い足取りで屋根の上を移動し、私の傍へとやって来る。

「琥珀様」

私は目線を、下のバルコニーに立つエル殿下に戻しながら、その人に声をかけた。

その人がこちらに顔を向けたのが、視界の端で分かったけど、私は顔を下に向けたまま。

「もし、私のいない間に、あの人に何かあったら、力を貸してあげてもらえませんか？」

「お願いします。と言葉を続けた私に、彼はゆっくりと口の端を上げて、

「珍しいね。君がそこまで他人を受け入れるなんて」と、面白そうに言った。

その言葉に、私は、彼の方に顔を向けて、困ったように笑った。

そんな私を見ていたその人は、ふんわりと柔らかい笑みを浮かべ。

「うん、いいよ。彼に力を貸そう」

そう言った彼にお礼を述べて、私はその場に立ち上がる。

強い風に髪を流されながら、すうっと大きく息を吸い込んだ。そして、口の横に両手を添えて、

「エル殿下ー！　ありがとー！ー！！」

腹からの大声で、空の向こうに向かって、そう叫んだ。下まで声は届いてないだろうけど。何か叫びたい気分だったんです。

「青春だねえ」

背後から、くすくすという笑い声と共に聞こえた言葉に、ちょっと、恥ずかしさで鳥肌が立ってしまった。

でも、まあ、本当に、助けに来てくれて嬉しかったから。おかげで色々と気づけたこともあるし。

だからね、　　ありがとう。

13・あなたにお礼の花束を。(後書き)

これで、一応第2章は終わりです。

伏線を張るだけ張って終わってしまった気がしますが……；

> ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございました< ()

その神秘的な漆黒の瞳からこぼれる涙を、見てみたいと思ったのだ。

テミズ教国のフェルベルト王弟から、カーヤが牢に入れられているという手紙を受け、俺は執務机から立ち上がった。

そして、止めようとするハティッドに構わず、扉の方へと歩いて行く。

「お待ちください、殿下！ あなたが直接行かずとも、カーヤを解放するよう書状を送れば良いでしょう！」

あなたが光属性の持ち主だということは、もはや世界中に伝わっているのですから、とハティッドが続ける。

しかし、俺はハティッドを振り返り、首を振った。

「それだけではすぐに解放されるとは限らないだろう。俺が直接行った方が早い」

「しかし、それでは立太子の儀に」

「何とか間に合うだろう」

最後まで言わずに答えて、俺は部屋を出た。
居合わせた部下に、直ぐにテミズ教国に向かって発つことを伝え
ると、その者は支度をするために慌てて去って行った。

脳裏に、あの漆黒の瞳が蘇る。

彼女　カーヤ・ナツキ　は不思議な女性だった。

この世界では珍しい、黒い目に黒い髪と、女性にしても華奢な体
つきに、幼い顔立ち。だが、その大人びた言動から、見た目ほど年
齢が低いわけではないのだろうと感じられた。

世界でも稀な光属性の持ち主で、我々が知らないような魔術も簡
単に使う。

にも関わらず、本人には何の驕りも銜いもなく、常に飄々として
いて。

最初、彼女がナディアを助けたと聞いたとき、正直何か裏がある
のではないかと疑った。

しかし、彼女は何も望まず、城を見学してみたいと言う。

ならば、間諜か何かかと怪しんでみれば、本人はただ興味深そう
に城内を回るだけだった。

興味津々に動き回る漆黒の瞳と、ころころと変わる表情に、いつ
しか彼女を疑うことが馬鹿馬鹿しくなっていた。

感情がすぐに面に出るようで、楽しそうだったり、戸惑っていた
り、疲れたふうだったり。その顔を見れば、何をどう思っているの
か、何となく読み取ることができた。

彼女と過ごした数日は、実に楽しくて、普段ならばあまり騒ぐことのない、カークラントやスケイアス、ナディアも子どものようにはしゃいでいた。

何より、普段から冷静で、ほとんど感情を出すことのないハティッドまでもが、楽しそうにしていたのには驚かされた。

そして、俺としては、俺のもう一つの属性　光属性を見つけてくれたことを、何よりも感謝している。

第一皇子でありながら、一属性しか持たないことに、俺はずっと悩んできた。

父や一部の貴族、そしてカークラント達は気にするなと言ってくれたが、やはり一属性しか持たない者を皇帝とすることに、反対する声は多かった。

その声は、成人が近づくとつれて大きくなり、弟を推す者による暗殺の危機も何度もあった。

悩んで悩んで悩み続けて、やがて俺は、弟に王位を任せ、自分は何らかの方法で国を守ればよいと、軍に入ることを望むようになっていった。

何かを吹っ切るように剣の腕を鍛える俺に、ハティッド達も気づいていただろう。

しかし、それでも、反乱の恐れがあると、国軍に所属させるべきではないという者もいた。

ならば俺はどうすればいい？　どこへ行っても、皇子としての監視は付くだろうから、一般国民としても暮らすことは叶わないだろう。ならば、どこへ行けばいいのだ！

俺のすることなすことすべてが否定されるのが悔しかった。自分の居場所が無くなるのが怖かった。

叫びたい衝動を常に堪えて、ただひたすら皇子らしくと、毅然と立つよう必死になっていた。

そんな俺を救ってくれたのは、彼女の何気ない一言だった。

彼女はあまりその重要性に気付いてはいないだろうが、もしも周りに誰もいなければ、俺はあの場で涙を流していただろう。

自分の存在意義を漸く見つけることができたような、言いようのない安心感に胸が苦しかった。

彼女には感謝してもしきれない。

あの時から俺は、彼女に、何かを返したいと思い続けている。

それは、彼女が俺にしてくれたことの恩返しのためだと、ずっとそう思っていたのだが……。

カーヤ、お前は気づいているだろうか。

時々、ひどく泣きそうな顔をしていることに。

寂しそくに苦しそくに、そっと笑うときがあることに。

彼女が何かを抱えていることは、分かっていた。だが、彼女は決してそれを口にしない。

他人のことは飄々と助けるくせに、自分は誰にも手を伸ばすことは無く、すべて自分の内に抱え込んで。

傍にいても、どこか遠い存在に感じることが、何度もあった。

「殿下！ 少し休まれたほうが！」

途中で馬を替えながら、休むことなくテミズ教国へと向かっていった俺に、背後から部下が声をかける。

だが、俺はどうしても休む気になれなかった。

無理をさせている部下には悪いとは思うが、今も牢の中にあるであらうカーヤを思うと、少しでも早くと気が急いだ。

彼女の振る舞いから、貴族ではないだろうが、それなりに裕福な家で育てられたのだろうことが知れた。

そんな彼女が、独り牢に入れられて、どんな思いをしているかと考えると、彼女を牢に入れた者に激しい苛立ちが生まれた。

いや、彼女は強いから、特に困ってはいないかもしれない。

だが俺が、そんなところに彼女を置いておきたくは無かった。

光の下にいるべき人だと思う。そして、なにより笑顔が似合う人だと。

ようやく到着したテミズ教国で、彼女の開放に渋る者達に、つい威圧的な態度で、光魔術まで使ってしまったのは、やりすぎであったかもしれない。

だが、彼女のことを何も知らず、悪だと言い募る者達に、心底腹が立ったのだ。俺が皇子という立場になれば、多少暴れていたかもしれないほどに。

案内されて足を踏み入れた地下牢は、案の定暗く陰湿な空気に満ちていて、一刻も早く彼女をここから連れ出さなければと、ひどく気持ち焦った。

鉄格子の向こう、木のベッドに座り、呆然とこちらを見上げる彼女に、言いようのない衝動がこみ上げた。

驚きに揺れた漆黒の瞳が、とても脆く危うげに感じて、手を伸ばしたくなかった。

苦しそくに顔を歪めるくせに、やはり彼女の頬に涙が流れることは無く。そのことに、やけに胸が焦れた。

彼女に何かを返したい。

そう思っていたはずが、気が付けば彼女に泣ける場所、安らげる場所を与えてやりたいと思うようになった。そして、それが俺の傍であればいいと。

生き急ぐような、命を削っても懸命に目的を叶えようとする彼女に、休息を与えてやりたかった。彼女にとっては必要ないだろうが、独りで立つ彼女を、この手で守ってやりたかった。

それが、俺の独りよがりの想いだったとしても。

そのためなら、俺は　　。

だが、全てを捨ててもいいと、口にするには、俺の立場は重すぎた。

いずれ国を預かる者として、ただ一人のために全てをかけるわけにはいかないことも、頭では分かっている。

その王の地位も、彼女が与えてくれたというのに。

それに、彼女に対するこの想いも不確かすぎて。同情なのか、庇護欲なのか、それとも……………。

だから、今はまだこの想いに名を付けることはしない。お前にそ

れを打ち明けることもないだろう。

そしてきつと、そんな想いはお前の重荷になる。誰かに、何かに
囚われることを、お前は拒絶しているように思えるから。

ならば、俺は俺なりに、出来る限りお前の助けになることをして
いこうと思う。

だが、カーヤ。お前と共に空を翔けた、あの一時に。

このままお前とどこまでも行けるなら、それも悪くないと、ただ
そう思ったのだ。

1・知ってるっぽい人がいたので。

おや、と何となく見知った人物が、目の前を通り過ぎて行ったのに、私は串焼き片手に首を傾げた。

前回、エル殿下を送るついでに、シューミナルケアのお城にやって来た私は、少し頭を冷やした。

還ることばかりを必死に考え、精神的に焦りすぎていて、気が付けば色々と参っていた自分に気付かされたのだ。

煮詰まったまま突っ走っても、かえって遠回りになりかねない。もっとしつかりと腰を落着けて、考えて行動しなければ！

そう思い立った時、急がば回れとはこういうことか！ と、拳を握りしめて叫んでしまったほどだ。

実はそれを叫んだのが、エル殿下の執務室で、仕事をしていたエル殿下に不可解な目で見られた。ハティ様に至っては無反応だ。あえて？ それはあえての無視！？

まあ、そんなわけで、時折息抜きついでにシューミナルケアのお城に寄らせてもらうことにして、また元の世界に戻るための方法を探して、世界中を飛び回ることにしたのだ。

息抜きを挿んだせいで、還るのが遅くなってしまうかもしれないけど、たまには落ち着かなければ、何をしでかすか分からないと、テミズ教国の牢屋で学んだのです。……あんまり、いい思い出じゃないけどね。

父さん、母さん、弟よ。少し帰るのが遅くなるかもしれないけど、許してね。信じて待っててね。この思いだけでも、どうか届きますように。

そう決意して、城に立ち寄った際には、エル殿下やハティ様、スケさんカクさんに、ナディア様達と、お茶をしたり、せっかくなのでと街を散策したりしています。

それからね、これはもう感動ものなんだけど、ハティ様が、私の不在の間に、世界中から空間云々に関する本や情報を集めてくれたりするので。その中には、異世界のことにも触れたものも混ざってて、ハティ様は何をどこまで知ってるのか、たまにドキドキするけど、でもすっごく嬉しかったのです！

ああ、もうなんでしょうね、あの方、何なんでしょう！？

こう、心がふわってなるような心遣い？ 普段、自分に関係ありませんって、クールなお顔してらっしゃるのに、こんなさり気ない気遣いは卑怯だ！

惚れてまうやるおおおおお！！ 一人隠れて悶えてしまった。

あ、このネタもう古いの？ 大丈夫？

あと、もうここまでエル殿下達に迷惑をかけてしまっているの、本当のことを話すべきかと、悩んだりもしたんだけど、やっぱりどうしても踏み切れなかった。

いや、信じてくれないんじゃないかって、疑ってるわけじゃなくてね。こちらの世界に来た時に持ってた、携帯電話とか、文房具とか、プラスチックのカードとか、この世界に無いものはいくつか持

ってるから、それを見せればさすがに信じてくれると思うし。

問題は、私の心というか……。やっぱりね、心のどこかで、これは夢なんじゃないかって、思っている自分がいるのですよ。

だから、どうせ夢の中だしって、どこか一歩引いたところから見ていたり、いつか覚めるならいいか、って放置しようとしてしまう部分もあるのよ。

何より、口にして説明することで、これが現実だって改めて認めるのが、怖いつていうのもあって……。

というわけで、まあ、私の心の整理がつくまでは、もうちょっと事情説明は先にしようと思ってます。

ただ、エル殿下やハティ様には、いつか突然ここに来なくなるかもしれない、ということはおきました。

突然還ることになったときに、挨拶に来れるか分からないからね。

今日は天気も良かったし、街の大通りに市が立つ日だったので、一人で街をぶらぶらしてます。

本当は、カクさんが、案内しようか？ って言ってくれたんだけど、訓練をサボるなって、凜々しい女性の副騎士団長さんに、首根っこを掴まれて引きずられて行きました。

カクさんを引きずることが出来る人が、スケさん以外にもいたのかと、ちよつと驚かされた瞬間だった。

そして、出ていたお店の一つで、美味しそうな匂いに釣られて、地球にはいない動物のお肉の串焼きを購入し、行儀は良くないけどお祭り気分でそれを齧りながら歩いていたら、目の前を見覚えがあ

るような無いような人が、通り過ぎて行ったのです。

短く整えられた金色の髪に、エメラルドグリーンの瞳。どこか騎士っぽい格好の、まだ日本でいう高校生ぐらいの見た目の男性だったけど、何か非常に……。

えー、まさかなー、とか思いながら、何となくその思い詰めたような表情が気になって、つい彼の後を歩いていると、突然道の端から手が出てきて、目の前の彼が引っ張り込まれた。

へ？ は？？ とその早業に驚きながら、慌てて路地を覗き込むと、そこには彼を袋詰めにする、がっしりとした体格の男が二人。

いや、比較的狭い路地だし、影になってるから、注意して見てないと気づかれにくいとは思っただけど、何故こんなところで？ しかも、何故に袋詰め！？

と、一瞬私はぼかんとした顔になってたと思う。ついでに向こうも驚いて、動きが一瞬止まった。

その時、袋の中から「うう！」とくぐもった声が聞こえて、互いにはっと我に返ったときには、その二人組の一人が、「ちっ！ そいつも捕まえろ！」と、いかにも人攫いらしいセリフを叫んだ。

とりあえず逃げねばと後ずさったとき、急に目の前が暗くなった。背後にも仲間がいたのかと気づいたときには、すでに、おそらくは袋の中に詰められてた。

頭から袋を被せられ、足首のところを紐で縛られてるみたいだから、傍から見たらエビフライっぽくなってるんじゃないだろうか。いやいや、呑気にそんなこと考えてる場合じゃないんだけどね、わあ、この袋柑橘系の良い匂いがする。きっと、果物が入ってたんだな。

お、大した強度じゃないけど、この袋にも一応魔術封じがかけて

あるみたい。多分、魔術で燃やされたり、袋ごと盗まれないようにするためのだと思っただけだね。決して、人攫い用ではないと思うのよ。

なんてぐるぐると分析していると、「よいしょ！」という掛け声とともに、体がふわりと浮いた。

ぐえっ！　ちよっと！　痛い痛い痛い！　担ぐならせめてうつ伏せをお願いします！　背中側を曲げられてるから、せ、背骨が折れるうっうっ！　エビフライだけに、まさに海老反りってね！

運び手の気の利かなさに袋の中で腹を立てていると、今度はどさりと何か硬いものの上に下ろされた。痛いぞこのやるー！

やがてごとごとと動き出した振動に、荷車かなんかで、どこかに運ばれているのだろうということが分かった。

隣にもう一つ何か横たわっている気配を感じるから、きっと先に攫われた彼だと思う。

まあ、ここで抜け出してもいいんだけど、二人の身に危険が無いのなら、彼を攫った奴らの目的やアジトを知ってからでも、遅くないような気がしてきた。

だって、彼が私の思ってる通りの人物なら、これは重大事件だし。

2・やつらの目的。

なんて考えながらしばらく揺られているうちに、馬車が停まり、
またも何者かに担がれ　今回は腹這いだったので、助かった、
どこかへ運び込まれた後、ようやく袋を脱がされたと思つたら、壁
に掘られた穴に鉄格子を付けたような牢屋に押し込まれた。

がーん！　またこれかー！！　と、目の前で牢の入り口が閉め
られるのを見ながら、私はシヨックに打ちのめされていた。

うつうつ、何が悲しゆうて、人生で二度も！　しかも、こんな短期
間で牢屋に入らねばならんのよ！

岩を掘っただけだから、窓もないし薄暗いし、牢屋の中にはベツ
ドもトイレも何も無いし。うむむ、設備としてはテミズ教国の方が
良かったな。あ、でも、この岩の性質によるのか、テミズ教国の牢
屋みたいな陰湿感は無いかも。これは甲乙つけがたい。後は食事し
だい……って、牢を比較してる場合じゃなくて！

ちくしょう！　こうなつたら、色んな場所の牢屋を巡つて、評論
文でも書いて、本にして出版したるか。タイトルはズバリ『世界の
鉄格子窓から』！　とりあえず、シューミナルケアの牢屋も今度見
せてもらおう。

「なあ」

なんて、若干自棄になつてしていると、一緒に牢屋に放り込まれてい

た彼が、声をかけてきた。

「あんた、ナディアを助けた魔術師だろ？」

胡坐をかいてこちらを見てくる彼は、やはり薄暗い中でも輝いて見える金色の髪に、鮮やかな緑色の瞳が、かの親子によく似ていた。

「えっと、その通りです。……あなたは、シューミナルケア国の、第二皇子様で間違いないでしょうか？」

名前までは知らなかったが、確か最初に行った謁見の間で、王の傍で見たようなと、そう問いかけた。

そんな私の問いに、第二皇子は眉間に皺を寄せて、「ラディスリール・アルネリモア・デュ・シューミナルケアだ」とぼそりと名乗った。

長い！ もう一回！ とは言い難い雰囲気、私はとりあえず聞き取れた最初の部分で、ラデ殿下と心の中で呼ばせてもらうことにした。

「私は、カーヤ・ナツキと申します」

何となく今更のような気がして、戸惑いながら名乗ると、ラデ殿下は「知っている」と不機嫌そうに答えた。

「兄上の光属性を見つけた魔術師だろう。王宮では万能の魔術師と噂されているな。教会の方では、叶わぬ夢を追い続ける新米魔術師と言われていたが」

そのラデ殿下の言葉に、私は「はあ！？」と間抜けな声を上げてしまった。

何だその噂。前半のもなんだが、後半のは、否定的に聞けば嫌味のような、肯定的なら諦めんなと応援したくなるような。

むう、ハティ様に苛められた爺どもの意趣返しか！ それなら直接ハティ様に返しといてください！

「とりあえず、両方の噂を否定させて下さい」

げんなりしながらそう返すと、ラデ殿下は首を傾げ。

「教会側の噂は良く知らないが、万能というのは城勤めの者から幾度も聞いたぞ。光属性を持ち、多くの魔術を使いこなし、どのようなことも可能にする、と」

ラデ殿下の言葉に、私は慌てて首を振った。

「とんでもない！ どんな属性を持っていても、出来ないことなんかたくさんありますよ！」

真剣に否定しながら、一瞬頭を過った光景に、胸に突き刺されたような痛みを感じた。

「どんな属性を持っていても、魔力があっても、……死んだ人を生き返らせることはできないし、時間を戻すことも……できないんです」

目蓋に浮かぶ映像を打ち消すように、私はぎゅっと目を閉じ、力のない声で言葉を続けた。

それに、自分の世界に還ることもできない。と内心で自嘲気味に笑う。

自分の無力さなど、心を引き裂かれるような絶望感と共に、身に染みて知っている。

魔術を使えることの無意味さを、血に塗れた両手を握りしめ、声が嘎れるほど泣き叫んだあの日に、嫌というほど思い知ったのだ。

突然落ちた重い空気に　いや、私のせいなんですけどね　、
お互いに口を噤んでいると、ガチャリと扉が開く音が聞こえ、どすどすと荒い足音と共に鉄格子の向こうに先ほどの三人組と、リーダーらしき男が現れた。

大きな体格に、もじゃつと口の周りに剛毛そうな髭を生やした男は、地面に座り込んでいるラデ殿下をじっと見ながら、「あんた、第二皇子だな？」と問いかけた。

「お前達は何者だ？　何故俺達を攫った？」

男の問いに答えず、ラデ殿下は男を睨みつけながら、逆に問う。
そんなラデ殿下の態度に、男はふんと鼻で笑って。

「俺らは“闇の組織”の者さ。あんたを攫ったのは、あんたを餌に第一皇子を呼び出そうと思ってよ。第二皇子がよく街をふらふらしてるって噂を聞いたもんでね、あんたを餌にしようと思ったのさ」

その男の言葉に、私は目を見開いた。

な……なんて親切な人！　質問にちゃんと答えてくれるなんて！
しかし、やっぱり私は完全なる巻き込まれですよ。ああ、何だかとても居心地が悪いんですが。

「なぜ、兄上を？」

よし、気配を消そう、と、私がじりじりと壁際に移動していると、ラデ殿下が声を上げた。

「光属性を持っているからさ」

ぎくり、と心臓が一度跳ねた。そーっと視線をラデ殿下や彼と話している男、そして男の後ろに立つ三人組へと移動させたが、誰もこちらを見ていなかった。

これは、私も光属性持ちだっということ、知られてないと思っ
ていいのだろうか。

「光属性を持っている者を、うちの上層部に売れば、高値の報酬が
もらえるんでね」

うん？ それは、皇子を取引材料に身代金を要求するのと、どち
らが高額なの？ とも思ったが、彼らの目的はあくまで、光属性を
持つ者を“闇の組織”の上層部とやらに売ることらしい。

ちなみに、“闇の組織”って何？

ちらりと頭に浮かんだのは、“闇幸福論者”達のことだけだ。で
も、彼らが光属性を持つ者を集めてどうするんだろう？ 目的のた
めに邪魔だから、とかいう理由で、ま……まさか、殺……！？

私は、ますます気配を消すことに専念した。

「もう城に手紙は出してある。第一皇子もそろそろ来るはずだ。そ
れまで大人しくしてな」

そう言って、男達が牢の前から立ち去ろうとしたとき、リーダー

らしき男と目が……合った。

「あん？ この女は何だ？」

「ああ、皇子を攫うところを見られたんで、ついでに攫ってきたんすよ」

リーダーらしき男が三人組に問いかけると、その中の一人がそう答えた。

「ほう」

と、男がじつとこちらを見てくる。光属性を持っているとばれやしないかとか、目撃者は殺せとか言われないかと、私は冷や汗を流しながら固まっていた。

「おや、その女が気に入ったんですか？」

三人組の一人が、ひひと嫌な笑い声をあげながら、男に問いかける。

ビシッと私の体が固まった。

「馬鹿なこと言うな。俺の好みはむつちりした豊かな体つきの女だ。こんながりがりのガキなんざ、興味もわかねえよ」

よし、あいつ絶対燃やす！ 何が何でも燃やす！！

男達が立ち去るのを睨みつけながら、私は全身で怒りに燃えていた。

灼熱の地獄を見せたらあああああ！！

3 第22条。(前書)

3・弟として。

遠くで扉の閉まる音を聞きながら、もうあいつらの目的も分かったし、ここから出てもいいかなあと立ち上がる。

こんなんでも人を閉じ込めておくための場所だから、一応魔術封じはかけられているけれど、テミズ教国の牢ほど強固じゃないし、何とか破れそうだ。

そう思って、ラデ殿下を見ると、今度はラデ殿下が何やら重い霧囲気で俯いていた。

「殿下？」

と声をかけると、ラデ殿下の背中がびくりと揺れた。

「兄上、兄上、兄上、兄上！ 誰もかれも、兄上ばかり！ じゃあ、俺は何なんだよ！ あんな完璧な人の下で、俺はどうすればいいんだよ！」

一つ拳を地面に叩きつけて、ラデ殿下は苦しそうに叫んだ。

「俺は兄上の代わりでしかないのか！？ 俺が皇族である意味って一体何なんだよ！？ 俺は……俺って、何なんだよ……」

表情は見えないが、肩が震えている。形のいい指が土の地面を握り込んで、その姿が痛々しかった。

うーむ。奴らの言葉で、ラデ殿下が抱えていた不満が爆発したらしい。

確かに、エル殿下は博識で、ハティ様が言っただけなのに、あらゆる面で優れた人なのだろう。ラデ殿下は、そんな兄と色々比べられてきたのだろうか。特に王族だし、周囲の目は多く執拗で、何かと神経をすり減らしてきたのかもしれない。

若いのに、苦労してるのね……と、私はどう声をかけたものかとしばらく彼を見ていた。会話して数分ほどしか経ってない私が、軽率なことはいえないしね。

「とりあえず、エル……殿下も完璧な人じゃないと思いますよ?」

彼の傍でしゃがみ込み、そつと声をかけた。

「そんなわけないだろう! 兄上は頭もよくて、武術に長けてて、いつも毅然としてて、何でもできて……」

「でも、エル殿下は、ずつと一属性しか持ってないことにすごく苦しんでたって、聞きましたけど?」

私の言葉に、ラデ殿下はゆっくりと顔を上げて。

「……うそ……だ。だって、そんな素振り一度も……」

驚いたように見開かれた目に、逆に私が驚いた。え? だって……。

「一属性しか持ってない自分は、皇帝になれないから、皇位はラデ殿下に任せて、自分は継承権を放棄しようとしてたのにな?」

それでも、国を守りたいからって、必死で剣の練習してたそうですけど」

それを譲り受けるはずのラデ殿下は、エル殿下の迷いを知らなかったというのか。

私に向かって見開かれていた目が、さらに限界まで開かれる。

「……だって、兄上は常に堂々としてて、そんな……だって……」

よほどの衝撃だったのか、ラデ殿下は戸惑うように言葉をのどに詰まらせた。

まったく気づきませんでした、っていうラデ殿下の様子に、つい苦笑いが浮かんでしまう。

「まあ、お兄ちゃんですからね。迷ってる自分の姿なんて、見せなくなかったんじゃないですか？」

エル殿下の意外と意地っ張りな面を思っ、私はやれやれと首を振った。

完璧だと思っていた兄の、思わぬ姿に、ラデ殿下は気が抜けたように、体から力を抜いた。

そんなラデ殿下に、私はふふふと笑って。

「まあ、殿下がどうしても皇帝になりたいって言うんでしたら、自分を磨いて、エル殿下に挑んでみたらどうですか？ あ、でも、内乱とかじゃなくて、エル殿下と皇帝陛下に面と向かって言ってみるってことですよ？」

「……違う、俺は、……別に、皇帝になりたいわけじゃ……」

私の言葉に首を振ったラデ殿下の頭に手を置いて、くしゃくしゃと撫でる。

「まあ、自分がどうしたいのか、しっかりと悩んでください、青少年
！」

頭上の私の手を掴んで、ラデ殿下はじろつと私を見上げてきた。

「えーっと、すみません。つい、弟の時みたいで……」

あら、エル殿下やナディア様と接するうちに麻痺してたけど、これって不敬罪にされちゃうかしら、と内心冷や冷やししながら、誤魔化すように笑ってみせる。

「弟？」

「ええ。うちの弟もちょうど思春期だったんで、色々悩んで、よく苛立ってましたよ。反抗期ってやつです」

その時の弟の様子を思い出して、つい軽い笑い声を上げてしまった。

「……誰でも、悩むものなのか……？」

「そうですね、色々悩むでしょう。エル殿下も、悩んだと思いますよ？」

私の言葉に、ラデ殿下は顔を床に落とした。

「……そうか、俺が、情けないからではないのか……」

ちよつとほつとしたような小さな声が聞こえて、私は彼の頭をぼんぼんと軽く叩いた。

本当のことは分からないが、もしかしたら、自分の状況に悩みながらも、皇子という立場上、簡単に周りの人に相談できなかったのかもしれない。下手したら、エル殿下の対抗勢力として、利用されかねないしね。

そう思いながら、よしよしとラデ殿下の頭を撫でる。ラデ殿下は、大人しくされるがままになっていた。

何か、勢いが抜けてしおっとなっている。

今までの言動から、何かと考え込んで真面目な子っぽいんで、お姉さん 実は年上かもしれないけど、気持ち的にね！ は 適度な息抜きをお勧めします！

「正直言つと、私はエル殿下の光属性を教えたことを、後悔してるんです」

そんな様子を見ていたら、私もついぼろっと、ずっと考えていたことが出てしまった。

私の言葉に、ラデ殿下は顔を上げ、良く分からないといった顔をした。

「何故だ？ 兄上に光属性が見つかったことを、兄上も父上も母上もナディアも、城の者も皆喜んでいたぞ」

地面に座ったままのラデ殿下の隣に腰を下ろし、鉄格子の向こう

の通路に目をやった。

「光属性を持つ者が、何故、世界中で優遇されているか知ってますか？」

「……人数が極めて少ないから……か？」

私の言葉に、ラデ殿下はしばらく考えてから、答えた。

ああ、もう、すっかり考えるところとか、本当に真面目なんだな。何か可愛いぞ。

「それもあります。光属性を持つ者は、対魔物戦では、一騎当千とまではいきませんが、一騎当百ほどの戦力にはなるんです。

だから、魔物との戦いが生じたときには、真っ先に最前線に駆り出され、命がけで戦う。その代わりに、優遇なんです」

ラデ殿下を見ながらそう答えれば、ラデ殿下は真剣な顔でこくりと頷いた。

この牢の中はやけに静かで、響きはしないものの、私の声しか聞こえない。

「魔物が大した強さでなければ、問題は無いでしょうが、それがとても強大でかつ凶暴な魔物や魔人だったら。とんでもなく数が多かったら。」

それでも、多くの兵を失うよりは、光属性を持つ者が戦った方が勝つ確率が高いなら、光属性を持つ者が、場合によっては一人で、挑むことになる。そして、何故か世界の多くの人々は、光属性を持つ者は無敵で、助けなど必要ないと信じてたりするらしいんです。」

魔物が出た際には、真っ先に光属性を持つ者を向かわせ、戦わせ

る。兵を、国力を失わないために、最小限の犠牲で済むように。それは治世者としては正しい選択なのかもしれないけど。

でも、光属性を持つ者だって、魔力が無尽蔵なわけではない。力を使い続ければ、魔力の回復が間に合わず枯渇することだってあるのだ。

この世界では誰もが魔力を有する。ということは、逆に言うと、魔力が無ければ生きていけないということだ。魔力が尽きてしまえば、その人は……。

それに、どれほど魔力があつたって、無防備な時に肉体を攻撃されれば、致命傷を負ったりもする。治療が間に合わなければ、死に至ることもある。光属性を持っていても、不傷、不死というわけではないのだ。

ずっと視線を落とした私に、ラデ殿下は愕然という顔をした。むやみに怖がらせたわけではないのだけだ。

「エル殿下は皇太子だから、めつたなことが無ければ最前線に送られるなんてことは無いと思います。でも、エル殿下だから、自分が戦うことで兵が守られるなら、真っ先に飛び出して行きそうじゃないですか」

少し冗談めかしてそう言って、私は小さく笑った。

私の言葉に、ラデ殿下は俯いて、何か考えているようだった。

「無茶をしそうで、怖いんです。もし光属性があると知らなければ、冷静な人ですから、自分の力の範囲内で力を尽くそうとしたのでしようけど」

それに魔力も強いから、誰かに利用されるんじゃないかとかね。

そりゃあ、国にとっては、戦力となる光属性を持つ人がいた方がいいのだからけれど、私としては、知らない人が傷つくより、親しい人が傷つく方が怖いのですよ。身勝手な考えかもしれないけど。

言い終えて、私はふうと息を吐いた。

エル殿下に属性のことを教えたときは、そんなことまで考えてなくて、つい言っちゃった感じだけど、最近はそれで良かったのか、本当に悩んでたのよね。あああ、まさに後悔先に立たずなんですけどね！ 考えても、どうしようもないことなんですけどねっ！

まあ、もしもの時は、ハティ様と協力して、エル殿下を監禁するしかない！

ふふふ、と思考が危ない方向に行きかけたとき、ラデ殿下が顔を上げた。

「俺も、国を守れるようになりたいな」

ぼつりと呟かれた言葉は、しかし強い意志が込められていて。

「兄上を、一人で戦場に行かせないためにも」

そう言って、ラデ殿下はふっと笑った。憑き物が落ちたような、すっきりとした笑顔だった。

4・異世界でのささやかな楽しみ。

「ちよつとお邪魔するやさ」

晴れ晴れと笑ったラデ殿下が非常に可愛くて、私もニコニコと笑い返していると、何やら軽い声が聞こえてきた。

え？ とラデ殿下と同時に格子の向こうの通路を見ると、いつの間にか二人の人物が立っていた。先ほどの誘拐犯たちとは違う、おそろいの茶色のつなぎを身に着けた、ひよろりと背の高い男の人と、卵のように丸いシルエットの男の人だ。

えー、まず、背の高い人の方だけど、緑色の髪を立てて先の方を後ろに流しているから、その細くて高い身長と相まって、あー、ほら、あれだ、冬場のお鍋に欠かせないお野菜、……長ネギみたいなのだ。人を野菜に例えて申し訳ないのですが……。
んで、もう一人の方は、丸い体と細い手足のせいで、不思議の国のアリスに出てくるハンプティ・ダンプティみたいなよ。その体にぴったりをつなぎがまたコロコロ感を強調していて……妙に可愛いな、おい。

見た感じでは、長ネギさんは二十代後半、玉子さんは三十代後半から四十代ってとこかな？

うん、で。

「だ「誰だ！」「……」

………ラデ殿下に先越されちゃった。いや、まあ、いいんだけど

ど。

先ほどまでの、状況にそぐわないほのぼの空気はあつという間に吹き飛んで、ラデ殿下は警戒心も露わに男性二人組を睨んでいる。体をずらして、さり気なく私の前に出ている姿なんて、何て紳士的……！

その背中が、まるで子犬が精いっぱい敵を威嚇しながら、かばってくれているようで　ラデ殿下に知られたら怒られそうないメージだが　、ついきゅんとしてしまった。

さつきから思ってたが、この子って、弟属性というか、子犬属性というか、何か可愛いよね。いや、だから、年上かもしれないけど。

「いえ、私達はあなた方の敵ではありません」

はうっ！　何か今、すっごい低くてダンディな美声が聞こえた！

声の出どころを探してきよるきよるしてみたが、ここにいるのは、牢の中に私とラデ殿下で、鉄格子の向こうにはネギさんと玉子さんしかない。

「あんだ達のことは、あいつらの話聞いてたから、ちゃんと分かっつてやさ〜」

この少し変わった語尾は、つなぎのポケットに手を入れてどこかやる気なさそうに話す、ネギさんのものだな。だる〜としてて、ちよつとイラツとくるぞ。でも、その語尾は何か可愛い。方言なのか、ネギさんの口癖なのか、気になるところだ。

ということは……。

「我々は、依頼を受けて、ある組織について調査をしている者です」
やっぱり、玉子さんだったああああ！！ テノールのオペラ歌
手のようなよく通る声に、ついうっとり聞き惚れてしまう。

「それは、さっきあいつらが言っていた“闇の組織”というやつか
」？」

疑わしげに、ラデ殿下が問いかける。

「そうやさ。あ、依頼内容とかは、秘密やさけどね」

へらつと笑って、ネギさんは髪を撫でつけた。フワサつと揺れた
緑色の髪が、青々しくて新鮮そ……いやいやいや。

「敵ではないと言ったな。では、俺達がここから出るのを、手伝っ
てくれるのか？」

「ええ、そのつもりでここへ来たのですから」

玉子さんがにっこりと笑う。ああ、その美声といいシルエットと
いい、妙に安心感をもたらす人だ。

ネギさんが、ポケットから取り出した鍵で、ガチャガチャと牢の
鍵を開けてくれたので、私とラデ殿下はあっさり牢を脱出。

鉄格子の扉を潜って、うーんと体を伸ばした。いや、やっぱり
牢の中ってどうにも緊張しちゃうのよね。牢屋の中にくつろげるほ
ど慣れたいわけでもないけど。

「申し遅れましたが、私の名はホー・ムーズと申します」

玉子さんがゆったりと笑って、自己紹介をしてくれた。本当にいい声だね。ふむ、ホーさんですか。つなげて言えばホームズですね。かの有名な名探偵ですね！ 依頼を受けて“闇の組織”を調べているとか仰いましたが、ご職業は探偵でいらっしやるのでしょうか？

「んで、俺は助手の〜」

続いて、ネギさんも自己紹介をしようとする。

じよ、助手！ ホームズさんの助手！ ということは、お名前はまさか、ワトソ「ワトトン・キツスやさ」ん？

「ワトソンさん？」

「いやさ、ワトトンやさ」

「いやいや、ワトソンさんですよね？」

「いやいやいや〜、ワトトンやさ〜」

「ワトソンさんと呼ばせて下さい！」

「ん、いいやさ〜」

というわけで、助手のワトソンゲットおおおおお！！

一人で片腕を振り上げていると、ワトトンさん改めワトソンさんが不思議そうに首を傾げていた。

いやいや、決してワトトンさんの名前を否定しているわけではないのですよ！ でもせっかく、ホームズさんの助手なんだから、どうかワトソンと呼ばせて欲しいのよ！ 一文字違いって、どういうことよ、異世界いいいいいい！！ 私の、「あれ？ これ、地球で

「言つとあれじゃね？」的な名前探しの楽しみを奪う気がああああ
！！

そう、世界に向けて叫びたい気持ちをこらえていると、その横で
ラデ殿下がホームズさん達に向かって自己紹介をしていた。

あ、いかんいかん、私もきちんと自己紹介とお礼を言わなければ
と、改めて二人の方へ向き直った。

「助けて下さつてありがとうございました。私は、魔術師のカーヤ・
ナツキと言います」

ぺこりと頭を下げる。

「そつちの皇子サマは分かるんやさけど、あんたは何で捕まった
のやさ？」

「ただの巻き添えです！」

ワトソンさんが不思議そうに聞いてきたので、私は間髪置かず答
えた。いや、今回はもう、それ以外の何でも無いからね！

軽く事情を説明しようとしていた時、ギイと重い扉が開く音がし
て、どたどたと数人の足音がした。

「お、お前ら何もんだ！？」

そこの現れたのは、さつきまでいた誘拐犯の男達で。ええ！？
ちよつと、見張りとかつけてなかったの！？ と驚きで、ホームズ
さんとワトソンさんを凝視してしまふ。

いやいやいや！　これが探偵小説とかだったら、あ、うっかり主人公が犯人に見つかってしまった！　主人公ピクンチ！　この窮地をどう切り抜ける！？　といった、盛り上がりどころなんでしょうけど、こんなところでそれを発揮されても困るだけですから！　ついうっかり　では済みませんからね！！

と、私が一人であわわしている間にも、剣呑な顔をした男達四人は、いかにも悪役らしいごつい剣を持ち出してきた。

それに対峙するホームズさんは魔術用の杖を、ワトソンさんは鎖鎌！？　を構えている。うわ！　鎖鎌って初めて見た！　と、つい視線がそちらに釘付けに。

そして、目の前がふと陰ったかと思うと、私より少し背の高い、ラデ殿下の背中が！

あああああ！　もう、何この子！　スマートすぎる！　誰？　誰の教育のたまもの！？

その後ろ姿が、一回りは大きさが違うけど、エル殿下のものと重なって、やっぱり兄弟だなあって、場違いなことを考えてしまった。まあ、エル殿下の場合は、私が無理矢理盾にしてる方が多いんだけど。

4・異世界でのささやかな楽しみ。(後書き)

更新のペースがすっかり遅くなってしまい、申し訳ありません m

— ;) m

5・ギャップ萌え！

「皇子以外にやあ用はねえ。他のやつは始末しろ！」

リーダーらしき人がその声をかけると、他の三人はざっと剣を構えて、じりじりとこちらへと距離を詰めてくる。

ピンとした緊張感が漂っていて、戦闘は避けられないかと、私も魔術を使おうとした、その時。

ビュオオオオオオオオオ！！

という、凄まじい風の音と、ゴリゴリゴリと岩が削られる音と共に、ドゴンと牢屋の奥の壁が吹き飛んだ。

岩の欠片や土がバラバラと床に広がり、もうもうと砂煙が上がる。

やがてその砂煙も、一掃するような風に流され、穴の向こうへと流れ去っていく。

咄嗟のことに、とりあえずラデ殿下の腕を引っ張って、ラデ殿下の前に出ようとした恰好のまま、私はぱちりと目を瞬いた。

あれ？ この気配、何か憶えがあるんだけど。

漸く砂煙が晴れ、視界が開けたかと思うと、壁に空いた大穴の前に、小学生の低学年くらいの体格の子どもが浮かんでいた。

壁の向こうは外だったようで、その子どもの背後には、晴れ渡った青空が見える。

「お！ カーヤ発見〜！」

その元気な声に、私はがっくりと脱力してしまった。背後のラデ殿下からは、戸惑ったような気配が漂ってくる。

「えーと、お久しぶりです。灰斗様……」

気の抜けた顔で挨拶した私に構わず、灰斗様はニコニコ笑って「おう！」と返事をした。

そして、そのまま私の前までふわりと飛んでくると、私の目の前で右手を持ち上げた。

その灰斗様の手に握られていたのは、青々とした葉を付けた植物と、その下の方には、土の付いたままの膨れ上がった根っこが。

おや、もしかしてこれは。

私が根っこをまじまじと観察しているのを、満足そうに見ていた灰斗様が、にっと少年ぽい笑顔を浮かべる。

「この前、カーヤが食べたいって言ってただろ？ ちょっと飛んでたら、似たようなの見つけたんで、持ってきてやった！」

そう言って、ずいど手に持っていたもの　おそらくは芋　を、私の手に乗せた。

あ、遅くなりましたが、皆様どうも初めまして。こちらの、淡い灰色の短髪に白に近い灰色の瞳の、見た目活発そうな美少年は、実は風の精霊王、灰斗様です。

思い立ったら一直線、周囲の状況を目に入れずに突っ走るので、

常に周りに被害が絶えないというちょっと困った方で、よく精霊王様方の中では常識人の火の精霊王様の頭を悩ませております。

でも、たいていは世界中を飛び回っていて、よく面白いものを見つけてきてくれたり、私が地球のものを懐かしがってたりすると、似たようなものがあつたら知らせてくれる、優しい方でもあるのですが。

何故少年の姿なのかは知りません。空を飛ぶので軽量化？ でも、だったら、もっと他に良い格好があるような……？ まさかの趣味？

私は手に持った芋を見ながら、ふっと口元を緩めた。

ふふ、懐かしい。あれは、タリアさんの家の近くの森が、赤や黄色に色づいてきたときに、「ああ、焼き芋がしたいなあ」なんて私が呟いて、「それは何だ？」って話題になって……………。

「なあ……カーヤ？」

後ろから、控えめな声が聞こえて、私ははっと我に返った。しまった、今は思い出に帰っている場合ではなかった！

状況を確認しようと、辺りを見回すと、牢屋が連なる廊下の左側の壁の辺りに、いつの間にか気絶した男達と、それを拘束するホームズさんとワトソンさんがいた。

うわっ！ すごい早業！ しかも、私戦闘が行われたことに、全然気づかなかつただけど！

思わぬ、探偵二人の戦闘スキルに、おお〜！ と声を上げて拍手しそうになる。手にお芋があつたのでできなかつただけ。

二人の男を、ホームズさんが木の魔術で出したと思われる木の蔦で縛り、もう二人は、ワトソンさんが鎖鎌の鎖部分でぐるぐる巻き

にしていた。

あ！ その鎖鎌の使い方、テレビの時代劇なんかで見たことがある！ こんなところで実際に使っているところを見られるなんて！ どうせなら、鎖鎌を使って戦う姿も見ておけばよかったあああ！

と、内心地団太を踏みながら悔しがっていると、ラデ殿下が「そちらの彼は誰なんだ？」と灰斗様の方を見ながら聞いてきたので、私は、「風の精霊王様です」と紹介した。別に隠すことも無いしね。

そう思っ、素直に答えたのに、ラデ殿下も、ホームズさんもワトソンさんも、こちらを見て固まっている。

おや？ 説明が簡単すぎたか？ と首を傾げていると、灰斗様の体がふわりと、壁に空いた大穴の方へと流れて行く。

「んじゃあ、またな！ カーヤ！」

おお！ この状況を放置して、いきなりの退出宣言ですか！ 相変わらずの自由奔放っぷり。気が付けば居ない、そのフリーダムさに頭を抱える火の精霊王様のお姿が、鮮明に脳裏に浮かびます。ああ、お懐かしい。

良い子の大きな声ではきはきと別れの挨拶をした灰斗様は、すいと穴の外へと飛び出して行った。

「……お前は、風の精霊王と……その、知り合いなのか？」

恐る恐るというように、ラデ殿下が訪ねてくる。

「あー、まあ、色々ありました」

そんなラデ殿下に、私は苦笑いをしながらそう答えた。灰斗様達との関係を説明しようとする、すっごく時間がかかると思うのでね。その辺は、また時間のある時にでも話そうと思います。

そんな私の返事に、ラデ殿下はやけに神妙な顔をして俯いた。ぽつりと、「風の精霊王……実在したのか……」と呟く声が聞こえる。

しかし、精霊王様ってそんなに珍しいものなのかしら？ だって、ホームズさんとワトソンさんは、未だに身じろぎもしないで私を凝視してるし。まさに、驚愕！ って顔。もしテレビだったら、驚愕の事実が発覚！ その内容とは！？ ってテロップが入って、CMに行く直前みたいね。

うーん、あまり精霊王様方についての話を聞いたことないから、その辺のリア感？ が今一つ分からないのよね。

存在自体不確かなものなのか、人魚やユニコーンみたいに神話級とか伝説上の生きものなのか、はたまた、めっただに見ないけど、運が良ければ見ることもある、四つ葉のクローバーとか、コアラのーチの眉毛のあるコアラみたいな、ラッキーアイテムくらいなのか。そもそも、人々にとって、精霊王様達ってどんな存在なんだろう。テミズ教国では、光の精霊王様は神様扱いだったけど……。あれ？ もしかして、他の精霊王様達も神様扱い、とか？

よくよく考えたら、彼らの、世界における立場とか全く知らなかったことに気付いて、うむむと頭を悩ませていると、遠くの方から小さく怒鳴り声や金属音などの喧騒が聞こえてきた。

その声に、はっと我に返ったホームズさんは、何かと複雑そうな

眼を私に向けながらも、しばらくじつと耳をすませた後。

「どうやら、皇子殿下の救出隊が到着したようですね。こいつらは我々に任せて、お二人は先に救出隊と合流して下さい」

「たぶん他のやつらは救出隊の方に出張ってると思うやさから、二人でも行けると思うやさ」

ホームズさんの美声に、ようやく我に返ったワトソンさんも、流れる緑色の髪をしきりに撫でつけながら、おかしな苦笑いでそう続けた。もしかしたら、あの髪を撫でると落ち着くのだろうか。見た感じ、表面はつやつやで気持ちよさそう。

いや、たぶん、今の状況って、無事脱出できるか!? って緊張感が、助けが来たああああ! って喜ぶ場面なんだと思うんだけど、灰斗様のご登場と私の発言のせいでおかしな空気になってる気がする。しかも私の手には芋。え……いや、何かすみません。

さー! 緊張感上げて行こー!!! って、野球で試合が始まる時のキャッチャーみたいな掛け声上げたいくらい、ぐだぐだ感が漂ってるんだけど、大丈夫? この状況。

まあ、何となく、「じゃ、じゃあ、先に行ってますね」「ええ……こちらはお任せください」「あ………すまない、頼む」「ええと、うん、大丈夫やさ」という感じの、ぎこちない会話の後、私とラデ殿下は牢獄部屋の入り口の重厚な扉を潜り、外へと出た。

ラデ殿下が先を走り、私はその後が続く。

牢屋の外は、人二人が並んで歩けそうな幅の、長方形の石を並べ

た石造りの通路で、外から光は差し込まず真っ暗なため、所々に灯りの松明が灯してあった。でも、松明の間隔が広いせいで、通路の先の方は真っ暗でよく見えない。

そんな中を、躊躇うことなく縦に並んで走っていたわけなんだけども。ある程度走ったところで私はふと、あることに気付いた。

「……………殿下、ここさっきも通ったような……………」

「……………気のせいだ」

後ろから恐る恐る声をかけてみたのだけど、ラデ殿下は正面を見たまま、そつぷっきらぼうに返した。

いやいや、絶対気のせいじゃないですよ？ あの山積みのお樽とか山積みの洗濯物の籠とか、何か嗅いだことのある匂いの山積みの柑橘系果物とか、もう三回ぐらい見ている気がします！

そんなことを言おうか言つまいか悩みながら、そつとラデ殿下の横顔を窺つと、何か無表情の中に必死さが感じられた。

あれ？ これって、もしかして……………。

「迷ってたたり……………とか？」

「……………」

ラデ殿下の横顔を斜め後ろから窺い見ながら、そつぽそりと言ってみると、ラデ殿下は何も答えず、顔は正面を見たままだった。けれど、松明の下を通ったときに見えたその頬が、松明の明りのせいでは無く、ほんのりと赤くなっている。

ここへ来ての、方向音痴というドジっこ性質を見せつけられた私は、そのギャップにつきゅんきゅんしていた。あーもう、この子本当に可愛い可愛い！

つい口元が緩んでしまい、走っているせいで若干息を切らしてハアハアしながら、だらしないにやにや顔でラデ殿下の背後を走る姿は、ラデ殿下の救助隊の人に見つかったら、真っ先に私が犯人として捕獲されるほどの怪しさだと思う。

そして、ラデ殿下を誘拐したのは、ストーカー行為によるものだろう！ 素直に吐きやがれ！ と卓上ライトを突きつけられながら言われるんだ！

6・たどり着いた先。

こうなりや、どこまででも付いて行きます！ とばかりに、ラデ殿下の後ろに続いてひたすら走っていると、いつの間にか見たことの無い つまり、一度も通っていない 通路に出ていた。ええええええ……。……。

そりゃあ、いつまでもぐるぐる回ってるつもりは無かったから、違うところに出て嬉しかったのは事実だけど、ちよつとがっかりもしてしまった。だってさー、もうちよつと無自覚方向音痴なラデ殿下の迷走っぷりを見ていたかったのよ。密かに困ってる姿も可愛かったし。はっ！ どどどどどどドSちゃうで！

ほっとしたような寂しいような、複雑な気持ちを抱えながら、その通路を進んでいると、通路の突き当たり、松明の光の届かない暗闇の向こうに、ぼんやりと鉄製の扉が見えた。

その、いかにも重そうで頑丈そうな扉は、暗闇の中でうつすらと鈍い光を放っており、その言いようのない不気味さに、ラデ殿下と扉の前に立ち尽くしてしまう。

いや、今までの廊下に並んでいたような、木製の扉じゃないから、もしかしたらこれが外への扉かもしれないんだけど、どうにも開けるのを躊躇ってしまう迫力だ。なにやら禍々しい重圧が。

暗闇の中で、そつとラデ殿下のいる方に目を向ければ、気配でラデ殿下もこちらを見たような気がした。

そして、ラデ殿下が扉の方に動くのを感じながら、私もその後に続く。

カチャリと音がして、ラデ殿下が扉の取っ手に手をかけたのが分

かった。そのまま、体の後ろに体重をかける気配を感じていると、ギ、ギ、ギというような金属が擦れる音が聞こえ、あまりの気味の悪さに、背中にぞぞぞぞと怖気が走る。

やがて、キィーと滑らかに扉が開く音が辺りに響いた。

あー、うん、結論から言いますと、外じゃなかったです。だって、部屋の向こうも真っ暗だもの。しかも、開けちゃあいけなかった扉っばいです。

開けた途端、扉で遮断されていた、陰湿で濃密な瘴気が、煙のようにもわっと雪崩れ出してきて、私はうっと手で口元を覆って、後ずさった。

同じように後ずさる足音が聞こえたので、きつとラデ殿下も扉の傍から離れたのだろう。

ある程度の瘴気なら、普通の人は気づかなかつたりするんだけど、この濃い瘴気はラデ殿下にも分かつたらしい。

しかも何か、扉の奥から、ギャツギャツとかキィエエエみたいな、不気味な生き物の声のようなものが聞こえるんですけど！ やべえ、魔界への扉を開けてしまったのかもしれん。

いつそう、もう一度あの扉を閉めてしまおうかとも思うんだけど、遠いのよね、扉まで。瘴気から逃げようと、随分下がってしまったからね。

まさかこんな状況で、「殿下、扉の開けっ放しは良くないです。閉めてきてください」とは言えないしね。バレたら後で国民の皆様にもボコられそう。でもその前に、ハティ様に吊るされそうだが。

ああ、とりあえず、あの扉の向こうの状況が見えれば……！ 灯りとか無いものかしら！ とぎりぎり歯軋りしそうになって、ふと気が付いた。あ、私、光の魔術使えるじゃん。と。

いや、うっかりしてましたよ！ だって、ここまでで魔術使う

ことが無かったから、存在自体すっかり忘れてたわ。当たり前だけど、元の世界では使えなかったし。一年ちよい程度じゃあ慣れないよねえ。

「照明」

そつと手を差し出して、そう呟くと、掌の上にバレーボールくらいの光の玉が現れた。

これは、以前エル殿下に教えたのと同じものです。

蛍光灯のような柔らかいクリーム色の光が辺りに広がり、私より少し前方の壁際にいたラデ殿下の姿も、ようやくはっきりと見えた。私の手の上の光の玉を驚いたように見ていたラデ殿下が、はつとしたように私の顔を見た。多分、ラデ殿下も私が魔術師だと忘れていたんだろう。見事にここまで何の役にも立ってなかったし。

ナンデ今マデ使ワナカッタんだ……と、ラデ殿下の目が語っている気がするけど、まあそれはそれで置いておいて。私は、その照明の玉を扉の方へ向かって放り投げた。

すると、その玉は入り口の上ぎりぎりを通り抜けて、部屋の中へと入ってしまったようだった。

しかし、どうにも部屋の中に入ってから、光が弱くなったなあと思ったら、何か黒い瘴気が部屋中に霧のように充満してるから、そこに吸い込まれた光の玉も瘴気に光が遮られているようだった。

うつつ……もうこの部屋、本当に一体どうなってんのよ！

さすがに、これだけ瘴気をまき散らす部屋をそのままにしておくのもどうかと思い、いっそすつきり浄化した方がいんじゃないかと考えながらも、一応部屋の中の状況を確認すべく、私は恐る恐る部屋の方へと近づいて行く。

その私の行動に、ラデ殿下が心配そうに目を細めたけど、私は、行ってくるぜとばかりに顔の横で拳を握りしめて見せて、ゆっくりと足を進めた。

すると、そんな私の後ろに付いて、ラデ殿下も扉へ向かって歩き出した。

私よりも瘴気への耐性が無いみたいだから、近づくのも辛そうだし、さっきのところまで待ってもらっても良かったんだけど、やっぱり女性を一人で危険なところに行かせられないという、騎士道精神でも働いているんだろうか。

単なる怖いもの見たさとか、肝試しの感覚だったら、先に突き出してあげるけど。

もくもくと溢れ出るような瘴気に怖気づきながらも、とりあえず入り口までは到達した。

そこで、入り口の淵にしがみ付いて、そつと部屋の中を窺ってみる。ちなみに、私の後ろからラデ殿下も覗いていた。

部屋自体は大きく、廊下と同じように長方形の石造りの壁で覆われているようだったけど、私達の位置から見たのは、光の玉の明りが届く一角だけだった。

しかし、そこに広がる異様な光景に、私はひっと上げそうになった悲鳴を殺して、口元に手を当てた。ちらりと背後を窺えば、ラデ殿下も真っ青な顔で部屋の中を凝視している。

フーフーという息遣いに混じって、ギイギイ　グギヤアアアといった、甲高い獣の咆哮のような声が響く。

ガチャガチャと鎖の揺れる音と、ギシギシという金属が軋む音が、やけに不気味さを掻きたてていた。

その部屋の中に置かれていたのは、大小様々な大きさの、鉄格子

が嵌められ鎖で巻かれた檻。そして、その中に閉じ込められていたのは。

「……魔物、か？」

呟いたラデ殿下の声は、しかし、どこか訝しげだ。

その檻の中にいたのは、大きかったり小さかったりと、色んな種類の魔物だった。ただどれも全身真っ黒で、影に覆われた檻の中から、黒光りする腕を伸ばして地面を引っ掻いていたり、爛々とした目をぎよろつかせながら、檻の外を窺っている。

だけど、その魔物の形は、どれも見たことが無いもので。

一応私も、ギルドに登録する際に魔物図鑑を見せてもらったし、その全てを憶えているわけではないけど、おおざっぱにこんな種類がいるのかと把握したつもりではいる。

しかし、ここにいる魔物達は、どれもその中の種類に当てはまらないのだ。ましてや、こんな闇を凝縮したように真っ黒で、奇妙な形の、禍々しい瘴気を纏わせた魔物なんて、旅の途中でも見たことが無かった。

いや、この瘴気の不自然さなら、以前にも感じた気がする。あれは確か、テミズ教国の貴族の屋敷に忍び込んだときに……。

胸の奥に、ジリッとした危惧感が沸き上がる。

檻に入れられた、奇妙な形の魔物達。そして、ここは“闇幸福論者”に関係する者達のアジト。これが何を意味するのか、今はまだ分からず、その奇妙さにぐっと眉間に皺を寄せた。

しかし、とりあえずこれをこのままにはしておけないと、背後の

ラデ殿下を振り返る。

「この状況を放置しておくのも危険なんで、この部屋ごと“浄化”します」

そう言えば、ラデ殿下も神妙な顔でこくりと頷いた。

部屋の入り口に立ったまま、両手を部屋の中に翳して、魔力を集中する。

「浄化！」

そう小さく声を発して、手元に集まった光を爆発させる。目を焼く様な真っ白な光が幾筋にも伸び、やがて部屋中を覆い尽くしていく。

それは、檻をも飲み込み、キィイヤギャツというような短い声を残して、魔物達を塗り潰していく。

部屋中が白い光に包まれ、入り口からもその光が噴き出して、廊下まで清廉な白い光が伸びる。

そんな中、タタタツと軽い足音が二つ重なるようにして聞こえてきた。

「殿下！ ナツキさん！」

遠くから聞こえたその声に、相手が誰なのかは分かっただけど、私はただ真っ白な光が溢れ出す部屋の方へ顔を向けたまま、振り返らなかつた。

やがて、浄化の光がゆっくりと収まっていく頃、二つの足音は私

達から僅かに離れた辺りで止まった。

光が消えた室内には、さっき投げた光の玉がぼっかりと浮かんでいて、何の変哲もない石造りの壁と、空になっただいくつもの檻を浮かび上がらせているだけだった。

静まり返った空間で、私はその不気味に錆びついた空の檻を見ながら、背後のホームズさんとワトソンさんに声をかけた。

「“闇の組織”とは、一体何なんですか……」

そう言いつつ振り返れば、二人は驚愕の表情を浮かべていたのを、やがて苦み走った苦悩の顔に変えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8297s/>

華の降る丘で

2011年9月9日21時51分発行